
夜を駆ける魔法使い

三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を駆ける魔法使い

【Nコード】

N68430

【作者名】

三

【あらすじ】

夜に街を歩いちゃいけない事を知った。何か後ろから来てるし、さすがにまだ死にたくはない！　ちよつ、ホラーはリアルでは絶対にいらねえーーーー！！！！！！

処女作です。

感想は誰からでも受け付けますので、気楽にどうぞ〜

始まりは唐突に（前書き）

初投稿です。

誤字、脱字があつたらすみません。

携帯から打ってるんで短いと思います。

受験生という事もあるので更新は遅いかと……。

それでも良いよ、と言つ方はお読み下さい。

始まりは唐突に

俺は街灯の光を頼りに走り続けた。

息は荒くなっていく。いつ終わるか分からない鬼ごっこなんて最悪だ。

- - - 何処まで行くの？もう、良いじゃない。

後ろから少女の音がする。振り返って見たら終わりの気がする。

- - - 見るなよ、俺！

そう自分に言い聞かせ、スピードを上げようと右足を大きく振り上げる。

..... 振り上げようとした、が正しい。

何故なら、足に黒い“何か”が絡まっていたからだ。

「ちよっ！？」

バランスを崩してしまい思いつきりこける。

うつ伏せ状態の俺の上にトンツと軽い音をたてながら座る誰か。

「鬼ごっこは..... お終いだよ？」

- - - サヨナラ、俺。

うん、諦めが肝心って聞いた事もある。心残りは..... 彼女が出来なかったぐらい。

俺は力強く目を瞑る。

- - - どうぞ！ 一発で殺ってくれ!!!

.....あれ？

何時まで経っても痛みとかこない。いや、気が緩んだ時に来るのか！？

.....来ないな？

目をゆっくり開ける。

ジーーーーー

眼前に少女の顔。飛び退こうとするが、背中を押さえ込まれている。

でも、あれだな。

美少女が眼前とかマジヤバイ。何かニヤニヤ笑ってるし、勘弁してくれ。

その美少女が口を開く。さあ、何だ！？

死ぬのか！？ 俺は！！

「アンタ、馬鹿？」

「いきなり、罵倒！？ 酷すぎるだろ！」

「だって、一人漫才みたいなのしてるんだもの。.....こけた時に頭でも強打したの？」

言葉が突き刺さる.....。痛いです、母さん。

「ま、いいや。《プラーナ》が奪えれば良いし.....って事で」

少女の手が俺の体に吸い込まれるように入ってくる。痛いわけじゃないが、体の中を探られているのが分かる。

「――止めた。」

手が何事も無かったかのように抜かれる。それと同時に体を押さえ込んでいたモノが無くなる。

――自由になった？

「いや、なってないし。廃人にしなかった事を感謝しなさいよ。」

「一応、心の声なんだから返事しないで……。」

実は俺が少女をしつかりと見たのは、この時。

綺麗な赤髪。

紅玉のような瞳。

やっぱり美少女だ、なんて言葉が出る。

「褒めてくれてありがとう。《魔術師》」

――誰が？

後ろ？ 誰もいない。

左右？ 誰もいない。

少女は俺に指を突き付けてきて

「やた！ 自覚無しの逸材。しかも、誰も手をつけてないなんて！」

何か一人でテンションを上げている少女。

逃げて……良いよな？

後ろの確認をしながら後ずさる。

後ずさるうとする。

しかし、手を掴まれ

「安心して、アンゼロットみたいな奴隷にしないから。」

アンゼロットと言った時に、怒声と悲鳴が聞こえた気がする。

てか、奴隷って……現代でするな。

少女は、年に似合わない美しい笑みを浮かべ

「私は魔王。」

――魔王、ネビア・ロスア――

俺の意識は反転した。

魔王の講座（前書き）

次話投稿の仕方がわからなかったです。

……間違っ てないよね？かなり心配です。

柊蓮司はかわいそうな事になるかも……………。

柊力を発揮するかは分かりませんが、柊蓮司は出す気です。

……………いつの事になるのやら。

魔王の講座

俺が目を覚ましたのは古い城のような所。もふもふしたベッドが気持ちい……………

「って、何処だよ!？」

飛び起きて窓にかかったカーテンを開ける。

外に見えるのは森。

何処までも続く森。

地平線の向こうさえも森だと確信できる程に。

「森に入ったら生きて帰れないよ?」

部屋の扉の方から、あの少女の声がする。

ゆっくり振り向く。

そこには満面の笑顔をした少女。その横には銃を腰に下げた大学生ぐらいの女性。

「たしか、……………ネビア・ロスア?」

「ええ、良かった。聞こえて無かったかなって心配したんだけどね。」

少女……………ネビア・ロスアは声を弾ませる。

「……………魔王?」

「そう、私は魔王。侵魔と呼ばれる者達の王……………の一人。」
最後のところだけ声が小さくなる。

「侵魔って?」

「侵魔、エミューレイターと言って裏界って言う異世界に住んでる。まあ、地球の方が心地良いんだけどねえ。」

ネビアはベッドに腰を掛ける。女性は壁にもたれかかっている。

「あ、君の名前聞いてないや。何て言うの？」

俺の手を取り、無理やりベッドに座らせられる。

「俺？ 流々 影司」

「んじゃ、影司。私が強い《ウィザード》にしてあげる！」
女性からは溜め息が聞こえてくる。

「……すみません。」

なんだか謝らなきゃならない気がした。

「ウィザードって何？」 「名前の通り魔法使いの事で世界を守るって奴らの事。でも、影司は私の物だからね！」

「……日常に帰りたい。きつと無理なんだろうけどな。」

女性の方を見ると、合掌している。

「……止める気なしですか。そうですか。」

ああ、姉貴……助けて。

無力な自分に涙しそう。そうだ。諦めが肝心だ。

そうして俺はネビアの為に《ウィザード》になる事になった。

まあ、ネビアが美少女な事で妥協しよう。

聞いた範囲の話では、アンゼロットって人は傍若無人らしい。関わり合いにならなくて良かった。

柊蓮司、頑張れ。

ただの不登校児だと思ってたがあいつも大変だったんだな……。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介の筈がキャラ対談に……。。

登場人物紹介

登場人物紹介

名前

流々 影司

リュウリュウ エイジ

年齢 17歳

性別 男

性格

姉貴が強かったので女性は大切にする。

特色

《魔術師》として魔王級の才能がある。

設定

姉が一人。一人暮らし。

姉弟ともに輝明学園に通っている。

- - - - -

名前

ネビア・ロシア

年齢 見た目は15歳

性別 見た目は女

性格

新しいモノに目がない。

特色

クラスで言うところ魔術師。

設定

服装はゴスロリ

- - - - -

名前

速水 燕

ハヤミ ツバメ

年齢 19歳

性別 女

性格

淡々としている。

特色

ネビアの落とし子。

銃と隠し持っている暗器による戦闘をする

- - - - -

名前

流々 加奈絵

リュウリュウ カナエ

年齢 18歳

性別 女

性格

無口な方。

瑠璃と一緒にいる事が多い。

特色

魔物使用で、白銀のワイバーンを操る

他にも何かある。

- - - - -

影司「作者、銃を持った女性の名前も載せるのか？ まだ呼ばれてもないぞ？」

作者「いや、載せないと次に載せるのが何時になるか……………」

影司「計画的に書け。第一に俺の姉貴発言で初めて姉貴がいる事を知ったぞ。」

作者「いや、ね。元は自分が遊んでるキャラなんだ。でも、遊んでレベルが高く……………」

影司「おい、出すのか！？ 高レベルなんだろ！？」

作者「出したい、つてのが本音。でも、100ちよつとの攻撃を弾いちゃうから……………」

影司「あの姉貴は最早人間ではないな。」

作者「GMにも、プレイヤー仲間にも言われた。それにプレイヤー

本人（作者）の性格が天然外道なせいで彼女の印象も悪くなるし……。」

影司「天然外道？」

作者「自覚無しに外道発言してるから。」

影司「……社会に出れるのか？ 作者。」

作者「気を付けてたら大丈夫だから……。」

影司「な、なあ！ ネビア・ロスアの元は何なんだ？」

ネビア「あつ！ 私も興味ある！」

作者「……女神転生の赤男爵さん。」

ネビア「……安直。」

影司「名前を二つに分けて『ア』を付けただけって……。」

作者「死人を操る美少女とか……良いじゃん！」

影司「叫ぶな！！」

ネビア「……。良いわね、それ。」

影司「二人とも勘弁してくれ……。」

燕「（合掌）」

ネビア「あつ、燕もいたの？ 少しは喋ったらどう？」

燕「影司、ネビア様に逆らうな。」

影司「燕……さん？」

燕「死人を操るんだぞ？ 影司が死にたいなら構わないが……」。

影司「全力ですいませんでした……!!」

加奈絵「うわ、弟の土下座だ。写メとろ。」

ぴろりろり〜ん

作者「加奈絵さ、来ていきなり写メとる？」

影司「加奈ねえの鬼畜。あくま、外道!!」

作者「ほう、外道か。」

加奈絵「え？ 死にたいって？ オーケー!! ワイバーン、来て!!」

影司「ああああああああ!!!!」

ネビア「んじゃ、次は本編でね〜。あつ、影司。死んだら怒るよ〜。」

学校優先？世界優先？（前書き）

ほ、のぼの………なのか………？

私にはワカラナイ、ワカラナイ………。

ナイトウィザードにほのぼのは無いのか？

あると信じたい！ 信じ………たいです………。

学校優先？世界優先？

ネビアは、アンゼロットとは違った。

おかげで通学路をのんびりと歩く事が出来る。

【本格的な訓練？ 学校が終わってからでも別に良いよ？ それに留年せずに卒業したら時間も多くとれるし。】

柊蓮司が聞いたら俺が魔剣で斬られそう。

ネビアが寛大で良かったと思い始めた。

何故なら……。

「くれはああああ！！裏切ったなあああ！！」

「は、はわ？ 違うもん！ 私じゃないもん！」

柊蓮司と赤羽くれはだ。

ちなみに柊はアンゼロットのマジックハンドみたいなのに追われている。

「何あれ、かわいそう」

くれはの方は、柊から逃げていた。

「くれは以外に行くって言ってねえんだよおおおおおお！！！！」「そんなの知らないよぉー！！！！」

「つか、柊。お前は学校以外の所に行く暇が無いんだから分かって当たり前だろ？」

俺の考えを肯定するかのように

『柊さーん！！ 貴方の行く場所なんて他に無いんですから分かつ

て当たり前ですよ〜!」

よく考えたらかなり酷い発言だよな。

「ご愁傷様、柊。」

『お仕事ですよ〜! はいか、イエスで答えてくださいね?』

「ノオオオオオ〜!」

「柊、行つてらっしゃーい!〜!」

微かに笑っているアンゼロットの声。

慟哭する柊。

安堵するくれは。

周りにいるウィザードの人間は合掌。

「流石、柊力。」

「ああ、あの周りの不幸を吸い取るとか言つ。」

「ありがたや〜。」

柊蓮司。

今日も世界を優先し、学校を休みました。

流々影司。

今日も学校を優先し、世界を放置しました。

そりゃ、誰だって留年はしたくないさ。

遠くの方では、姉貴がツインテールで鈴の音を鳴らし歩く少女といった。

「パールクール、お弁当をあげるから情報を!」

「嫌ああああ！！　その兵器を目の前から除けたらあげるから！！　早く除けてえええ！！」

駄目だ、姉貴の料理は最終兵器なんだ！！

あれを口にすれば、一瞬で死ねる！！

体が恐怖で震える。

あの弁当箱の中に“物体X”があるのか！？

――何とかしないと！　いや待て、落ち着くべきだ、俺。下手に触れて落としてみる？　それこそ世界の終わりだろ？

深呼吸をして、自分を落ち着ける。そして、姉貴を見る。

そこには、ツインテールの少女は居なかった。

弁当箱も開いてはいない……　よな？　よし！

地球に穴があかなかったんだ。世界の平和は守られたんだ！

何だか無駄に神経をすり減らしている気がする。マトモな人間って存在しないのか、と誰かに問い詰めたくなった。

でも、きっと……　問い詰めたその誰かもマトモじゃないんだろうな。

うん、諦めよう。

俺は学校に歩を進めた。

特異性（前書き）

うう……………。

書いてたら、エラーが激しく出る……………（泣）

直しても直しても変になって……………もしか呪い？

変になってたら、スイマセン……………。

特異性

「《スピリットバタフライ》！」

俺の周りを冥界の燐光をまとった蝶が飛ぶ。

その蝶は魔力で構成された物であり、ただ単に敵を滅ぼす為の物である。

そして、蝶は遠距離にいた野良侵魔を消滅させていく。

冥・虚・水・風

四つの属性を身に秘め

天・地・火

三つの属性を拒絶する。

それが俺の特異性だとネビアに教えられた。

今はネビア直属のウィザードとして動きながら、学園の迷宮月匣で訓練している。

「ふっ！ 《ストリームエッジ》！」

右手に水の長刀を作り出し、近距離にまで近付く侵魔を叩き斬る。

冥属性の《スピリットバタフライ》

水属性の《ストリームエッジ》

攻撃魔装の中ではなかなか強力な物。

その使用による精神疲労はかなりのものだ。

「はぁ、はぁ……………。一人だとキツいなぁ。」

訓練し始めは燕さんが銃撃による援護をしてくれていた。

だが、最近はある程度の実力を付けてきた事から一人で迷宮月匣に潜るようにしている。

まあ、何時までも頼ってたら姉貴に殴り倒されそうなのもあるが……。

O - p h o n e の地図機能を起動させる。

「休憩地点は………少し遠いなあ。」

ピリリツと電話が鳴る。

表示されるのは柊。

珍しい、と思いながら電話に出る。

「何か用か？ 柊。」

『生徒会長の八坂だ。』

- - - 柊の O - p h o n e ですよね？

『すまない。頼み事があつてな。』

- - - 参ったな、ネビアとの予定があるのに。

「残念だが、この後に予定があ……」

『ネビア・ロシアには許可をとつてある。』

「……やる事がずいぶんと早い……と言うか、知り合いなのか？」

『で、頼み事つてのはだな。』

質問を軽く無視されるって結構キツいな……。

『侵……アンゼロットが来た！ 早く返せ！……侵魔の……ぎゃあ
あああああ……！……うるせえ！ 静かにしろ！』

耳が潰れるかと思うぐらいの柊の声が響く。その直後に爆発音みたいなのが聞こえた気がする。

気にしたら駄目だ。聞かなかった事にしよう。

「で、続きどうぞ。」

『ああ、街の至る所から微かに侵魔の気配があつてな……。柊に調査を頼みたかったんだが、忙しくて補習にさえ出れんようだからな。』

「もう卒業ムリだろ。」

補習に出てない理由ってアンゼロットだろ！？ 学校とか退学なんじゃないのか、普通。

『こちらも退学で検討し…「するな！」…柊、時間があいたなら補習に行け、補習に。』

- - - 八坂は使っている O - p h o n e が柊の物だと忘れていないんじゃないか？

『つて事で調べて危険な侵魔だったら、排除して欲しい。』

「ネビアに許可とってるんだったら別に構わないよ。それじゃあ、調べとくから。」

クマのぬいぐるみと裏の気配

今、俺はかなり後悔している。

ファンシーグッズ店で、クマのぬいぐるみを手に溜め息をつく。その溜め息の原因は、ぬいぐるみの値段だ。

一、十、百、千……。

ここまでが良い。

俺が持つぬいぐるみの値段は違う。

二万、と書かれている。

「ありえない……。」

口では、そう洩らす。

しかしだ。このクマのぬいぐるみならば、この値段なのも理解できる。

ブランド、ピルモ。

かなりの人気を誇るファンシーグッズブランド。

しかし、俺はこのグッズから微かに侵魔の気配を感じ取っている。正直に言うとな面倒な事になった。

このブランドのグッズは値段が安価な物から、高価な物まである。それに様々な年代にも受けが良い。

つまり、持っている人間が特定できない。

「参ったな……。」

グッズの中で最大の人気を誇るクマのぬいぐるみから侵魔の気配がする。

周りを見るとクマのぬいぐるみを買っている人々のプラーナが少しずつ、少しずつどこかに流れているのが分かる。

「下手をすれば……死人がでるな……。」

俺が悩み込んでいると

「あ、影司〜！」

髪をマジカルリボンでポニーテールにくぐった姉貴が近寄ってくる。

「珍しいね？」

そう言いながら姉貴は俺の持っているクマのぬいぐるみを見ていた。

俺は咄嗟に思考を切り替える。

「加奈ねえも普段はこんな所に来ないだろ？」

俺がそう言つと姉貴は頬を膨らませ

「うわ、影司が酷い。」

そう言いながら俺が手に持っているクマのぬいぐるみを奪い取る。

「……………あれ？」

姉貴は、ぬいぐるみを見て間抜けな声を上げた。

一方その頃。

「ルー・サイファアの手駒が動き出したわ。」

「私にそんな分かりきっている事をいちいち言わなくて良いわよ？
ネビア。」

暗い部屋の中でチェスのをする二人。

一人はネビア。

もう一人は、軽いウェーブのかかった銀髪。
そして、学生服にポンチョという出で立ち。

ベール・ゼファア

裏界の大公である彼女はチェスをしている手を止める。

「あんたの《魔術師》が動いてるわね。」「ええ、良い経験になる
でしょ？」

ネビアは裏界の大公であるベール・ゼファアに対して軽い調子で話
す。

「分かってるの？ 下手に関わらせれば……。」

「良いじゃない、別に。関わらないなんて……」

「……出来ないんだから」

ベール・ゼファアは、ネビアの言葉に笑みを浮かべチェスの駒を動
かす。

「チェック・メイト。」

ネビアは立ち去り

近くにひっそりと居たりオン・グンタは呟く。

「0勝、2000敗……。また……。勝てない……。」

その呟きに、クスクスとベール・ゼファーは同意しながら笑った。

買う決断と戦う決意

クマ。

クマ クマ クマ クマ クマ クマ

目の前のクマのぬいぐるみ……だったモノ達。

「は、はは………。」

姉貴がぬいぐるみに気付いた物。

「このぬいぐるみさあ。他より“この赤い宝石”が多いよね。」
「赤い宝石って、ルビーだろ？」

姉貴は首を横に振る。そして、悩み出す。
俺はその“赤い宝石”を見てみた。

「……？ ……！？」

宝石なんかじゃない。

一度目は違和感を感じ、二度目は魔力感知を使ってみて分かった。
この宝石に見える物質は壊れる事で意味を為す。壊れた瞬間に所持者のプラーナを吸い出す凶器。

その宝石っぽいモノを指摘した姉貴は店員さんと話している。

「へえ、宝石が多いのは限定品だからなんですか。限定品なのに

チラシは無いんですか？」

「……実のところ、チラシを出さない理由が。」

店員さんは喋りたかったみたいで姉貴にその“理由”を小さな声で話している。

俺は隣で盗み聞き。

「限定品を飾って、チラシを貼ろうとしたんですよ。あ、これです。」

姉貴はチラシを見て

「宝石の数、違いますよね？」

「そうですね。ですから、貼らない事になりました……。」

「チラシと違うって内容の苦情がきたら困りますもんね。」

ずけずけ言う姉貴に尊敬する。尊敬はするがそこにしびれないし、憧れもしない。

「え、あ、まあ……そう言う事です。」

「あ、面白い話ありがとうございました。」

店員さん、苦情がこないか心配でしたよ。

まあ……、姉貴なら口が滑ったとかで誰かに言いそうだけど………。

「ん？ 影司、何か失礼な事でも言った？」

「一切合切、失礼な事は言っていないです。誓ってもいいです。」

後ろに前足の無い白銀の竜がうつすらと見えたので全力で土下座。

――さすがに姉に殺されたくは無いです。
周りの眼が痛いけど、死ぬよりマシだ。

姉貴って呼んだ時に、

「名前で呼べ！」

とか言いながら五分の四殺しにされた記憶がよぎる。
あれは理不尽極まりなかった……。

土下座タイムを終え俺の知っている事を姉貴に言ってみた。
手伝ってくれたらいいなぐらいの期待をして。

「じゃあ、そのクマ買うんだよね？」

「そうだよ。」

「手伝うから後で頂戴。嫌だったら買うし。」

――なんだ……と。

「加奈ねえ、頭を……打ったのか？」

「何、その反応。」

びよ、病院に。いや、ロンギヌス隊の緊急医療が必要なのか！？

「いや、友人というか……仕事仲間が彼女にあげるかなって。
「……いつも通りで良かった。てか、あげるって何で？」

こんな高い物をあげるって……。しかも、相手は彼女付きだろ？

「戦闘とか色々な事で世話になってるから。」

「それだけ？」

「それだけ。」

二万円をそれだけ扱い…………。

「お金なら大丈夫。ウィザード活動でざっくざくだから。」

「正規ウィザードめ！」

魔王のお付きウィザードだと報酬が無い。

正規ウィザードなんて羨ましくなんか…………。

…………あ、泣きそう。

そんなこんなで、クマのぬいぐるみを買った。

俺はクマのぬいぐるみを中心に月匣を展開する。

《魔導書》に書いてある最も簡単な“プラーナを吸う物質”と“プラーナの貯蔵庫”を繋げる方法を行う。

「……………！！！」

姉貴は俺のシャツの襟首を引っ張る。

しかし、少し間に合わず微かに腕が裂かれる。

「づつ……………！」

俺と入れ替わるように姉貴が前に出る。

「ワイバーン！」

姉貴を守護するかのように前足の無い竜、ワイバーンが現れる。

「……………クマ？」

攻撃を仕掛けてきたのは巨大なクマ。

その後ろから現れるクマの大群。

「は、はは……………」

クマの数にたいして掠れた笑い声が自分の口から漏れ出る。
そんな俺の頭を殴る人がいた。

銃を持った――女性。

ネビアの落とし子

速水 燕。

彼女がいた。

「影司、この程度の侵魔にやられるなよ？」

「燕さん……………」

綺麗な顔に獰猛な笑みが浮かんだ。

銃、アンチマテリアルライフルを侵魔の力を宿させ構える。

俺から少し距離をとり、《瘴気の城塞》を発動させる。

瘴気を周囲に満たす事で自らの力を発揮し易くする。

移動の制限はされるが、燕の攻撃方法は射撃である。故にこの能力を使う事による制限は実質0。

「穿たれよ。」

一度の銃撃で吹き飛ぶクマ達。
しかし、その数は数えること叶わぬ程。

「影司！」

姉貴と燕の声。

俺はクマが溢れ出している原点となっているぬいぐるみを見る。
いや、原点となっているのは“赤い宝石”
あの原点を遡れば、プラーナを集めている者に遭遇する事は明らか。

「影司、君が最も簡単な繋げる方法は悪手だ。」

「う……………」

「愚直に通路を繋げれば相手が感づき対処してくる事ぐらい分かれ。」

姉貴がクマ達を抑えている。

「ワイバーン！ 護りなさい！」

姉貴は《カバリング》という仲間を庇う能力を駆使し、俺等を護る。

「君はやってしまった失敗を向こうの敵を叩きのめして消してしまえ。」

侵魔の力を込めた銃撃は的確に敵を討つ。

「そうだな。俺がやったんだし、行ってくる。」

俺は通路に飛び込んだ。

一の魔王

“プラーナの貯蔵庫”

辺りの光景に目をやる。

プラーナが血のような赤をしており、目が痛くなる。

しかし、そんな空気が何故か分からないが心地よく感じる。

「あ……………。なんだか…………懐かしい…………？」

――懐かしい？

「懐かしいわけがない、馬鹿馬鹿しい。早く行かないと……………」

「どこに？」

背筋に悪寒が走る。

咄嗟に前に踏み出しながら振り返る。

その瞬間、目の前に熱い火柱が立つ。直撃していれば、ただでは済まなかった程の威力である事が分かる。

「…………！？ これは《ヴォルケーノ》！？」

前を見据える。

火柱を抜け出てくるクマのぬいぐるみを抱き締める少女。

しかし、その威圧感は魔王が持つもの。

「なんで避けるの？」

暗に避けるなど言いながら《フレイムハウンド》を少女は使う。
炎によって作られたクマが吠え、俺に突撃を仕掛けてくる。

「……！ 《ウォータービースト》！」

俺も水による鯨を迎撃に放つ。

魔法としてのレベルは、こちらの方が上。

それにも関わらず俺の放った鯨は炎のクマにより消滅させられる。

「ま、《魔力相殺》！」

予備に構えていた攻撃魔装で二度目の魔法迎撃を行う。

「凄いな、二回も魔装で迎撃するなんて。」

「魔王つてのは誰も彼も規格外というか……。」

俺は瞬時に魔装を付け替える。

しかし、幾ら特異性のおかげで強力な魔装などを扱えるからと言っても自身の戦闘能力は所詮は新米ウィザード。

魔装の威力で迎撃できただけであって、自身の能力だけでは迎撃は不可能であり、掠るだけで瀕死の重傷を負う。

「ふっ………！」

しかも、敵は魔王。

接近戦も交えてくる。

《ヒートハンド》。

火属性の中でも基本とされる魔装。手を火炎で包み込むという接近戦専用の魔装である。

ただのウィザードならば使う者は少ない………いや、いないと言った方が正確かもしれない。

魔装を活用するならば、遠距離戦を行える方が使うのに適している。それに魔装を使う類のウィザードならば、接近戦の能力は高くはない。

「くっ…………。《ストリームエッジ》!!」

作り出した水の長刀で、応戦するも回避をするのがやっと。

魔王の右手刀が俺の防御魔装を貫くのを、水の長刀で受け流す。

「回避するだけなら、早く死になよ。」

「……………!。撃え!」

魔王が俺の首をかなりの速度の手刀で薙ごうとする。つまり、右の脇腹がから空気になるわけだ。

そこを狙って《スピリットバタフライ》で作った蝶を放つ。

この蝶はただダメージを与えるだけではない。

邪毒 という徐々に体力を削る性能がある。

蝶に、魔装に気付いたらしく首を薙ごうとした手を咄嗟に防御の為に戻すが間に合わない。

脇腹に当たり弾ける。

「がっ!」

だが、さすがは魔王。

この程度で倒れる筈もなく、その手刀を鋭くこちらに向けてくる。

- - - 貫かれる!

「《カバリング》」

「なっ!」

突如として現れた白銀のワイバーンが俺を庇う。手刀は貫こうとするのだが…………。

「防いで！ 《シールドフォーム》！」

ワイバーンがその言葉に応えるかのように防御の為に翼を盾にするがきん。

「……………は？」

手刀がワイバーンの翼を貫く事はなく、魔王の間抜けな声が漏れた。

「あれ？ 本当に魔王だった？」

「うぐっ……………！」

姉貴と燕が俺の後ろから寄ってくる。

ちなみに魔王は姉貴の発言で心にダメージを受けていた。

――あの手刀、普通のワイザードなら死んでますって。燕さんも深く頷いてるし。

「あ、あの方の復活の為に死ねえ！！！」

魔王は炎属性の中で強力な発動魔法エターナルブレイズの魔法陣を作り出す。

「さて、全力でフルボッコと行こうか！！！」

姉貴は魔物使い特有の強化能力を使い始める。

「ああ、馬鹿な魔王を撃ち倒させてもらおう。」

燕は武器に瘴気を注ぎ込んでいく。

二人とも魔法が発動する前に消滅させる気だ。

「《ブラッククレイン》」

俺も発動魔法を撃つ用意をする。

相手は範囲魔法。

俺が撃つのは単体魔法。

そのおかげで俺の方が完成するのが早いうえに強力でもある。

- - 撃つのもギリギリってとこかな。

後は分かるだろう。

詳しく言うなら……。

姉貴の一撃で十分の五ぐらいを殺し。

燕の一撃で十分の三ぐらいを殺し。

残りの十分の二は俺の魔法で殺りきった。

実際は分体だから消滅しただけに過ぎないんだが………悲惨だな、魔王。

- - それより気になったのは“あの方”って奴だが………あんなり、深く関わりたくはないな。争いに巻き込まれるのも嫌だしな。

俺はまだ知らない。

その争いの中に足を踏み入れるどころの問題ではなく。

その争いの中心にいるという事を。

俺はまだ知らない。

天のウィザード

天属性を扱うウィザード……西宮 計。

彼女は侵魔に家族を殺され復讐を望んでいる。

彼女には力が無かった。

彼女には失うモノが無かった。

彼女には復讐以外の何かが無かった。

何も、無かった。

だからこそ、何かを受け入れるに適していた。

大粒の雨が降り注ぐ。

私の体は傷だらけで、動く事を拒否していた。

一人、復讐に走ってしまったから。仲間の忠告を無視して走ったから。

「痛い……よ。」

目の前さえ、ぼやけて。綺麗な金色が、見える。

綺麗な、綺麗な金色が。

私の視界を染めた。

同時刻。

俺はネビアと燕のお説教をくらっていた。

「あんな軽率な行動をしちゃて……………」

「馬鹿か、死にたがりなのかという話だ。」

ちなみに姉貴は

「別に苦労するのは影司だから良いかなって。」

ナチュラルに酷い。

長時間のお説教が耳に痛くなってきた頃。

「ネビア様！」

下級魔王がネビアの元に走り寄る。

「どうかしたの？」

「アンゼロット飼い慣らしのウィザードの一人が“金色”に包まれて消滅しました。」

“金色”という言葉で、ネビアの顔色が急激に変化する。

「ウィザードは、どんな能力持ち？」

「……………天属性に突出したウィザードです。」

つまりは、天属性しか使えないウィザードと言う事だ。

「実力は？」

「《侍》で、魔装は使いません。」

「天属性云々の話じゃないんじゃない……………」

「ですが、所持している刀は天属性の担い手ならば切れ味が非常に増す魔剣の類です。」

ネビアは渋い顔をして

「分かったわ。貴方は退きなさい。」

「はっ！」

下級魔王は一礼をし部屋を去っていく。

燕の方はネビアが話している間、ずっと苛ついているようだった。

「ネビア、“金色”ってなんか拙いのか？」

「影司、君はルー・サイファーという魔王を知っているか？」

ルー・サイファー。

裏界の大公だったが失脚し、ベール・ゼファーに地位を奪われた魔王。

「一応ぐらいは……………」

燕は溜め息をつき

「ルー・サイファー、またの名を“金色の魔王”と言った。」
「え、あ……………」

ようやく分かった。

“金色”が示すモノとはルー・サイファーという強大な力を持つ存在だという事だと。

もう少し話を聞こうとした時。

ピリリッ

俺の o - p h o n e が鳴る。

「影司、もう帰って良いから。」

ネビアはそのまま思案に暮れていたので部屋から出て、電話にでた。

「“金色”に包まれて消滅……………か。」
「ネビア様、今回の件は私に。」

燕がそう言つがネビアは首を横に振る。

「燕は無茶しそうだから却下ね。」

「……分かりました。」
不満げに燕は部屋を出て行く。

ネビアは一人きりになった部屋でチェスの駒を手中で弄ぶ。

「問題は、ルー・サイファーが復活の為に魔王を生贄に、ウィザードを配下にしたって事ね。」

ある想像が脳裏によぎった。

「……まさか、ね。」

その想像を頭の片隅に追いやり、一つ大きな溜め息をついた。

“金色の魔王”

家への帰り道。

俺は鳴り止んでしまった0 - p h o n eの着信履歴を見ていた。

- - - 西宮 - - -

そう、電話をかけてきたのは西宮 計。

天属性の力を吸収する事で、切れ味を増す妖刀を所有する姉貴の友人。

俺は電話に出る事を躊躇してしまった。

先ほどの会話に出てきたウィザードというのが、彼女である可能性が極めて高いからだ。

同じ性質を持った妖刀が存在するなら違うかもしれない。

だが、それは「存在していればいいな。」という甘い考えでしかない。

- - - 俺は何か出来ないのか……………？

考え込んでいたその時。

紅い月が昇った。

禍々しい紅い光が街を覆い尽くす。

「月匣！？」

通常の侵魔では考えられない大きさの月匣。

紅で染まった空に向かい合う複数の人影。

一方はアンゼロット直属の対侵魔特務機関、ロンギヌスの一部隊。
もう一方は……。

見間違いだと。

あれは彼女ではないと。

彼女は黒髪黒眼だ。

あんな金髪銀眼ではないのだと。
だから、違つと。

信じたい、誰か違つと言って欲しい。

……あれは、西宮 計ではないのだと。

その思いも容易く裏切られる。

「ああ、蠅のように鬱陶しいウィザードめ。」

西宮 計の姿をした金髪銀眼の女はそう言い、刀をロンギヌスに向ける。

「西宮 計。いや、魔王……………ルー・サイファーなの……………か？」

ロンギヌスの一人が恐る恐る確認する。

「ふむ、体はその先言ったウィザードの物。
そして、我こそがルー・サイファーである。」

俺は走る。

だが、距離は遠い。

先ほどの会話が聞こえていた事が異常だと思っ程に遠い。

彼女の発言でロンギヌス達は身構える。

しかし、彼女が本当にルー・サイファーだというのなら勝ち目は無い。

彼らもその事は分かっているのだろう。

ルー・サイファー！。

“金色の魔王”の復活が

――今、果たされる。

「そう身構えるでない。今日は我が復活した事を理解させる為に来ただけだ。」

少し間をあげ、薄い笑みを浮かべながら。

「我はまだ完全に力の戻っていないぞ？　ウィザード、今ならば倒せるかもしれないぞ？」

そう言って期待させる。

恐らく、違う。

絶対に倒す事は不可能なのだろう。

だからこそ、俺は急ぐ。ロンギヌスの者達は無謀と分かっているように
と、世界の為に戦う。

アンゼロットの指示は無い。通信自体が遮断されているのかもしれない。

「アンゼロット様直属ロンギヌス第五部隊！ 行くぞ！」

その言葉を発端に戦闘が始まる。

ルー・サイファアの持つ刀が金色の光を纏う。

「やはり、よく馴染む。この体を選んだのは正解だったか。」

飛び来る魔法を切り裂く事で爆発が起こり、武器同士のぶつかり合
いで火花が散る。

「遅いぞ？」

「っ！！」

魔法がウィザードを軽く突き刺す。
ライトスピア

殺さない程度に手加減された攻撃。

月匣の中心、戦いの場にウィザードが、徐々に集まり出す。

その中に俺も混じっている。

「あ、ああ……………」

そんな声の発生源。

見るとそこにいたのは姉貴。

驚きからか、口から声が洩れている。

西宮 計の友人であった姉貴としては、信じたがたい光景だから、そんな声が洩れているのだと思った。

「ルー・サイファ―」

姉貴は確認するかのように呟く。

着いたばかりのウィザード達は姉貴の発言で目の前の威圧感を理解する。

つまり、あの会話は遠くにいては聞こえないものだったという事だ。

――俺には、はっきりと声が聞こえたのに。

かなりの人数のウィザードが集まった時。

ルー・サイファーは、ロンギヌス部隊を吹き飛ばし、高らかに公言する。

「ここに我、ルー・サイファーの復活を――
――」

途中から言葉が聞こえなかった。

金色の光が、彼女を何故か懐かしく感じて。

その宣言する美しさに目を惹かれていて。

何故だろう。

その姿を以前に。

とても古き時に。

最も近い所で彼女を見ていたような……………。

そんな気がした。

古き時

・・・これは夢か。

侵魔との戦いに備えている巫女と兵達。

彼らとは違う場所で、金髪をした女とくすんだ銀髪の男が話していた。

女は男に尋ねる。

「我の、我らの勝ちで終わると思うか？」

「心配か？ 大公たる貴様が。」

「ベレート、茶化すでない。巫女を媒介とし、世界結界を破壊する事が目的なのだぞ。」

女は器を水で満たし、女性の顔を映す。

男・・・ベレートは、映し出された女性の顔を見て言った。

「なるほど、悩みの種は巫女を守護する者か。」

そして、大きな戦いが始まった。

巫女を守護する女性。

その後ろで巫女は女性を援護する。

女性は膨大なプラーナを使いながら、ハルバードで巫女を襲う侵魔を叩き斬り、突き倒していく。

しかし、侵魔の数が多すぎた。戦っていくうちに女性のプラーナが尽き、体も自らの血で濡れている。

「巫女様……………、私ではもう護る事が……………」。

「貴方は……………よくやりました。あちらの目的は私なのです。」

巫女は息を大きく吸う。

「私を殺さない。」

巫女は笑顔で、自らを守護する者に言った。

「み…こさ…ま…。」

「早くなさい、敵は待ちはしませんよ。」

女性は歯を食いしばり、ハルバードを大きく振り上げる。

「貴方を、守り抜きたかった……………」

そして、振り下ろした。

ベレートはその光景を見ていた。

「ああ、人間。その決断は正しい。」

「ベレート、これを予見していたのか。」

その言葉にベレートは笑みを浮かべる。

「ルー、詰めが甘かったな。人間は貴様の手に堕ちるならば死を選ぶようだぞ。」

「……………まあいい。」

ルー・サイファーは、水の満ちた器を見る。
そこに映し出されるのは全く別の女性の顔。

「時はいずれ巡る。巫女の転生先は見えんが、守護の転生先は分かった。次がある、我らには。」

……目を開ける。

見覚えの……………ある天井が目に入った。

「俺の……家。」

ムクリと起き上がる。

家の中を歩き回るが、誰もいない。
代わりにテーブルにメモがあった。

“ 影司へ

ルー・サイファーがいなくなった時に、急に倒れたから運んだ。

加奈絵”

そんな淡々とした内容が書かれていた。

「倒れた……か。」

さつき見た夢の事を考えながら、時計を見る。

午前八時十五分。

「……………つて遅刻!？」

俺は慌てて学校へ向かった。

そんな影司を見る者がいた。

「どろくむ。かなり危険な状態かもしれん。」

その格好は変態と呼ばれる部類の姿。

実力は折り紙付きのウィザード、“ナイトメア”と呼ばれる男は電柱の上に立ち、マントを風になびかせていた。

動き出す歯車

彼の者は言った。

世界の危機なんて来ないで欲しい、と。

彼の者――柊蓮司は出席日数が足りないと嘆いていた。

「世界の危機より、俺の退学の危機だったのに。こつも厄介事が多くちゃ普通の生活でさえ送れねーよ。」

目の前で苦笑いする巫女服姿のくれは。

「でも、柊がいなくちゃ勝てないんだよ？ ……………モグモグ」

天文部の部室で、柊に勉強を教えているくれはがメロンパンを食べる。

「つーか、こんな状況で勉強なんか出来るか！」

柊は勉強を諦め、ゴロンツと寝転がる。その直後にくればの物理攻撃で起こされるわけだが。

「金色の魔王」かあ……。柊、写し身を倒した事あるんだっけ？」

そう、柊はある事件のさいに仲間と共に戦い辛うじて勝利を勝ち取った。

しかし、今その仲間は、彼はいない。

別の戦いで死に、現代にもう一度転生をした。

今この世界に存在する彼はウィザードではない。

彼をウィザードとして、覚醒させるのは彼女である緋室 灯が許さないだろう。

それにその時に勝てた要因は、ルー・サイファーが仕組んだ計画の隙を狙ったものだ。

以前、勝てた時とは全く状況が違う。

「勝つのは無理だな。」
「はわ、やっぱり。」

くれはは深い溜め息をついた後。

「今、柊は勉強やる！」

場所は変わって、異世界にあるアンゼロット城。

「世界にルー・サイファアの計画の核と成り得る巫女が存在します。

」

アンゼロットの言葉が、その場に集まったウィザード達をどよめかせる。

「何千年も前の計画が、発動しようとしているのです！！」

この情報の出どころは、ナイトメアが影司の夢から得たもの。

「核である巫女を、早急に探し出し！ 城で保護する必要があるります！ ウィザード、貴方達の手で！ 世界を救わなければならないのです！」

保護、そう言っているが実際は身柄の確保。

護りきれない時は……巫女の処分で計画を先延ばしにする。その為に確保しておきたい。

ウィザード達が去っていった後。

「世界の守護者も無力なものね。」

ネビアがアンゼロットの前に現れる。

「ルー・サイファアの計画を阻止するまでの協定に過ぎないのですよ？　ネビア・ロスア。」

アンゼロットは紅茶を入れる。いつも入れているロンギヌスの姿は見えない。

「ベレートが復活すれば私達に勝ち目は無いんだから、そんなにツンツンしないの。」

魔王、ベレート。

その名前にアンゼロットが沈黙する。

「“災厄の魔王”ベレートよ。分かってるんでしょ？」

ネビアは紅茶のカップを持ち、香りを嗅ぐ。

「ベレート……………」

アンゼロットは、その名を何度も呟く。

その魔王の凶悪さを。

その魔王の力量を理解しているからだ。

“ 災厄の魔王 ”

ベレート

くすんだ銀髪、真紅の瞳を持つ男の姿をとり、召喚者が礼儀を見せなければ惨殺されるという程に墮とされる前の王たる誇りを確固として持つ魔王の一人。

その实力はルー・サイファーと並ぶ。

最も厄介な点。

それはルー・サイファーと協定関係にある事。

「ベレートの復活が、この戦いを左右する。」

アンゼロットの言葉に、ネビアが頷く。

「私はもう行くわ。じゃあね、アンゼロット。」

ネビアは転移して、去っていく。

アンゼロットは、温くなった紅茶を飲み干し。

「この戦い、負けるわけにはいかない。」

そう言って、拳を握り締めた。

今、歯車が動き出す。

白銀の竜、勇者の誓い

流々 加奈絵。

ワイバーンを従える魔物使い。

その実力は戦いを経て、高まっていく。
有り得ない速度で高まっていく。

彼女は一般人だった。

しかし、プラーナを奪われた友人を助ける為にウィザードになった。
その時から、ただのウィザードとは違った。自らの力を迅速に理解して、戦いを乗り越えていく。

順応が早過ぎる。

異常だ、と。

ウィザード達は、密かに言っていた。

ある一連の事件を解決した時にルー・サイファアの計画の核を体内に秘めていた事が明らかになったりもした。

だから、奇異の目で見られる事に慣れていた。

加奈絵は激怒していた。矛先はアンゼロット。

「分かりませんか？ 加奈絵さん。彼は古い時代の夢を見ていた。つまり、過去視か……その記憶を持っているという事。」

加奈絵はアンゼロットを睨み付け

「だから？ 危険な存在かもしれないから、隔離するつもり？」

横に立つロンギヌス隊は身構える。

それ程に加奈絵は怒りを剥き出しにしていた。

「仕方ないでしょう？ “もしも”私の予測が合っているなら――

――

「聞きたくもない。」

アンゼロットの言葉を遮って、加奈絵は白銀のワイバーンの背に乗る。

「私が“あの目”で見られるのは構わない。」

ワイバーンの綺麗な白銀が、黒に染まってゆく。

その黒は、ルー・サイファアの計画の核があつた時に発現した精神汚染。ただ破壊を撒き散らす存在になつてしまふ黒。

しかし、だ。

その核が無いというのに何故、黒に変色する？

アンゼロットは、すぐさま取り押さえる為にロンギヌス隊に手の動作で命令する。

精神が汚染されれば加奈絵の意識は無くなる。それなら、加奈絵自体を取り押さえればなんとかなる筈。

「飛べ、ワイバーン。」

その筈だった。

言葉は、はつきりと加奈絵の口から言葉が発せられる。

言葉に従い飛び去っていくワイバーン。

アンゼロットは、驚愕で言葉が発する事が出来なかった。

同時刻

燕は、多くのウィザードに指示していた。

「巫女様を捜し出せ！ “金色”の手よりも、先に保護するんだ！」

現代に転生した巫女の容姿を伝えていく燕。彼女の脳裏には、護るべき巫女の姿が映し出される。

燕は転生者。

転生する前は巫女を守護する勇者。

今は強力な力を得る為にネビアの落とし子となった。

巫女を護りきる為に。

「巫女様、貴方を今度こそは護ってみせる。」

燕は誓う。

自らの悲願を叶えてみせる、と。

まだ見ぬ貴方を護る。

そう誓った。

姉のいない日常

“金色の魔王”の復活から数日が経った。

ルー・サイファーは、大きな動きを見せない。

日常はそれほど変わっていないと思った。

けれど、着実に変化は起こっていた。

燕は正規のウィザードと世界各地を飛び回っているらしい。

侵魔の出現も少しずつ増えている。

世界結界が緩んできているのもあるとの事だ。

一番の変化。

それは――

姉貴がいない事。

「どっかで影司を見てるよ、絶対。だから、安心しなよ。」

ネビアはそう言う。

「俺が姉貴って呼んだら怒って出て来いよ……………」

姉貴のいない日常を一般人には異常だとは思えない。つまり、世界結界による修正が施されているという事だ。

捜しに行こうとしたが、ネビアや八坂などに止められた。

「影司、流々加奈絵はあんたより強いの。」

「流々、お前の姉が死ぬわけが無い。…………魔剣が強度負けしたんだからな。」

八坂は泣きそうだったがスルー。

そんな勢いに圧倒されて捜すのを止めた。

だって、ネビアに

「捜しに行くなら……………逝ってらっしゃい。」

……字が！ 確実に死亡って言ってる……！

うん、正直に言うところになりました。

ちなみにパール・クールが心配しまくってた。

「心配してるわけじゃないんだから！　ら、ライバルが勝手に死んだら面白くないだけだもん！　うう……………、弟のあんたも場所を知らないんだ。この役立たず！！！」

なんか、最終的に酷い事を言われた。

……………って事で現在、姉貴のいない日常を過ごしている。

「ふう……………」

――駄目だ、数日前が濃厚な一日だったから日常に戻りにくい。柊でもいじりに行こうか？

遠くで当たり付きアイスを食べてる柊。いきなりガッツポーズをします。当たりみたいだが…………。

柊の後頭部にサッカーボールが直撃。倒れ込んだ時にアイス棒が空高く、飛んでいく。

綺麗な放物線を描き……………カラスがくわえる。

アイス棒よ、

さようなら。

「うおおおおい！！！」

地面に突っ伏しながら、泣き続ける柊。

……いじるの、止めとこうかな……………。

さすがは不幸な男。

そう思った時に外人女子が寄っていく。

柊は立ち直って談笑している。

「バレンタインと言えばチョコなんですよね？　いつもお世話になってるんでお礼に差し上げますね？　楽しみに……」

やる事は決まった。

「くれはさんに言いに行こう！」

少し悔しかった。

柊蓮司に負けた事が。

俺、流々影司は姉貴がいないのをなんとか乗り切ってみせます。

乗り切りたいです。

「覚えてろよ！！　流々ううううう！！！」

遠くから聞こえる柊の叫びを聞きながら溜め息をついた。

冥魔迎撃前線

モニターに太平洋中央部が映っている。そこには人類と侵魔にとつての敵、冥魔がいる。しかも、大群でだ。

「世界各地のウィザードに通達！ 至急迎撃に出て下さい！」

「世界結界耐久値限界、冥魔の存在濃度適応まで……残り八時間ジャストです！！」

ロンギヌスオペレーターの声が響く。

「まさか、ここまで世界結界が弱まっていたなんて……。世界結界の修復を行いつつ、ウィザードを動員しなさい！！」

アンゼロットもあるウィザードに連絡をとる。

- - 8 : 0 0 - -

モニターに残り時間が表示される。減っていく時間に焦りを隠せないアンゼロット。

冥界に繋がるゲートを塞ぐ事が出来れば、残り時間までの討伐は容易いだろう。世界結界が保てばの話だ。

以前から世界結界が弱くなっているのは知っていたが、ここまで大規模なゲートが開くほどだとは思っていなかった。

「後回しにし過ぎたツケ……という事かしら。」

「アンゼロット！」

アンゼロットが連絡をとったのは柊。

「俺は早く前線に出ないといけないんだよ！」

「柊さん、世界結界を上書きしなければいけません。でないと、いつまで経ってもゲートが閉じません。」

アンゼロットは写真を柊に掴ませる。

「神原 悠、世界結界を上書きする為に必要不可欠な方です。連れてきて下さい。」

その言葉を聞いて走っていく柊。そんな後ろ姿を見ながら、アンゼロットはロンギヌスに言う。

「儀式の準備を……。柊さんが“核”を“持って”きてくれます。」

ロンギヌスは悲痛な顔をして走り去る。

そう。

世界結界の上書き、その儀式は“生贄”を必要とするもの。

神原家は、儀式に必要な“生贄”を育てているウィザードの一族。

そこから逃げ出した今代の“生贄”を、一分一秒でも早く探し出し連れて来ないといけない。

「…………世界の為の小さな犠牲に過ぎない。これまでも、これからも。」

世界の守護者として、多少の犠牲は仕方がない。そう、どんな犠牲も世界を守る為になら仕方がない事なのだ。

アンゼロットには、柊が連れてくるのを待つしかない。

神原 悠は、輝明学園の校舎裏で隠れていた。
この学校に通っているウィザードだが何も知らない幼なじみの所に
会う為に探し回っていた。

追手を振り払う為に何度力を使っただろう。戦いでも疲れ切った体を休ませる。

追手が冥魔の迎撃に行った事で安心していた。

だが、“生贄”に安息は与えられない。

「いた!!」

遠くから走ってくる茶髪の学生服の男。どう見ても高校生ではない。

「ひっ……………！」

無理矢理、体を立たせて逃げる。

「ちっ、待ちやがれ！」

逃げないと死ぬ。

逃げないと殺される。

幼なじみのウィザード、高谷 梓に最期に会いたい。その思いだけを持って逃げる。

逆に柊は困惑していた。

神原 悠を儀式の生贄などとは知らないからだ。

「くそ、時間が……………」

相手が逃げている理由を知るにも捕まえないと分からない。まあ、捕まえてしまえば逃げている理由を知っても後の祭りなのだが……………。

その光景を見た一般人は後でみんなが言った。

「柊 蓮司は男を追いかけて回す趣味がある。」

「早く、早く学校から追い出せ！ 危険だ！」

ある種の疑惑があがった事は事実だ。

哀しい決意

高谷 梓。

教室で一人、懐かしい写真を眺めていた。

小さい頃の悠と梓。

「会いたいな……………」

高校生になった時に、悠とは引き離された。
無理矢理、輝明学園にいれられたのだ。

「悠、どうしてるかな。元気だったら良いな。」

現在、柊蓮司と追いかけてここ中である。そんな事を知らない梓は写真を見失う。

「待ちやがれ！」

窓の外から柊蓮司の大声が聞こえてくる。気になって、外を眺める。

……何で、いるの。

あの少し弱気な顔を私は知っている。

「悠。」

教室から飛び出る。

0 - p h o n e が鳴っているがそれ以上に大切な事。

「悠!!」

目の前を走る柊蓮司を弾き飛ばす。

「ぶげらああああああああああ!!」

どこかに飛んでいったが関係ない。

柊の叫び声に振り向いた悠は、梓を見て目を見開く。

「あ、梓？」

「逢いたかった、悠!!」

遠くでは壁にめり込んだ柊の呻き声がある。

梓は、悠を教室に引きずり込む。

「悠、どうやって来れたの？」

問いかけに答えない悠。梓は見ていて不安になってくる。

「ね、ねえ……………」

「…………梓、好き“だった”よ。」

好き“だった”

その言葉は、梓の目に涙を浮かばせるのに十分なもの。

だが、そんな雰囲気を読まない声がする。

『神原 悠、ようやく見つけましたよ。』

アンゼロットの声。

その声がした瞬間、悠は転送された。

『柊さん、お仕事とても助かりました。』

アンゼロットの通信が切れ、柊も転送される。

「何が起こって……。」

梓は泣き崩れる。

小さな月匣が張られる。その頭を慰めるように撫でる月匣を張った誰か。

「教えてやろう。」

梓の頭を撫でるのはルー・サイファー。

ルー・サイファーの教える真実。それは梓を動かすのに十分な情報。

「あ、あああああああああああああああああああああ！

「!!」

今まで近くにいて、知る事さえ許されなかった真実。

絶叫する梓。その指に装飾の施されていない銀の指輪をはめる。

「さあ、《侵魔召喚師》よ。 “ 災厄の魔王 ” ベレートを召喚する触媒を貸し与えてやったのだ。 - - 彼の魔王の力を借り、その少年を救ってみせるがいい。」

それだけを言つて、ルー・サイファアは消えた。

残された梓は決意する。

「は、はははははははは………。世界なんて、守護者なんて……。 - - 悠を苦しめるもの全部、壊してやる。」

その哀しい決意は、誰にも止める事は出来ない。

アンゼロットは、地底湖にて儀式の準備を進めていく。

「言い残す事がありますか?」

悠は、首を横に振る。

「死ぬ前に梓に会えたから無いよ。」

清々しい笑顔をする悠。彼は、梓の哀しい決意を知らない。

「……………では、先に意識を奪います。」

意識を奪うのは“生贄”が苦しまないようにする為の優しさ。

悠の脳裏に梓が浮かぶ。

……梓だけには苦しんでほしくない。

その思いは、その願いは叶う事の無い虚像。

場所は、ウィザードがない学園の訓練用迷宮月匣の奥深く。

実力のあるウィザードは冥魔迎撃に出ている為、奥の方には誰もいない。

梓は書き上げた魔法陣の上に立ち、高らかに召喚の言葉を紡ぐ。

「汝の名は、災厄の魔王ベレート。」

七色の光を制する魔術の王よ！

我の言ノ葉に従い、現れ出よ！！」

召喚され現れたのは、くすんだ銀髪と真紅の瞳の男。その威圧感、尋常ではない事が分かる。

「久方振りの呼び出しかと思えば、触媒まで使用した召喚だったか。」

触媒を使用した召喚。

通常の召喚では、召喚された魔王は直ぐに帰ってしまう。

だが、触媒を使用した場合は簡易的な契約を交わした事になり、長時間の滞在が可能となる。

男……ベレートは、梓に向き直って言う。

「で、俺に何を乞う。」

真紅の瞳は、梓を見据える。

「た、大切な人が生贄になる前に助けたい。その為の力を貸して欲しい。それで死んでもいい。だから……」

ベレートは、ククツと小さな笑い声をこぼす。

「王に対する礼儀というものが無かったが、特別に許そう。」

梓の手を取る。

「貴様の大切な者の所へ行くぞ。」

次の瞬間、その場には誰もいなかった。

残り六時間ジャスト。

世界は、危機に曝されている。

光の槍（前書き）

これから先、テストなどがある為に投稿が遅れるかもしれないです。

読んでくれている人には申し訳ないですが
出来るだけ投稿していきますので
見捨てないで読んでくれると嬉しいです。

感想もあると励みになるので、よろしく願います！！

光の槍

俺は冥魔の迎撃に出ていた。

ネビアは、気絶しているウィザードを操って戦っている。ちなみに、アンゼロットの許可はとってある。

気絶していないウィザードは、ああはなりたくないと思死に戦う。

「魔装一斉発射!!」

「「「撃て!!」」」

ロンギヌス隊の幾つもの魔装が冥魔を駆逐していく。

しかし、際限なく続く戦いに流石のロンギヌス隊にも疲労の影が見える。

「《操糸》。」

ネビアの操るウィザードは、回避を巧みに行いながら戦う。

この状況が二時間もの間続いている。

『世界結界の上書きの儀式をします。後、一時間程かかります。それまで保たせて下さい。』

アンゼロットの声。

疲労困憊のウィザードにとっては、吉報。

だが、俺はその時に何かを感じた。

「召喚……？ やけに強力な陣を使って……。」「

ネビアが俺の肩を掴む。

「アンゼロットの所に行つて。」「

「儀式の邪魔になるんじゃない……」「いいから！」「……少し待つ」「

ネビアが強制的に転送する。

地底湖、入り口。

ロンギヌス隊の目の前に梓とベレートは現れる。

「娘、俺が雑魚を蹴散らす。その間に行け。」「

「早く来て下さいね。」「

梓がロンギヌス隊に速度を上げ向かっていく。

「行かせるな！！」「

ロンギヌスの一人がそう叫ぶ、が。

「ほう、魔王を相手に人数を裂くか。間抜け。」「

ベレートが指を鳴らした瞬間、高度な発動魔法が展開される。

《高速展開》

魔術師の能力の一つ。

発動に時間のかかる魔法でさえ、一瞬で展開する事が出来る。

「た、退避!!」

ロンギヌスは、回避行動に移ろうとする。

「誰が逃がすか。」

無情な一言。それと同時に放たれる魔法。

《エターナルブレイズ》

魔法陣を媒介に周囲の空間を爆破させ、あらゆるものを燃やし尽くして消滅させる。

「燃え尽きてしまえ。」

ベレートは、燃えるロンギヌスを見下す。

「な、熱っ!」

ロンギヌスの近くから声がする。

俺が転移した所は、空気自体が燃えているようだった。

「な、熱っ！」

その場から燃えているロンギヌスを助けていく。

――ネビアは、こうなると分かっていたのか？

「貴様。」

声。

知っている声。

「魔王、ベレート。」

その名を口にする。

真紅の瞳が、俺の事を見ている。

「出来損ない。」

「っ！ 《ストリームエッジ》！」

その魔王の言葉が、瘡に触る。

水の長刀を作り出し、思い切り振るう。

ベレートも水の長刀を作り、俺の攻撃を防ぐ。

いや、防いだのではなく俺の水の長刀が切り落とされた。

「拙、い…………っ！」

気付けば俺の首が掴まれている。

「出来損ない風情が、勝てるっても？」
「かつ……………」

真紅の瞳は燃えているように見えるのに、瞳の奥は冷え切っている。

「でき、そ…………こない……………なんかじゃ……………」

「ならば貴様は何だ？ 俺の写し身となるべき転生体が、本来通りの性能を持っていないなら…………それは出来損ない以外の何だと言う。」

手に力が籠められる。

「復活の為の体を作った筈だったが失敗作か。」

「…………死ぬ、のか。」

そう思い、目を瞑る。

不意に力が弱まる。

「流石に娘一人では、どうしようも無いか。」

思い切り壁に叩き付けられる。

目の前が霞む。

「貴様に構っている時間が無くなった。」

その気配が感じられなくなる。

自分の呼吸音が響く。死ぬ程じゃない怪我だが、知った事実が痛い。

目の前が暗くなり、何も感じられなくなった。

梓は、地底湖の奥まで走り抜ける。

「悠、後少しで……。」

「お待ちなさい。」

アンゼロットとロンギヌスが立ちふさがる。

「力を振るえない世界の守護者が……！」

「それでも、貴方を止める事は容易です。」

奥に魔法陣が見える。眠っている悠の姿もそこにはある。

「今、あの中に入れば死にますよ？ 神原悠の体内に秘めた魔力を世界に吸収させる事で結界を保つのですから。」

つまり、魔力の塊（神原悠）を世界という存在に喰わせるという事だ。

中に入れば、梓も喰われて死ぬ。

「悠を生贄にするぐらいなら……こんな世界、壊れてしまえばいい！」

アンゼロットは溜め息をつく。

「話し合いにならない。眠りなさい、貴方が眠っている間に全て終わらせましょう。」

ロンギヌスが梓に特殊な銃を向ける。

「撃ちなさい！」

引き金が引かれる。

しかし、弾が出ない。

当たり前だ。銃が真つ二つにされていては、弾が出る筈がない。

梓の前にベレートが現れる。

「間に合ったか。」

「“災厄の魔王”……………面倒な魔王を呼んでくれましたね？」

アンゼロットは、微かに顔をひきつらせる。

ベレートは七種の属性を操る魔王。

ただのロンギヌスでは勝てない。

「召喚者は、神原悠を取り返す事を目的としている。さあ、世界の守護者アンゼロットよ。」

ベレートは、強大な魔力の籠もった魔法陣を展開する。

その魔法陣を媒介とした魔法を撃たれば、流石に拙い。

アンゼロットの顔に、冷や汗が垂れる。

「これだけの魔力が籠もっていれば、世界結界の維持など容易い筈。」

アンゼロットは呆ける。

ベレートが言っているのは、神原悠を生贄にせずに世界結界を維持

する方法だ。

「……………何が狙いで？」

相手は“災厄の魔王”である。

何か裏があるのでは、と思うのは仕方がない事。

「召喚者の願いを為しつつ、冥魔から世界を守る為には最も良い方法だろうか？ ……………冥魔で溢れかえった世界など要らんしな。」

そう、魔王は世界を自らの物とする為に策略を練るのだ。

冥魔のような汚染物は、ウィザードと協力してでも排除する。

今の現状では冥魔が溢れてしまう。

それは魔王としても困るという事だ。

つまり、今の行動は召喚された魔王としては誰でもする事なのだ。

「分かりました、一時的に魔法陣を待機にさせます。梓さん、神原悠を連れ出しなさい。」

魔法陣が光を失う。

弾かれたように梓は、悠の元に走り出した。

「悠！」

悠を抱き抱え、魔法陣の外に出る。

出たのを確認した後、アンゼロットは魔法陣を活性化させる。

「行くぞ。」

ディヴァインコロナ・ザ・ランス
発動魔法

太陽の輝きに匹敵する光の槍を構成していく。

《ドロウルーン》

指が宙を舞う。

魔法陣を光の文字で刻む事で、魔法を強化していく。

「さあ、存分に喰らうがいい――！」

その強大な一撃を魔法陣は喰らってゆく。

喰らう、喰らう。

光の槍を喰らい尽くす。

十分すぎる魔力を得た魔法陣は輝きを薄れさせていく。

「終わ……魔力が結界に転換されるまで、冥魔を片付けてきて下さい。」……人使いが荒いが冥魔の好きにさせるのは氣にくわん。いいだろう。」

ベレートは転移して、冥魔迎撃に向かう。

アンゼロットは悠の眠りを解く。

「……あ、ず………さ？」

「悠、死ななく………本当に良かった……。」

アンゼロットは、二人の邪魔にならぬように城にロンギヌスを引き連れ帰る。

「戻ってベレートの戦いを見なくては………。」

あの名高き魔王を見なくては、この戦いに利益は無いとばかりにアンゼロットは急ぐ。

愚かな勇者

冥魔迎撃には、多くの魔王も参加していた。

しかし、ゲートが大きくなっていくのは防げずにいた。大きくなるにつれ冥魔の種類は増え、強力なモノが現れていく。

ネビアは、ベール・ゼファーヤルー・サイファーほど実力があるわけではない。

故に強力な冥魔と相対していたのだが、徐々に圧され始める。

「っ……………！」

後方から撃たれた炎が、強力な冥魔を穿つ。

その一撃に巻き込まれるように周りの冥魔は、消滅していく。

「失せろ、存在すること自体が汚らわしい。」

ネビアは知っている。

自分よりも遥かに強力な力を持つ魔術師であり、魔王である彼を。

「やっぱり召喚されたのは“災厄の魔王”ベレートだったみたいね。」

その魔力は、強力であり無慈悲。

その魔法は、繊細であり寸分の狂いもない。

「目障りだ。」

大気にある水分を圧縮し作った無数の刃を単体に放つ。

《アクアレイブ》という魔装に狙われた冥魔は、射線上から逃げ切る事が出来ずに消滅する。そのうえ、水の刃は爆散して水の散弾が周りに存在する冥魔を撃ち貫く。

圧倒的な威力。

「影司でも迎えに行くかな……………」

やる事が無くなったネビアは、倒れている影司の元に転移した。

一時間。

ベレートは一時間の間、疲れる事なく魔法と魔装を撃ち続けていた。

ウィザード達は、様々な属性を使いこなす魔王に恐怖を抱く。

適として出て来た時、まともな戦いにさえならない事が理解できる。

「“災厄の魔王”」

万物を統べる魔王の名。

世界結界が正常に発動しゲートが閉じていく。

冥界の深淵から這い出る強力な冥魔は、数が少なくなる。

残りの冥魔は、ウィザードが倒す事が出来る程度のもの。

「俺の仕事は仕舞いだ。さっさと裏界にでも帰るか。……ふん。」

ベレートに向かって飛ぶ弾丸は、展開された防御魔法で弾かれる。

弾丸を放ったのは燕。

「巫女様の敵が生きて帰れるとでも？」

燕は憎悪を含んだ眼で敵を睨み付ける。

ベレートは、その視線を受け止めながら溜め息をつく。

「そこまで死に急ぐか、愚かなものだな。」

「黙れ！ 貴様は、私の手で殺す！！」

宙を走り、銃を撃つ。

ベレートは避けれない。いや、避けない。

弾丸を容易く弾き返す。

防御魔法は使っていない。単純に攻撃力が防御力を上回れなかった、それだけの事。

それでも、撃ちながら走り近付いていく燕。

燕の狙い。

ベレートは、ただの一度も接近戦をしなかった。どれだけ敵が接近しようと、魔法を使っていた。

燕は暗器と拳銃を使い、接近戦で仕掛け倒しきるつもりだった。

相手が魔王では無かったら、それで良かった。戦う気がないベレートに簡単に燕は近付ける。

「消え……」

暗殺針を仕込んだ腕を突き出した。

……だが、その腕は簡単に掴まれる。

「誰が接近戦の出来ない魔王だと言った。」

その腕はギシッ、と悲鳴をあげる。

「あつ、づ……………！」

周りのウィザードは手を出すのを躊躇う。

手を出した所で、助けるどころか邪魔になるだけだと分かっている。

「弱いと思われては困るな。骨の数本ぐらい……折れても構わんだろ？」

「構うわ……！」

ベレートは腕を放し後ろに下がる。

さっきまでいた所に魔剣が振るわれていた。

柊蓮司だ。

「あのタイミングで躲すのか……………」

魔剣を向けてくる柊。

燕は腕をさすりながらも睨み付けてくる。

「どんな魔王か知らねーが、たたっ斬る。」
「助かる、柊蓮司。」

燕は銃を構え、笑みを浮かべる。

柊蓮司は魔王を数人ほど倒している実力者。

「アンゼロットに急かされて来たんだが……………。これの事だったのか？」

アンゼロットとしては、ベレートが完全に復活する前にウィザードを使って殺しておきたいのだろう。

「アンゼロットも……………してくれる。」

逃げる、という選択肢は元々ない。

ベレートは人間を認めはする。だが、人間と同等に捉えられるのは気に食わない。

「鬱陶しい。」

威圧感が増す。

燕の顔が強張る。

何故なら、冥魔との戦いの時とは比べる事が愚かだと思っ程の威圧

感だからだ。

「付け上がるな。貴様等の攻撃などが通用するとも思っているのか。」

この会話の間にウィザード達は、冥魔を倒し終え退避している事は言うまでもないと思う。

明らかな実力差

少し時間を遡る。

それは、残り六時間三十分時点の事。

俺は目が覚めていた。

「出来損ないか……。」

出来損ない。

失敗作。

地面に拳を叩きつけ、涙を流す。

「俺は……何なんだ？」

「影司は影司でしょ。」

急にネビアが現れた。少し疲れたような顔をしているが、気にする程ではないだろう。

「知ってたのか？」

ネビアは答えない。

「俺がベレートの転生体だって知ってたのか？」

「ベレートの写し身が現れたのは、誰かの仕業。なら、早めに決断した方がいいと思うの。」

決断。

何を、決断するのか。

「ルー・サイファーか、ベール・ゼファーか。」

指を一本、立てる。

「ルー・サイファー側なら、影司はベレートに完全になると思う。」

指をもう一本、立てる。

「ベール・ゼファー側なら、影司をベレートにならせない。ただし、問題はルー・サイファーが転生を促すような事をして……」ネビア、我はもうその童に用は無い。「……ルー・サイファー!？」

ネビアが俺を庇うかのように立つ。

突如として現れたルー・サイファー。

「影司には、もう用が……無いって?」

「我の方で契約があつてなあ……。その童に手を出しさえせねば、我に力を貸す、とな。」

「……俺に手を出さなければ……。だって?」

一体、誰がそんな……。

「なるほどね。」

ネビアが、引きつった笑みを浮かべる。

「ほう、何か分かったのか?」

「召喚された時に出来た通路を利用して、完全な写し身を作り上

げるって事かな。」

魔王の召喚。

それは召喚者の魔力で、世界結界を緩和させることで小さな通路を作り、その通路を通じて、魔王本体が微量の魔力を流し込み、簡易的な写し身へとさせる。

それが召喚された魔王の写し身の在り方。

召喚者が通路を閉じてしまえば、魔力の流れが途絶え、写し身は消え失せてしまう。

ネビアが言う方法。

その小さな通路を利用すれば、完全な写し身を作る事ぐらいは容易い。

本来、魔王はその方法を出来ない。

だが、今のベレートは？

通路は開いたまま。

そして長時間の簡易契約を結び、通路を勝手に閉じる事が出来ない状態。

「今なら、完全な写し身に出来るってね。元から狙ってたんでしょ

「？」

「狙っていないければ、あんな小娘などにベレーットの触媒をやらん。」

ルー・サイファーは、刀を向けてくる。

「正面からしか入れんとは………なんと面倒な結界を張ったものだ。」

「契約者の高谷梓を、手中に納めるのを黙って見る気は無いわ。」

ネビアが治癒魔法を、俺に使う。

ネビアと小声で話す。

「アレを相手に、前に出ろって言うのかよ。」

「影司、仕方ないと思って前に出て。」

「いや、死ぬから。」

そんな会話をしている間に歩み寄ってくるルー・サイファー！

「さあ、通せ。」

軽く振るわれた刀が、風を斬る音を出す。

「早く、前！！」

「ネビアが……童とは、戦わんぞ？ 向かってくるなら別としても。」

「……頑張れ、ネビア。」

俺は横に退く。

ネビアに腕を掴まれ掛けたが、避ける。

――勝てない。
勝てる気がしない。

俺が退いたのを見て、ルー・サイファーは笑う。

「ハハハハハッ！！ 残念だったな？ ネビア・ロスア、貴様の味方はいないようだぞ？」

「影司い、後で覚悟しなさいよおおおおおおおおおお！！」

時は、今に戻る。

戦いの為に、近くの地上に降りたベレートと柊蓮司が斬り合っていた。

思い切り振るわれた魔剣を、右手の水の長刀で受け流す。そして、左手刀が柊蓮司の首に掠る。

柊蓮司は、隙を見つけては確実な一撃を狙う。しかし、攻撃は簡単に受け流されてしまう。

「戦いにくいつー！！」

隙を狙っているのに躲される。そして、逆に自分に出来た隙を突かれる。

柊は、至る所に怪我を負っている。
それに比べてベレートは怪我一つ無い。

「せつ!!」

柊の頭の上を通って、燕の上段蹴りが放たれる。
だが、その足は掴まれ、投げ飛ばされる。

「一撃一撃が軽すぎる。貴様等、この程度か？」
「ふざけんな…………。」

柊は一旦、跳び下がる。

治癒魔法を自らにかけ、呼吸を整える。

その間に燕の銃弾が、ベレートに向かって飛ぶ。

銃弾はベレートに届く前に、防御魔装による障壁で弾き返される。

「何だ、もう掛かってこないのか？」

「クソッ、どこの魔王かは知らねーけど調子に乗るなよ!!」

柊が挑発に乗り、再度魔剣を構える。

燕の銃弾が飛ぶのだが、ベレートは、もう銃撃を防ごうともしない。

「鬱陶しい蛾は、少し黙っている。」

蠅ではなく蛾。

“ 蠅の女王 ” ベール・ゼファーが存在するから言い方を変えたのだろつ。

《シルバーニードル》

ベレートが呟く。

すると、地中の金属分子を魔力で集め、無数の針やナイフが生み出されていく。

その全てが燕に向く。

燕の前に、柊が立ちはばかり魔剣を構える。

「くっ！」

燕は今、防御の瘴気を纏う事が出来ない。

何故なら、瘴気を纏えば様々な副作用を伴う。

今、纏えば逆に防御に支障が出てしまう。

「流石に数が多いな。」

「くっ、防ぎきるつもりか？ ただのウィザードならば、弾き返そうとした時点で貫かれているぞ？」

愉しそうに笑う。

柊には、会話する余裕など……無い。

「放ち穿たれよ。」

無数の針やナイフが、一斉に飛ぶ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！
！！」

魔剣を振るい、弾く。

掠る程度の物は逃す。

ただ、重傷や死に至る程の物を弾く。

燕は銃を撃ち弾く。

弾を籠めるのに時間は掛けられない。

最後に放たれたナイフは魔剣によって弾かれずに柊の胴体に吸い込まれるように突き刺さった。

そのナイフは“水”になり、溶けていく。

つまり、そのナイフは……全く別の魔法や魔装による物だったということだ。

物理攻撃を防ぐ為に魔力を消費していた魔剣は、反対に魔法攻撃を防ぐ魔力が枯渇していた。

故に、魔法攻撃であろうと普段ならば問題なく弾けた魔剣が、そのナイフを弾けなかったのだ。

「カ、ハッ……………」

滴る血に気付き、燕は急いで治癒魔法を使う。

傷は深い。

魔法を使わないタイプのウィザードである燕の治癒力では応急処置にもならない。

「柊！ 死ぬなあ！！」

燕の声は虚しく、自分と柊以外の“誰も”いない空間に響いた。

ネビアの怒り

ほんの少し時は遡る。

それは、残り六時間十五分の時点の事。

地底湖の洞窟内に、走る靴の音が響く。

「結構、入り組んでるんだな……………」

俺は、洞窟内で高谷梓を捜していた。

ルー・サイファーの手に渡れば厄介だからだ。

決して、ネビアとルー・サイファーの戦いの余波に巻き込まれたくないから、とかじゃないぞ。

翼を羽ばたかせる音が入口の方から聞こえる。

「鳥……………？ いや、音がデカいから竜か？」

どちらにしる厄介だ。

まだ、高谷梓は見つかっていないと言うのに。

《カースドール》

ネビアは、その魔装を使って複数の人形に低級霊を宿させる事で戦う。

「ドール、盾に!!」

「柔い!」

盾となった人形は、光を纏った刀で軽く切り裂かれる。

ネビアとルー・サイファアは、相性が悪い。

ネビアは、冥属性。

ルー・サイファアは、天属性。

互いに相手の攻撃を受けやすく、与えやすい。
だからこそ、基礎能力が問題になってくる。

「遅い。一秒でも遅れるのであれば、我の眼前から消え失せよ!!」
「ドール、継続して防御行動! 《シューティングダーク》!!」

人形を盾にして、闇の矢を撃つ。
ルー・サイファアは、何もしない。

ただ一言、発する。

「……来たれ。」

闇の矢が当たろうとした瞬間、“何か”によって掻き消される。

その“何か”は、直ぐに分かった。

黒いワイバーン。

「黒の……飛竜……。」

ルー・サイファアは、背後から歩き寄ってくる者に言う。

「急ぎ、ベレートの契約者を確保せよ。」

「契約に従い、命令を成し遂げてみせます。」

長い黒髪を下ろし、瞳を金色に光らせた少女は、戦闘用に作られたであろうドレスの裾をつまんで一礼する。

彼女をよく知っている人物が、この様子を見れば急いで病院にでも行かせることだろう。

彼女――流々加奈絵はルー・サイファーとの契約に従い、飛竜の背に乗って高谷梓のところに向かった。

濃厚な魔力が渦巻く場所に出る。

――いた。

梓が倒れ込んでいる。

理由は恐らく、ベレートとの契約。

通路を開ける為の魔力が枯渇しており、生命力を魔力に転換する事で通路を開けているという状態なのだろう。

神原悠が治癒魔法を使って、命を繋ぎ止めているらしい。

「一旦、アンゼロットのと……あ、見つけた。」……………え？」

後ろから聞こえた声。

俺は、その声に思わず振り返った。

そこにいたのは、動きやすそうなドレスを着て、髪を下ろした姉貴。

姉貴とは思えない。だって、一瞬だけ見惚れた。

「あ……………姉貴？」

ズドンッ！

「姉貴って言うな！！」

腹にストレートの拳が打ち込まれ、膝から崩れ落ちていく俺。

「あ、ごめ……………」

……………この姉貴の姿も、これで見納め……………か。

そんな事を考えながら、俺は意識を失った。

目が覚めた時、ネビアに超絶怒られた。

「なに高谷梓、連れてかれてんのよ！！なに腹に一発ぐらい受けただけで気絶してんのよ！！このヘタレがつ！！」

ネビアは馬乗りになってきて、思い切り拳を振り上げて言った。

「あんたが!!」

泣くまで!!

殴るのを止めない!!」

そんな風にフルボッコにされ、気絶させられた。

その後、地上での話も聞いた。

……………ネビアに気絶させられてからだから、三時間後ぐらいに。

可哀想な男、柊蓮司

二日後。

柊蓮司は慟哭した。

「柊さん、怪我をしたところなので本当は頼みたくないんですが……お仕事です!!」

「ふざけんなああああああああ!!!!」

叫んだ瞬間、傷口が開いて血が噴き出す。

ロンギヌス医療部隊が手当てをする。

このやり取り、今までで実は三度目である。

「……いえ、意地悪とかではないんです。」

「今度は何だよ……?」

意地悪じゃない時は、大概が死にかけるような内容である事は、これまでの経験で理解している。

異世界に行かされて

学年が下がって

年齢を上下させられた。ああ、酷い目にしかあっていないんじゃないじゃ

- -

「そんなしょうもない独白は要らないんで、話を聞いて下さい。」
「はい、すいません。」

アンゼロットが咳払いをして、話し出す

「実は、世界結界の儀式を行った日から低級侵魔の数が増えたんです。」

いつの間にか持っていたリモコンを操作する。

モニターが出現し、世界地図が映し出される。
ほぼオレンジ色だ。

「巫女搜索の為にウィザードを増やしたいんですが、侵魔出現率が世界全体で異常値なんです。」

現在進行形で様々な所がオレンジから赤に変化していく。

「って事で、柊さんには侵魔討伐の方をお願いしますね。」

アンゼロットはそう言って、垂れ下がっている縄をグイッと引っ張る。

すると、柊の足下の床がパカッと開く。

「またかあああああああああああああああああああああああ！」

「!!」

「――――!!!!」

地上に降り立った時、柊は傷を押さえて涙目になっていた。

――数時間前。

燕は、柊に怪我を負わせた事を悔やんでいた。

「私が、あの魔王を引き止めなければ……!! 怪我を負わせる事も無かった……!!」

眠っている柊蓮司をガラス窓越しに見る。

傷の手当では終わり、魔力を使いすぎた反動で意識がないらしい。

「巫女様を探し出し、あの魔王を必ず潰す。それが柊蓮司、貴方への償いです。」

その様子を遠くから見ていたネビアは呟く。

「その言い方だったら、まるで柊蓮司が死んでるみたいだよ?」

勝手に殺されかけた柊蓮司であった。

魂の行方

アンゼロットと燕の前に座る少女。

「……………」

アンゼロットは、その少女を穴が空きそうなくらい見詰めていた。

「あ、あの……………」

見られている少女は、燕に視線を向ける。
燕に至っては、頭を抱え込んでいる。

「巫女は魔力がこんなに少ない方なのですか？」

巫女。

目の前にいる少女は、燕が護るべき巫女として、アンゼロットの前に座っているのだが……………。

「特殊な魔力を感じはするんですが、こんなに微量だと意味が……………」

そう。

二人が巫女を前に、困っている理由とは魔力の異常な程に少ない事だ。

「巫女様の魔力だとは分かるが、彼女の魔力は少なすぎる。」

燕は少女の魔力の質を巫女のモノだという確信をしている。
だが、魔力の量が違うのではないかと思わせる。

少女を退室させ、アンゼロットと燕が幾つもの可能性を話し合う。

「魂を複数に分けた。」

アンゼロットは、一つの可能性を呟く。

この可能性が最も高い。

恐らく、巫女は自らの魂を複数に分ける事によりルー・サイファー
の計画を阻止しようとしたのだろう。

しかし、それだけでは阻止する事は出来ない。

巫女の魂を持つ者を集めてしまえば、計画を行う事が出来るだろう。

「巫女が魂を何個に分けたのかは分かりません。ですが、先にこちらがその内の一人を保護した。早く、多くの巫女を保護する事で計画を阻止しましょう。」

燕は、その場から走り去っていく。
巫女を捜し出すつもりなのだろう。

「ルー・サイファー。貴方の計画を完膚なきまでに潰させてもらいます。世界は……貴方達の為にあるわけでは無いのですから。」

ベレートは、空気を懷かしむように息をする。

「ようやく、この写し身も安定したか。」

完全な写し身と化するまで、もう少し魔力を流し込まなければならぬ。

玉座のような椅子に座ったベレートの膝に倒れ込んでいる梓。

その頭にはベレートの手が置かれており、常に治癒魔法が行われている。

通路を開ける為に、枯渇した魔力を生命から絞り出す梓。

梓の生命が尽きかける度に、治癒魔法を使うベレート。

「終わらない苦痛を与えているようにしか見えないね。」

加奈絵は、梓が死のうが気にならないのだろう。

ベレートは、加奈絵を見る。

「そういえば、貴様の弟が俺の転生体だったか。…………俺が憎いか？」

ベレートの転生体として生まれなければウィザードにならなかったかもしれない。

「感謝してる、かな。」

「…………その返答は、俺の予想外だ。」

ベレートは、予想が外れた事を嬉しそうに笑う。

「今の影司が私の弟の影司であって、それ以外の影司なんて影司じゃないと思うし。うん、感謝してる。」

二人の微かな笑い声が、その場に響いた。

俺は、侵魔討伐に加わっていた。

「これで十七体目！」

侵魔の消滅を確認し、休憩する。

「八坂、終わったぞ。」

「次の奴にかかる。ウィザード……！？……皆、後ろに飛べ
！！！」

八坂の声がした瞬間に全員が後ろに飛ぶ。

さっきいた所が陥没し、その中央に……いた。

「この辺りに匂いがするんだけどなあ。」

巫女の、と言葉を付け加える少女。

少女が纏う魔力は、魔王である事を示している。

「でも、ゆっくり捜すのに邪魔な虫がいっぱいだねえ。……殺そつか。」

その言葉を発したと同時に、最も近くにいたウィザードは殴り飛ばされて壁に叩きつけられる。

「でも、殺したのが巫女だと困るな。」

そんな事を言いながら、もう一人、ウィザードの意識を刈り取る。

速すぎて目が追いつかない為に対処が出来ない。

・・・速度で一撃の重さを倍増してる。

下手に食らえば、骨折どころか内臓破裂ぐらいつて速度だな…………。

「八坂、戦い慣れてないウィザードを退かせる。無駄死にする。」

八坂は首を横に振る。

「逃がしてもらえと思ってるのはか？ あの魔王の狙いは、この中にいるらしい巫女だろう？」

巫女が分からない内は、魔王は誰も逃がさない。

巫女を殺せないらしいから気絶で済んでいる。

巫女が分かれば、他のウィザードは殺される。

・・・参ったな。

内心、舌打ちする。

要するに魔王を倒しないと、死ぬって事か。

「戦い慣れしていないウィザードは、後方支援！ 戦えるウィザードは、前に出るぞー！」

八坂は魔剣を構える。

その魔剣を握る手は微かに震えていた。

二の魔王（前）

俺は魔法の術式を宙に刻みながら走る。

大規模結界で魔王の力を弱めるつもりなのだが、術式の完成まで八坂達が耐えられるかが問題なのだ。

「えい、《ぐるぐる》」

「《神罰代行者》に逆らうなよ！」

「式神、自爆して。」

「ちよつ、接近してる！ 巻き込まれるから！」

「俺様は不可能を可能にする！ …… 《決戦存在》 っと、プラーナの消費がキツイ…………。」

「わっ！！ 助けて！ 《後ろの御先祖様》！」

「あーはっはっは！！ 筈は友達いいいい！！」

戦場が混沌としている。

「トリモチ弾、発射！」

「こんなこともあるのかと！！ 《ミラクルガジェット》！ やはり私が作った物は世界一いいいいいい！！！！」

「五月蠅いですね。」

「吸血鬼の兄さんと思うかい？」

「人狼のお兄さんは、接近タイプでは？」

「今、前に出れば巻き込まれるしな……………」

「同意見です。」

……………いや、戦えよ。

後方支援ウィザードは、前で行われている戦闘風景に絶句してるし。

「あ、治癒魔法をかけてあげる！！ えい！」

「ちょっ！ 逆に傷口が大きくなったって！！ つか、痛いっつの！」

「あ、治癒魔法の術式構成に失敗しちゃった。……………てへっ！！」

「何が『てへっ』だ！ 早く治してくれ！！」

術式を展開している俺。

「なあ、八坂。俺達っていらな子？」

前線に出て、二発で殴り飛ばされた八坂。

「修行に出よう……………。俺の弱さが、よく分かった……………」

――普段、生徒会長の仕事をしている八坂と、訓練し続けているウィザードを比べたら駄目だと思うんだが……。

「ホォーム……」

前線に出ている魔剣使いが、魔剣をバットのようには振るい

「……ラーン!!」

魔王を斬り飛ばす。

「ひでぶうつ!!」

妙な叫び声をあげながら吹っ飛んでいき、壁を貫通して止まる魔王。

「結界いるのか？」

「……保険として。」

なんだか凄く帰りたくなった。

「あ、有り得ないぐらい痛いんだけど……。」

魔王は、痛む体に治癒魔法を使う。

「あんな雑魚共……一片も残さずに殺しきつてやる!!」

壊した壁の欠片を握り潰し、破片を再構成する。
出来上がったのは、岩石で作られた細身の剣。

「巫女の一人ぐらい死んでも、計画に支障はないでしょ!!」
雑魚のくせに調子に乗るな!!」

石つぶてを宙に浮かべ、ウィザードに向ける。

「死ね! 雑魚共!!」

その言葉と共に放たれる石つぶて。

ウィザードは、その攻撃を飛び避けていく。

「ちっ、本気を出してきやがったな!!」

魔剣使いの一人が、目の前に来た魔王と交戦している。

魔王の持つ岩石の剣は、先端部分が回転し突きの威力を跳ね上げている。

「土手っ腹にでも、風穴を空けてあげる!!」

回転が増す毎に、魔剣使いは推し負けていく

「させん!!」

強化人間であるウィザードの一人が、箒で弾丸を放つ。

弾丸は当たった。

突如として現れた複数の岩石のゴーレムに。

強化人間のウィザードは第二射を撃つ。

それと同時に他のウィザードも動き出す。

「そこは私の射程圏内だよ、魂なき人形。

我が《鮮赤の魔槍》を、その身に受けたまえ。」

吸血鬼のウィザードは、影の槍を放つ。

その攻撃は、ゴーレムの腹を貫くまではいかないが、深く決る。

「式神、行くよ！

《連爆結界》付きの《スピットレイ》！！」

陰陽師のウィザードは、光の弾丸を放つ。

弾丸が当たると、ゴーレムを取り囲んだ数十の符が連続して爆発する。

だが、ゴーレムは崩れ落ちはしない。

俺は術式を刻む。

後少し刻む事で、術式が完成する。

背後では、八坂がゴーレムを足止めしている。

「助かる、八坂！」

「これが精一杯、だ！」

ゴーレムの拳を、八坂は魔剣で防ぐ。

後方支援のウィザードから、複数の治癒魔法が飛んでくる。

「後方支援がないと死んでるっつーの！ 早くしてくれ！！」
「分かってるよ！」

魔導書を広げながら、術式の確認をする。

「ああ、クソ！！ また間違えた！！」

「ふざけんなあ！」

術式を刻み間違える。

その度に前後を刻み変えていく。

「あー、苛々する。」

最後の文字を刻み込む。

「よし、八坂。」

「何だよ、早く結界を……」

「俺は魔力が足りないから、八坂が張れ。」

膨大な文字を刻むだけで魔力が空になったから、意識が朦朧とする。

「早く、維持するのもギリギリなんだって。」

八坂は溜め息をつき、光る文字に触れる。

「結界、作動。」

その八坂の言葉で結界が作動する。

青白い魔法陣が浮かび上がる。

その発動する結界は、侵魔の力を弱める為だけに特化したモノ。

「流々、あの魔王を叩きのめすぞ。」

「オーライ、ここまで面倒な事をやらせたんだ。あの魔王をさっさと潰して帰るか。」

近くにいたゴーレムを、八坂は斬り倒していく。

その後に続いて、俺は怪我したウィザードに治癒魔法をかけていく。

……魔王に結界が効いてるかな……………。

そんなマイナス思考で、俺は魔王の元へと進む。

二の魔王（後）

魔王は、結界の効果を受けていた。

力が弱まった事で剣の先端の回転が止まり、魔剣と拮抗していた。

「鬱陶しい、この体に纏わりつく不快感………！　こんなモノを使ったところで、私を倒せると思うな……！」

そう叫ぶと、止まっていた剣の回転を再開する。

「抗う事なく散れ！」

魔剣が回転している部分に当たり、弾き飛ばされる。

「そのまま逝け！」

ウィザードを貫こうとする岩石の剣。

「させるか！」

八坂がその間に割り込み剣を受け止める。

「間に合ったか。」

「助かつ………た。後は任せます！」

魔剣がない魔剣使いは、何も出来ないので素早く去っていく。

「雑魚を逃がした、そこを退くがいい。」

「誰が退くか！」

両手で持った魔剣で攻撃をするのだが、簡単に流される剣を交えた余波だけで、土煙があがる。

「ほお、他と比べて大分筋が良い。」

「そりゃどう、も！」

魔剣で攻撃を受け止める度に、その速さによる重さで息が詰まる。

その重さを保った二撃目を右下へ攻撃を流し、左から蹴りを入れる。

だが、蹴りを入れた足を叩き落とされる。

「ぐっ……………！」

その攻撃で足が折れたらしく、倒れてしまう。

「私の落とし子にならない？ 他とは違って待遇は良くするよ？」

「ふざけるな！！」

八坂は魔剣で体を支え、折れた足で立つ。

「そっかぁ……………」。

――――殺してから、落とし子にするからいいや。」

俺は怪我の治癒を終え、八坂の元へ走る。

実は一体だけ強力なゴーレムがいた為に、俺が残り怪我人の手当てをしていたのだ。

走っている内に立つのがやっとの八坂と余裕の笑みを浮かべる魔王が見える。

魔王に向かって冥界の燐光を放つ蝶を飛ばす。

蝶に気付き、咄嗟に避ける魔王。その顔から笑みは消えない。

「八坂!!」

「流々、治癒魔法を頼めるか……………」

治癒魔法を使う。

八坂の傷が癒えていくのを確認し、安堵の溜め息をつく。

その時、土煙の中から声が聞こえた。

「あ、コイツだ。」

――誰が……向こうにいたんだ？

目を凝らす。

土煙が晴れていく。

見えたのは、戦い慣れていない者の一人として後方支援にまわっていたウィザード。

戦いの最初の方で巻き込まれたのか、逃げきれずにいたらしい。

そんな少女の頭を無造作に掴む魔王。

「巫女つてのは、大変だねえ？　いつの間にか、陰謀に巻き込まれてるんだから。」

少女は頭を持たれ、高く持ち上げられる。

「んじゃ、転移つと。」

その言葉と同時に、少女は消え失せてしまう。

「巫女も手に入れたしなあ……。憂さ晴らしに全員、殺そうかな？」

岩石の剣は、俺に先端を向けて止まる。

「手始めに、そこのウィザード。」

次は八坂に向く。

「その君は、殺した後にちゃんと落とし子にしてあげる。」

そう言つて、すぐに俺に剣を向けてくる。

「人間、すぐに死なないで楽しませてよ？」

剣が凄まじい速度で、回転する。

俺も術式を展開し、身構えて尋ねる。

「何処の、魔王だ？」

魔王は、俺の質問に対してクスクスと嗤う。

そして、一瞬にして物腰を柔らかく、淡々としたものに変化させる。

「私に名前はない。」

そして、正確に言えば魔王じゃない。」

その瞳は真紅に染まる。

「貴方は、魔王ベレートが如何にして七種の属性を扱うと思つ？」

いきなり、その名前が出るとは思わなかった。

沈黙する俺に、目の前にいる魔王は答えを言つ。

「ふうん、分からない？　なら、あの方が言っていた通り……………失敗作って事ね。」

「あの方」……か。」

あのプラーナを集めていた魔王も“あの方”と言っていた。

“あの方”の復活。

それが目的だったみたいだが、ベレートの事だとは思わなかった。

「仕方ない、最初から説明してあげる。

貴方が、ベレート様として転生していたら………私は、この姿で存在する事は無かった。」

「転生していれば………存在しない？」

目の前にいる存在は、笑みを浮かべる。

「この身は、まだ王であつた頃のベレート様の手で救われた身。

ならば、あの方の物。

尽きぬ命を永遠に捧げてこそ意味がある。

存在していようと、しなくとも関係ない。」

王であつた頃。

それは、あまりにも古すぎる時代。

強大な力を持っていた王は、神の手により墮とされ神を憎む。

「本来のベレート様は、膨大な魔力があつたが、虚と冥の属性しか持っていなかった。

だが、古き時を生き抜く王には圧倒的な力が必要だった。

その力を得る為に、残り五種の属性を扱う事にしたの。」

手に持った岩石の剣を掲げる。

「私は選ばれた者の中から最も上手に地の属性を扱う事から、ベレ

ート様の力となる事が出来た。

……… 方法は、言えないけど。」

「そんな赤い顔で言われても困る。」

目の前で少し俯きながら顔を真っ赤にさせている……… そんな方法を喋られても困る。

「え、と……… そう言う経緯があつて、私を完全に取り込む事で地の属性を扱えるようになるの。」

つまり、転生の時に貴方が私を取り込む事が出来なかった為に、私という存在が出来てしまったという事。」

ベレートが全ての属性を扱う事が出来て、俺が出来ない理由。

彼女という存在を取り込んでいないから。

そして、取り込まれないが為に存在してしまった彼女。

「ベレートは今、地の属性を使えないのか？」

「私は、本体のベレート様の中にいる写し身。」

全く関係ない。でも、貴方は私がいらないから使えない。」

完全に取り込む事が出来なかったから、失敗作。

「今から取り込むとか、出来ないのか？」

「貴方が、ベレート様の完全な転生体として生きるならしてもいいよ。」

「なら、いらない。」

彼女は掲げていた剣を向けてくる。

「貴方がベレート様の転生体として完全に転生できなかった事を悔やんで死んでいくといい。」

彼女は周囲の岩石で戦場を作り上げる。

「さあ、二人だけの戦場を踊りましょう。」

「仕方がないな。俺の責任だ、君を消滅させよう。俺で良いのなら、最期の踊りに付き合おう。」

「貴方だから、誘っているのだと言うのに。その辺りが、ベレート様とは違ってる。では、逝きますよ。」

その言葉と同時に、戦いは始まった。

動き出す影

水の長刀と岩石の剣が斬り交わされる。

水の粒、岩の欠片が周りを飛び交う。

斬り合う度、体に小さな傷がつき血が飛ぶ。

治癒魔法を使う時間なんて無い。

使おうとすれば、その隙を斬られてしまう。

ただ、斬り合う。

血が足りなくなるまで、どちらかが死ぬまで。

俺は右足を半歩下げ、地面を蹴って跳ぶ。

空中で軽く回転し、遠心力をつけて斬る。

彼女は下からの斬り上げで、応戦してくる。

水の長刀が、岩石の剣の先端の回転で削り取られていく。

だが、その回転も水圧によって止まりつつある。

「術式、構成………！」

俺は魔装の術式構成を整え、水の長刀の破壊された部分を再構成する。

水圧で完全に回転が止まり、鏑迫り合いになる。

「私の剣を止めるんだ。お見事とでも言うておくね、失敗作。」
「失敗作って言うのは、撤回して欲しい、な！」

彼女を斬り飛ばし、追いかけて畳みかける。

一撃、弾かれ。

二撃、避けられ。

三撃、流され。

四撃で、彼女の剣を持つ手を切り裂く。

「あ……………」

五撃、胴を貫く。

岩石の剣は、その手から零れ落ち消えていく。

「魔王に至らぬ身では、やはり貴方には……………届かなかった。」

消える自らの姿を見て、笑みを浮かべる彼女。

儚げで、嬉しそうな顔。

「ベレート様、命令は成し遂げられなかったけど今すぐ貴方の元へ。」

そして、消滅していく。

岩石の戦場が崩れ、八坂が近寄ってくる。

「大丈夫か!？」

「あ? ああ……………」

魔力も元から切れかけていたし、掠り傷が多くてかなり出血している。

急激に意識が朦朧としてくる。

駆け寄ってくる八坂に、体を任せて、俺は意識をなくした。

彼女が倒されてから数時間後。

ベレートは閉じていた目を開ける。

ベッドから立ち上がる。

服が崩れた加奈絵が一番最初に視界に入った。

ちよつとでも体を動かせば服が脱げてしまうだろうと毛布を被せ、自身の存在の安定を確認すると椅子に座り込む。

「残りの写し身は天。」

部屋の扉が静かに開かれ誰かが入ってくる。

「ルー、寝室へ勝手に入る程の用とは何だ？」

ルー・サイファアは、苦い顔で言う。

「巫女が一カ所で数人、見つかった。」

「それはまた壮絶な取り合いだな。で、俺に手を貸せと？」
「頼む。人手が、な。」

椅子から立ち上がり、ベッドに近寄る。

眠っている加奈絵の肩を軽く叩き起こす。

「今すぐはちょっと無理なんだけど……………」

「契約の繋ぎ直し程度に済ませたんだがな。」

……………ルー、召喚者はどうした？」

契約の繋ぎ直し。

ベレートは存在が安定はしていたが、以前の召喚者であり契約者の梓では完全な写し身に至る事が難しかった。

同意ではないのだから、プラーナは使えない。

魔法を使うタイプのウィザードとはいえ、未熟な事から魔力切れの頻度が多く、安定させ難い。

そんな梓よりも、

同意を得て、プラーナが使える。

魔法を使わないタイプのウィザードではあるが、実戦が多い加奈絵の方が魔力量が多かった。

総合的に見て、加奈絵の方が契約を結ぶ事が安定しやすかったのだ。

実際、加奈絵と契約を結んだ事から安定し始めている。

「高谷梓は、あの忌まわしい柊蓮司に任せた。」

そう言つて、言葉を続けないルー。

ルー・サイファアは、柊蓮司によって写し身を破られた。

柊蓮司に頼み事をしなくなっただろう。だが、他のウィザードであれば会話自体が成立しない。

その点、柊蓮司はこちらの用件を聞いてくれるので便利なのだ。

「任せてしまつて済まないな。」

「うむ、今回の件で埋め合わせしてもらおう。」

ベレートは、部屋を出るさいに加奈絵を抱き上げる。

「戦闘は出来るのか？」

「うん、ワイバーンがするから大丈夫。」

その姿は闇に溶けるように消えていく。

一人残ったルー・サイファアは、廊下で待機している手下と話していた。

「速やかに動かせるこちら側のウィザード、魔王を巫女の回収に向かわせる。」

「了解しました。」

手下の気配が離れていくのを感じながら、ルー・サイファアは笑う。

「手札がここまで揃っていて負ける事は有り得んな。」

さあ、アンゼロットよ。貴様の守る世界を、今度こそ頂くぞ。」

部屋に笑い声が響く。

その声を聞く者は、自分以外には誰一人としていない。

闇の中にただ響く。

同時刻

事情を聞いたアンゼロットは柊を穴の前に立たせる。

「仕方がないでしょう？ 地上が大変なんです。柊さん、行つてらっしゃーい！！！」

哀れな柊蓮司は突き落とされ、頭から落ちてく。

「またかああああああああああああああああああああ！！！」

その後、アンゼロットは医務室に寝かされた高谷梓を見ていた。

「高谷梓が不必要になった……。完全な写し身で出来てしまった時の事を考えておかなければなりませんね。」

アンゼロットの溜め息が医務室に響いた。

疑心暗鬼

ヨーロッパ上空。

時間は、深夜に差し掛かったぐらい。

綺麗な月が、今は紅く光り輝いている。

その月下に二つの方向から幾多の影。

一方はウィザードの中で侵魔に与する者達。
魔王の姿も見える。

一方はウィザード達。
様々な組織の人間の姿が見える。

「第一から第五部隊は、巫女を探しに行け!!」

その言葉に従ってウィザードの数十人が、都市部に向けて降下しようとする。

「行かせん!!」

それを防ぐように、侵魔側がウィザードに魔法を放つ。

それを切っ掛けに戦いが始まる。

巫女の女性を抱えて俺は低く飛ぶ。

他にも四人のウィザードが、周りを警戒しながら飛んでいた。

「このまま侵魔に遭遇しなければ良いが……。」

街中を駆け抜ける。

中心部を出て、東側で待機しているウィザードに巫女を託す。
それが俺達の任務。

東に向かって飛ぶ。

「……籠に迷い込んだ可哀想な鳥達。」

「!？」

月匣の中に月匣が展開される。

立ち止まって、月と月が重なるのを見る。

二重に展開された月匣は俺達を捕らえるかのように作り上げられる。

「上の奴らは侵魔を止めなかったのか!？」

月匣は出る事の出来ない迷宮となっていく。

「全力で飛べば……!」

箒騎士の男が箒を浮かばせ、速度の出る体勢を取り始める。

「駄目だ!!」

俺の言葉で、逃げようとした奴が止まる。

「全員の速度が違う。単独行動は死に直結する。死にたいなら逝け。」

強化人間の男が、そう言つて地に足をつける。

それを見た全員がゆっくりと降り立つ。

白の迷宮月匣。

辺り一面の白に、目が痛くなる。

「白い……月匣。」

唯一、白でないのは月。
空で紅く輝いている。

展開された月匣の中心付近にいる事が分かる。
それ程に魔力が濃い。

突然、声がする。

『小鳥さん達。檻の中で騒がしくしないでね?』

クスクス、と女の笑い声が響く。

「気色悪い……。」

聖職者の女は、レイピアを出して身構える。

『巫女を置いていくなら……小鳥さん達は出してあげる。』

「皆さん、あの言葉に惑わされないで下さいね。……扉は四枚。
早く、進みましょう。」

冷静に判断する吸血鬼の女は、扉に手を掛ける。

『仲間に、私の手の者がいたとしても………そんな強気でいれる？』

吸血鬼は、咄嗟に背中を壁に当てて叫ぶ。

「……………誰も巫女に近付くな！」

俺は巫女を下ろして、三步ほど下がる。

残りの三人も巫女から離れていく。

巫女を部屋の真ん中に残し、お互いの距離を空けた状態になる。

「仲間に敵がいる、か。本当ならば……………私達の通るルートを把握し、月匣の中心に入れる事は容易いな。」

強化人間の手には、射撃に特化した筈がガンナーズブルムあった。

「神の敵がすぐ近くにいて気付かなかったのは、不覚と言うべきか。」

聖職者の持つレイピアが聖なる光を帯びる。

「何言ってるんだ。聖職者とか名乗っても侵魔に属する奴はいるんだぜ？」

箒騎士は箒に足を掛け、すぐさま乗れるようにする。

「待てよ。」

俺に視線が向けられる。

「敵に貰った情報を鵜呑みにするのか？」

俺は構えない。

構えれば、戦いになる。

「そついえば……………」

聖職者がレイピアの切先を向けて言った。

「あんた、魔王の下で動いてる非正規ウィザードだよね？」

強化人間のガンナースブルームの銃口が向けられる。

「事実なのか？ 反論は何かあるか？」

引き金に指がかかる。

――拙いな。

下手な反論をすれば、撃たれる。

「沈黙は肯定だっけか？　とりあえず撃てよ。」

箒騎士の言葉に頷き、引き金にかかる指が強くなる。

「待ちなさい。」

「魔王に与する、それが条件ならば私もです。」

吸血鬼がそう言って、制止する。

「魔王に与する、それは事実です。しかし、ルー・サイファーに手を貸すような馬鹿ではない。」

吸血鬼が視線を向けてきたのを頷き返す。

残りの三人は、顔を見合わせる。

『でもさ、一人なんて言っただけだよ?』

――余計な事を!!

吸血鬼は扉に手を掛け、口パクで伝えてくる。

「近くの部屋に一旦、逃げましょう。このままでは、危険です。」

俺も吸血鬼が開けようとしている扉を見る。

かなり近い。

巫女を連れて行っても、残りの三人に追いつかれはしないはず。

三人の様子を見る。

「敵、誰が敵……………」

「あの二人が怪しい。足を撃ち抜くべきか？」

「面倒だな。さっさと殺っちまうか？」

三人とも、それぞれ自問自答をしている。

巫女に一步だけ近付く。

気付いていない。

吸血鬼の方を見て、小さく頷く。

口パクで今度は

「私が咳き込むのが合図です。」

頷き、走れるように体勢を整える。

「ゴホッゴホッ！」

それと同時に走る。

巫女を掴む。

扉が空けられる。

三人が気付く。

だが、このタイミングなら行ける。

巫女を抱えていれば、攻撃は出来ない。

巫女を抱える前の速度を保ちながら扉の中に滑り込んだ。

扉の向こうからは、声が聞こえてくる。

「敵だったか……。全力で排除をする。」

「神の言う通りに最初から撃っておけば……。早く、あの二人を罰しに参りましょう！」

「巫女を攫われたら、報酬が出ねえよな？ 奪い返してやる。」

俺と吸血鬼は、そのまま隣の部屋に入る。

「参ったな……………」
「……………」

俺の言葉に返事はない。

代わりに、あの女の声がした。

「助かりました。

――ベレート様。」

吸血鬼が俺の体を押さえ込む。

その眼に、意思の光はなかった。

横では巫女が転移させられていく。

「違いました。ベレート様じゃないんでしたね。……………影司様ですね。」

女の声が、近くなってくる。

隣の部屋からは、銃撃の音が聞こえる。

「……………お前は天か？」

『正解です。少しの間、眠って下さいね？』

パチンッ

そんな軽い音がして、俺の意識は遠退いていく。

最後に聞こえたのは

『隣の部屋にいる小鳥さんは、皆殺しね。』

小鳥は小鳥らしく、檻の中で飼われていれば良かったものを……………。

『
そんな言葉と笑い声だけが聞こえた。』

ウィザードの体が燃え尽きていく。
絶命の叫び声が、その場に響き渡る。

ベレートは、その光景を詰まらなそうに眺めていた。

「この程度では戦いにもならんな。」

一方的な虐殺。

その光景を見ていたウィザードは、恐怖しか抱かない。

怯え、竦む。

だが、それは戦場で抱いてはならない感情。
そう分かっているにも、目の前の恐怖を感じずはいられないのは人間の性。

「王の眼前で醜い所だけを見せ散るつもりか？ 人間だからこそ、
愉しめると思っただが………残念だよ。」

「俺が相手だ。」

魔剣を構える柊。

平静を装っているが、恐らく完全に傷が癒えていないのだろう。

ほんの一瞬だが、その表情が曇ったのをベレートは見逃さなかった。

柊は、自らの体の状態を理解している。

ベレートの攻撃を受け止めてしまえば、傷口が開いてしまう事も。

「……………柊蓮司。俺が再度、貴様の傷を決れば下手せずとも死ぬぞ？」

ベレートは傷があるであろう場所を指す。

柊は苦い顔をして、傷に手を当てる。

「気に食わん。」

ベレートは周りのウィザードに目を向ける。

誰一人として柊蓮司の為に前に出る者はいない。
いや、違う。出ようとする者は何人かはいる。

赤羽くれは

緋室灯

ナイトメア

グイード・ボルジア

代表的な者をあげるなら彼らだろう。

皆、所属は様々だが柊蓮司に恩がある者。

だが、彼らは所属組織の重要な人物。

勝てないと分かっている相手に、戦わせて死なせるわけにはいい。

それらの人物を所属組織のウィザード達が抑えている。

「……………クズ共が。」

柊の魔剣を持つ腕を、闇の刃が貫く。

「がつ……………！！」

そして、貫いた闇が腕全体に広がっていく。

「柊!!」

くればが周りのウィザードを突き飛ばす。

「来んな、くれば!」

柊の言葉でくればの動きが止まる。

その間も闇が腕を覆い、魔剣さえも闇に染めていく。
その貫かれた部分を押さえ込むが止まらない。

「ぐ……あ……」

柊の声から力が無くなっていく。

「弱っていた分、抵抗が出来なかったようだな。まあいい、扱いやすい駒が手に入ったのだから。」

さあ、柊蓮司。

その手で敵を討て。」

「敵はてめえ……!？」

柊の闇に染まった部分が本人の意とは違う動きをする。

ウィザードに向かって、柊は魔剣を突きつけていた。

「その手を、自らの仲間だった者の血で染め上げるがいい。」

ベレートは、ニイツと笑みを浮かべる。

柊の顔には、焦り。

体が自らの意思とは違う動きをする。

このままでは、ベレートの言う通りに仲間のウィザードを斬ってしまう。

「全員……俺から……離れてくれ……!」

柊は声を絞り出す。

その叫びは響く。

だが、魔剣は叫びよりも先に動いていた。

ベレートの敵を殺す為に動いていた。

柊は一瞬、誰を貫いたのか分からなかった。

「は、わ……………」。

ひ、柊……………」？」

くれはの腹を貫いた魔剣は、彼女の血で濡れ鈍く輝いていた。

闇に染まる街

街中の一角が漆黒の闇に包まれていた。

その闇は、冥界から漏れ出したものと同じ。

闇の中央で黒いワイバーンが雄叫びを上げる。

その竜の体は、ウィザードの血で濡れていた。

「……………その力は冥魔のものじゃないのか!？」

冥魔の力を振るう竜。

その前には、ハルバードを構える燕がいた。

「隠密任務だからハルバード、なんて考えていたら勝てないか。」

銃の使用を考える。

闇の中だから聞こえない可能性はある。

だが、上空にいる者達に存在がバレてしまえば、襲ってくるのは確実。

周りで倒れているワイザードを救う為には、このままハルバードで竜を倒しきる事が条件。

鋭い竜の爪が、燕を切り裂こうと迫ってくる。

バックステップで避けていくが、竜の爪は街の建物を破壊する。

「くっ！」

破壊された建物の瓦礫が崩れ落ちてくる。

ハルバードの斧で瓦礫を切り払い、槍で竜の胴を狙う。

体と槍に瘴気を纏わせ、その一撃に全力を注ぐ。

槍の瘴気は鋭く尖り、足に纏う瘴気が地を抉る。

自身の最大の攻撃。

体が軋む音が聞こえる。

瘴気が体を蝕んでいく。

体の細胞が破壊される、その度に再生する。

破壊と再生の繰り返し。

再生される度に、体は強靱な物に変わっていく。

再生する度に、体は別の物に変わっていく。

繰り返す度に、体に尋常ではない激痛が走る。

瘴気が体を纏う一秒。

その一秒が、何時間も続いているように感じる。

本来、自分の力量では扱えない程の瘴気。

前が霞んで見える。

その目で狙いを定める。

一撃で決める。

違う、一撃で決めなければならない。

「消滅しろ。」

我が槍は、全てを貫く。

我が槍は、巫女を護る為に振るわれる。

黒き竜よ。

我が槍に、討たれよ。」

音速を超える一撃。

瘴気を纏う一撃。

そして、勇者だった頃の名残の強大なプラーナを込めた一撃。

「ワイバーン、《シールドフォーム》」

全てを込めた一撃。

その一撃は、ワイバーンの翼で容易く防がれる。

「な!？」

燕は防がれるとは思っていなかった。

ワイバーンが翼を大きく広げると、居た。

声を発した人物が。

「その竜……。やはり、流々加奈絵だったか。」

その言葉を微笑みながら返す加奈絵。

「巫女の“元”守護は、引っ込んでれば良いのにねえ。」

「な、何を言っている。私は巫女様の守護の為に転生したんだ！！」

「何を言ってるのかな？ 貴方は、ただの勇者、落とし子であって

……

……守護なんかじゃないし、転生者でもない。

……ただ、前世の記憶があるだけのウィザードに過ぎないんだよ。

」

燕は呆然とする。

「滑稽だね？　自分が巫女の守護者だと思い込んでいたんだもんね。」

「そ、そんな事……信じられるわけ……。」

自らを巫女の守護だと思っていた燕は、ハルバードを手放して膝から崩れ落ちる。

「だって、本当の守護者は貴方より先に死んでいたそうだから……ね。」

加奈絵は、ベレートから話を全て聞いていた。

巫女の守護者は、戦いになって直ぐに死んだ。

その守護者の代役に、燕は戦いに駆り出された。

哀れな彼女は、正式な守護者だと騙された。

騙され、自らの使命が守護する事だと信じきっていた。

信じて、必死に戦って、死んでいった。

現代に生を受けた時。

それでも、まだ巫女の守護者だと信じていた。

そして、今度こそ護ろうと必死に行動した。

騙されていた事も知らずに行動した。

本来の守護者は死ぬ事が嫌で逃げ出した為に、アンゼロット達は燕を守護者に仕立て上げた。

「ベレートが貴方を哀れって言ってたけど本当だったね。」

加奈絵は燕を見る。

事実を信じたくない。

信じてしまえば、生きる理由を失ってしまう。

「嘘だ、嘘だ……………」

耳を塞ぎ、呟く。

何度も呟く。

そうやって、燕は必死に壊れそうな心を直そうとしていた。

だが、二回の人生を壊された彼女の心は簡単に直る事はない。

彼女は倒れる。

そして心が、強制的に燕の意識を閉じていった。

灰色の空

魔剣がくれはを貫く。

彼女の血がポタポタと重力に従い落ちていく。

「く、くれ……………は？」

呆然とする柊。

その腕は柊の意思とは関係なく、くれはの肉体から魔剣を抜いていく。

少しずつ、少しずつくれはの血で濡れた魔剣が露わになる。

黒と血に染まっていく魔剣は禍々しく輝き、それはまるで歓喜に震えているようだった。

刀身が引き抜かれ、支えを失ったくれはの体が落下していく。

「あ……………」

このまま下に落ちてても、ウィザードは常に月衣という小規模な月匣が張っており、落下による怪我は無いだろう。

だが、下では暗い闇が渦巻いている。その中に落ちてしまうとウィザードには、助ける事が出来ない。

「死なせない。」

落下していく彼女を救う為、灯が飛び出す。

くれはに向かって、その手を、助ける為の手を伸ばして彼女の腕を掴む。

くれはをしっかりと抱え予備の筈の上に乗せる。

「……………間に合った。」

灯は安堵する。

柊の魔剣はくれはの体を簡単に貫いた。それが逆に幸いとなった。もしも、押し開くように貫いたものだったなら、怪我はこれ以上に

酷いものになっていただろう。

治癒魔法で傷口を塞いでいく。

灯は安堵しながらも、内心では怒っていた。

何故、くれはを助けようとウィザードは動かなかったのか。
それよりも何故、柊の手助けをしなかったのか。

柊の援護に回っていれば今の状況にはならなかったかもしれない。

だというのに、この様子と対応。

怒りと呆れ。

その二つの感情を後ろのウィザード達に向けて、柊には視線を向ける。

柊蓮司。

体を黒で縛られており、苦悶の表情をしている。

あの黒の刃は、恐らく柊の体と精神を汚染して操る為のもの。

今、柊の魔剣は黒。

血に飢えているかのような禍々しい黒。

灯は、柊にガンナーズブルームを向ける。

「――元に戻して、くれはに謝らせる。」

その言葉と同時に、弾丸が放たれる。

弾丸は簡単に切り払われてしまう。

柊は自らの腕を薄く切り血を魔剣に与える。
魔剣は歓喜の唸りをあげ震え出す。

魔剣を掲げて呟く。

「《三千世界の剣》」

柊の背後に、平行世界から呼び出した同一の魔剣が無数に展開される。

「――！！」

圧倒的な力の差。

大規模な攻撃であり、威力は尋常ではない。

そのうえ今、魔剣は主の血を得た事により、通常の何倍もの切れ味となっている。

同一存在の魔剣も血を得た状態で呼び出されている為に、一つ一つが脅威的な威力を出すだろう。

「――！！」

柊も自分の行いを驚いている。

《三千世界の剣》は、魔剣使いの技の中でも飛び抜けて凶悪。

殺し尽くす為の技。

柊は、それをウィザード達に向けている。

そんな自分自身が信じられない。

後は号令をかけるだけで魔剣が放たれる。

柊は号令をかけないように口を閉ざす。

だが、口は動く。

「撃……………て。」

魔剣の雨が、ウィザードに襲いかかった。

柊は考える事を止める。

いや、脳が汚染されたというべきか。

いや、精神が完全に汚染されたというべきか。

どちらにせよ、柊は考える事が出来ない。

魔剣の雨がウィザードを貫いていく。

柊は思考する事が出来ないが為に無表情で、その様子を見ていた。

光の反射しない瞳で、見ていた。

頬にポツンと冷たいモノが当たる。

灰色の空から雨が降ってくる。

最初の冷たいモノが雨なのか、涙なのか。

それさえも分からない。

何も分からない。

魔剣が手の中で震える。

分かるのはそれだけ。

柊蓮司は、ただ命令を遂行する機械となる。

雨は容赦なく降り注ぐ。

魔剣の雨も、大地を潤す雨も降る。

前者は血で

後者は水で

大地を濡らしていた。

遠い幻

俺は燃え盛る街を見ていた。

――これは夢。

いや、記憶なのか。

前の方にはベレートが、俺と同じように燃える国を見詰めていた。
その手には息絶えた黒髪の女性が抱えられている。

「――神。」

憎悪を含んだ声。

その声に返事をする者は誰一人としていない。

「俺を墮とす為だけに、皆を殺めたのか……？ 貴様が守るモノとは、一体なんなんだ………？」

その声は、神には届かない。

国は人の血で濡れる。

血の赤、炎の赤。

眼が痛くなる程の赤。

記憶は再生される。再生される度に様々な事を知っていく。

記憶の中のベレートは黒髪で黒眼だった。

元々、平凡な青年だったベレートは多くの者を守る為に王となった事。肉親を、友を。

愛した者を。肉親を、友を。

愛した者を。その時代での守る術の中で、王となる事を選択しただけだった。

記憶の中の草原。

草花の匂いが漂い、鼻を刺激する。

その草原の中で、黒髪の女性がベレートの腕を掴んでいた。引き止めているのだろうか、今にも泣きそうな表情で言う。

「王になんてならないでよ……………」

ベレートは女性の頭を愛おしそうに撫でる。

「レジェ、俺が王になるのは君の力を隠す為なんだ。俺は大丈夫だから……………」

黒髪の女性……レジェは自分の手を見る。

――冥魔？

俺は感じた。

冥魔の気配をレジエという女性からだ。

「俺が王にならないと……君は道具として扱われてしまう。そんなの堪えられない……。」

そう言われてもレジエは腕を放さない。

「王になるという事は、神に目を付けられるという事と同じだよ……。強い王になれば、下手したら殺され……。」

そこで再生が終わる。

次の記憶は、さっきの草原での戦いだった。

王になって、かなり経った記憶のようで多くの兵達が後ろにいた。ベレートが手を上げて、皆に言う。

「皆の者、剣を構えよ。

これが最後の聖戦だ！」

魔法が飛び、剣が交わされる戦場。

ベレートは七種の属性の魔法を放って討ち倒す。その威力は、まだ人間であるとは思えない程。

- - - 結果は完勝。

だが、帰還した時……誰も喜べなかった。

- - - 何故か？

それは国が燃えていたからだ。

濃厚な血の匂い、多くの煤が舞う。人だった“モノ”が転がっている。

街中から声がする。

「街の外へ！ 早く！」

「戦える者は武器を！ 非武装では危険だ！！」

直後に、言葉を掻き消す大きな悲鳴。

ベレートは駆け出す。

血の匂いが濃厚な方へと全力で駆け出す。

街の中心にいた。

冥魔の群を、意思の無い瞳をしたレジェを。

使徒と思われる翼を生やした青年を。

その青年は人だった“モノ”を踏み虐げる。

「全く……遅いものですね？ 半数以上はモノと化しましたよ？」

“モノ”を蹴り飛ばしてくる彼は笑っていた。

そんな彼を、ベレートは殺意を込めた眼で睨みつけていた。

「ほら、冥界と世界を繋げる“鍵”も体が保たないんだからさあ……」

レジェを指して“鍵”と言い切る。

「黙れ、下郎。」

怒りを通り越し、冷たい声を発するベレート。

青年も流石に冷や汗を垂らす。

「こ、この僕を殺せば……お、堕ちる事になるんだぞ……！」

堕ちる。

それは王の称号を失い、侵魔に名を連ねる、つまりは魔王になると

いう事である。

王は、どんな者であろうと堕ちる事を嫌う。
青年もベレートが堕ちる事を嫌うと思い、言ったのだろう。

だが、ベレートが王になった理由は守る為。

「堕ちる？ その程度の事で俺の手が止まると思うなよ、使徒風情が。」

ベレートは魔力を込めた手を向ける。

俺はずっと見ていて分かった。

ベレートは使徒の主……神に嵌められた。

全てを統べる王に、強力な魔法を扱えるベレートになった時、神は恐れたのだろう。

神を殺しに来るのではないかと。

ならば、王から堕としてしまおう。

その為に、捨て駒……使徒を殺させよう、と。

「この惨劇の主犯は神、か……………」

目の前の光景は動く。

ベレートの手が使徒の体を貫き、魔法で燃やし尽くしていく。

使徒が死ぬと同時に髪がくすんだ銀色となり、瞳が紅と変化する。

魔王に堕ちた為に、容姿が人間から変わったんだろう。

[illegible]

ベレートの体から魔力が溢れ出す。急に魔王となった為の反動で、壊れたかのように笑っていた。

その横でレジエは目を覚ましていた。呼び寄せた冥魔が消滅してい

この街に生きている他の命は感じられない。そして、レジェは自分の命が保たないと分かった。

冥界と世界を繋げ、冥魔を呼ぶ門の代わりをしたのだ。一応は人間の身である為、門の代わりなど身に余る行為だった。

死に近づく体を無理に動かす。

「ベイト」。

返事が返ってこない事をレジエは分かっている。何故なら、堕ちて得た膨大な魔力に精神を吞まれているからだ。

レジェは手を伸ばし触れた時、呟く。

「永久に共に

捧げたる魂を」

そして、レジェの体は崩れ落ちる。魂がベレートの中に入っていく。恐らくベレートの魔力を内側からレジェが制御をするつもりなんだろう。

魔力が溢れなくなり、体内で循環しているのが見て分かる。

ベレートは自我を取り戻す。

だが、目の前のレジェの抜け殻というべき体を見て後悔する。燃えていく街を見て慟哭する。

レジェの体を抱えて立ち上がり、最初に見た時の言葉を発する。

「……神。」

「俺を堕とす為だけに、皆を殺めたのか……？ 貴様を守るモノとは、一体なんなんだ……？」

そして、今度はレジェに向かって呟く。

「レジェ、もう一度……君に生を……。」

魔王となつてからの少しの間――まだ人間の部分が残っている間だけが再生される。

ベレートが堕ちてから持った目的。
ルー・サイファーと協力してまで叶えたい願い。

――レジェの復活。

それが分かった瞬間、気になった。

――レジェが誰かに似ている事を。

誰か、近くにいた人。

そして、現実の俺は目を覚ました。

超兵器へ狙撃たん

アンゼロットは机を何度も叩く。

「ガッデム！ なんとこの事でしょう！！」

左モニターに映るのは、無数の神殺しの魔剣と無表情の柊。

右モニターに映るのは、倒れ込んだ複数のウィザードと頭を抱えて苦しむ燕。

そして、中央モニターに映るのは月匣。

荒れ果てた白い古城を象っており、少し前に断末魔の叫び声がした。

月匣の中にいるのは、ベレートの転生体である流々影司と巫女の搜索、保護を担当する部隊。

「柊さんと戦闘状態にあるウィザードの転移を！ 燕部隊の回収を急ぎなさい！！」

魔剣が放たれる前に転移をさせたい。出来なければ………戦力の大幅低下になってしまう。

「大規模転移魔法陣セッティング！！」

「オールグリーン！！ 展開開始します！！」

「カウント、スリー！」

魔剣はウィザード達に向けられる。

「防御魔法のセッティングー！」

「アイアス広範囲防御魔法展開開始。」

「カウント、ツー！」

「《アイアス》展開。
カウント、ワンです。」

同時に、無数の魔剣がウィザードに向かって放たれる。

「《アイアス》起動。」

透明な魔力壁がウィザード達を守るように出来上がる。

《アイアス》

防御魔法の最高位。

魔力の消費が激しく、儀式での展開が望ましいとされる。

ロンギヌスは様々な機器を使い、簡易版の《アイアス》を展開した。

ロンギヌスが誇る最強の盾。

だが、相手は柊蓮司。

歴戦の魔剣使いであり、神殺しの魔剣の担い手。

《アイアス》は簡単に破壊される。透明な魔力壁は硝子のような破片を撒き散らし消える。

「て、転移開始!!」

慌ててキーを押す。

しかし、間に合わない。

数人の腕や脚が飛び、血が地を濡らしていく。

そんな状態での転移。

千切れ飛んだ腕や脚は転移されなかった。

苦しむウィザード達は、ロンギヌス救護班に連れて行かれる。

ロンギヌスの後について行く灯。その手には意識の無いくれはが抱えられている。

「くれは……………」

救護班にくれはを託し、灯はアンゼロットの方へと歩きよる。

「灯さん……………。柊さんを正気に、元に戻すつもりですか？」

「アンゼロット、止めても無駄。」

灯の言葉を聞いて、アンゼロットは微笑みながらトランクを渡す。

「……………何？」

「これはですね。超遠距離専用筭オプション……………
……………《狙撃たん》です。」

「……………いない。」

突き返そうとする灯だが返す事に躊躇する。

ルー・サイファー戦でも超遠距離のオプションを使用した為に、その有効性を知っているからだ。

「この《狙撃たん》……………狙撃担当を示しているんです。」

「狙撃担当……………、前は一回限りだったけど？」

「ふふ……………、今回は威力は小さくなりますが、弾丸は通常の物です。」

前回の超遠距離オプション《超ロングレンジライフル》

有効射程5000キロ。

威力は通常の二倍以上。

一回限りの超兵器。

「超遠距離から柊さんの頭でも撃って下さい。死なない程度に。」
「分かった。」

灯はトランクを持ち歩き出す。

「俺も行く。」

そこには、腹出しルックのナイトメアがいた。

「ドリームマン。」

二人の言葉がハモる。

「違う。俺は……」

「あつ、茄子色カブトムシでしたよね。」

「言うな！ その名だけは思い出たくない！」

頭を抱えるナイトメアを無視して、アンゼロットは手を上げる。

「では、お二方……柊さんを頼みます。」

握り締めたヒモを思い切り引く。

「あ、前衛がない。」

落としてから気付いたアンゼロットだった。

天の城（前）

城の中を歩き回る。

俺の左手から赤い雫が垂れて落ちる。白い床が赤い斑点で彩られていく。

目が覚めた時、俺は白い部屋で寝ていた。

左手には木の杭が打ち込まれており、ズグンズグンという鈍い痛みが走り気を抜けば簡単に気絶するような状態。

杭を思い切り抜いた時は激痛で気絶しかけた程だった。

治癒魔法を軽くかけたのだが、完璧に治しきる事は治癒魔法のスペシャリストではないので流石に出来ない。

「はぁ……はぁ……。」

額を汗が伝う。

鈍い痛みが、いつまで経っても治まらない。

ふらついた足取りで歩いている為に時折、壁にぶつかる。

「いつつ………！」

激痛につい蹲る。廊下の奥を見て、そのまま座り込んでしまう。

何処までも続く廊下。

一面、白で埋め尽くされた廊下を歩く事にどうしても疲れてしまう。

『真つ白な檻の中で眠っていて良いんですよ？ 城主は私、貴方は迷い込んだ小鳥のまま。』

女の声が廊下に響き渡り反響する。

「迷い込んだ？ 迷い込ませた奴が何をほざく。

城主？ こんな居心地の悪い城の主の言う事を誰が聞くものか。」

強がってみせるのだが、声の震えは隠せない。

女の声がまた響く。

『その口調、まるでベレート様のようにですよ？』

思わず口を押さえる。

さっきの言葉は意識して言った訳じゃない。それなのに、ベレートのようだという事は記憶に侵食されているんじゃないのか、と想像してしまう。

少しずつ、少しずつ侵食されて最後には自分という存在が消え失せてしまうのではないか。

侵食された結果、自分の手で守っていたモノを、その自分自身の手

で壊してしまうのではないか。

それだけは嫌だ。

白い壁を左手で叩く。

「……………っ!!」

傷を押さえて呻く。

それと同時に壁が崩れていく。

「隠し通路……………か。」

今まで歩いてきた廊下が幻のように消える。

俺のいた場所は短い廊下の行き止まり。

「無限ループとか勘弁してくれ……………」

女の笑い声が微かに聞こえてくる。

「……………悪趣味だな……………」

そう思いながら隠し通路を見る。

白色に混じって、赤黒い……………血の跡。

その量は一人分程度。

よく見ると壁に銃痕などが残っている。

『一緒にいた三羽の小鳥は、お城の中を鬼に狩られないように飛び回っていますよ。』

貴方は――狩られそうな小鳥達を捜しますか？

敵かもしれない、と襲い掛かろうとした小鳥達を――助けますか？』

「――当然。

仲間……だからな。」

微かに聞こえていた女の笑い声が止まる。

『――撃たれても？』

――斬られても？

――貫かれても？

その意志を変えない？

何があっても

――変えない？』

確認するように何度も、何度も問いかけてくる。

俺はその声に応えずに、奥へと走り出す。

――鬼に狩られないように飛び回って――

急がないと間に合わないかもしれない。

血の量からして、一人は重傷を負っている筈。

廊下を走り抜けると、大広間だった。周りを警戒しながら階段をゆつくりと下りていく。

「広すぎ……。月匣の中じゃ《魔力感知》も役に立たないし……」

――ドオンッ！！

銃声がすぐ近くの扉から聞こえてくる。

「此処か！！」

魔装を展開し、扉を蹴り開ける。

箒騎士が体に風穴を空けて倒れ伏した吸血鬼を撃ち続けていた。

そして、俺の方に箒を向けて咄く。

「――手早く済ませちまうか。」

引き金が引かれる。

天の城（中）

銃撃を掠りつつも間一髪で躲す。

「ちっ！ 外したか！」

俺は防御魔装を即座に展開する。

「ま、待てって！！」

二度目の銃撃。

防御魔装にぶつかり、相殺する。

「話を聞け！！」

「頭に一発。胴に二発。両手両足に四発ずつ。

それで仕留めてやる。早く死んでいくといい。」

話を聞く気が無い箒騎士は口元に歪んだ笑みを浮かべる。

「ちっ！」

相手を危険だと感じ、即座に魔力を爆発させて煙をあげる。部屋を飛び出ながら、部屋の扉部分を崩す。

恐らく、これで隠れる時間が稼げる。そう思いながら駆け出す。

――吸血鬼が鬼の筈だから小鳥狩りは終わり。今度、狙われるのは俺って事か……。

しかし、箒騎士が単独で行動しているという事が不可解。
吸血鬼を撃退するなら、他の二人と行動を共にした方が生存率は上がる。

他の二人と行動を共に出来ない、そんな状況なのかもしれない。
ただの独断行動、その可能性もある。

自分が眠っている間に、何があったのか。

考えながら走り、隠れる事が出来る所を探す。

何度も何度も銃撃音が鳴り響き、その度に崩れる音がする。

だが、その音も随分と走ると聞こえなくなる。

……月匣の構築者、天を倒せば月匣は解除される筈だけど……。
この馬鹿でかい月匣の中を歩き回って捜すって……。無茶にも程がある。第一、仲間を捜すにしても広すぎて遭遇する可能性が低いだろう。

「主の断罪の光を、我が刺突剣に。」

主の加護の光を、我が法衣に。」

その言葉を聞いた瞬間、体が無意識に反応し地を蹴り後ろに跳ぶ。

直後に目の前をレイピアが通り過ぎていく。

「なっ!？」

こんな広い月匣の中で、遭遇するとは思わなかった。髪の毛が数本、切り飛ばされてしまったが、それで済んだのは僥倖と言つべき。

後ろに跳ばなければ、レイピアが頭を貫通していただろう。

「聖職者アルテア。流々影司、覚悟せよ。

私は剣で貴方を殺してみせる。」

声ができる方には、光を纏うレイピアを構える聖職者……アルテアが目の笑っていない笑顔で言葉を紡ぐ。

「私一人でも……貴方達の相手は出来る。一応は《聖遺物》の使い手なんですね。」

……私“一人”でも？

……貴方“達”？

その言葉に疑問を抱きつつ、後ろに下がる。

「これは流石に予想外。まさか、全員が……」

アルテアの手が月衣の中に入れられ、取り出されるのは《聖遺物》
――――チェーンソー。

普通の電動ノコギリではなく、《聖遺物》と化した電動ノコギリ。
戦闘用に扱いやすく小振りの物だが、回転は本来の用途には必要
だと思われる程に回っている。

「――敵だとは思わなかったよ。」

チェーンソーが回転を増し、轟音を鳴らす。
空気が殺されて悲鳴をあげているような轟音。

「安心して。」

ちゃんと――バラバラにしてあげるから。」

チェーンソーが緊急展開された防御魔装にぶつかるのだが、ガリガ
リと削られていく。

避ける事が出来ない。

チェーンソーが体を抉って、削って、すり潰すのを俺は確信した。

つまり、この身が死ぬのを確信した。

バラバラに自分の体が肉塊となっていくのを、苦痛と共に理解する。

声が脳内に響く。

『これが現実。』

意識が薄れていく中、女の悲しそうな声が聞こえる。

『だから、いつそ苦痛を感じないように………眠ってしまいましょ
う。』

耐え難い苦痛の中で、その甘い誘惑に耐える事は出来なかった。

俺は、流々影司という意識を手放した。

留まる所を知った光

天を司る者は幼い頃、奴隷番号で呼ばれ、生きているのか、死んでいるのか分からない生活を送っていた。

国同士の戦争になった時は奴隷兵として戦いに出る。そんな人生で終わろうとした時に見た。

――敵国の王を。

虚無と闇を纏う、王として異質な王。

だが、それこそが彼の王とさせる“何か”なのだろう。

その手で操る闇の全て、死の塊が自分一人に向けられているかのような錯覚を起こす。

そして、彼は圧倒的な死を私達に向けて放つ。

仲間達が闇に呑み込まれて死に絶えていく。

その光景を見る事は出来なかった。

何故か？

目を開く事さえ適わない光が、目の前を覆い尽くしたからだ。

光が消えて無くなった時に見た光景は何百、何千の亡骸が転がる荒野と迫ってくる敵。

きつと殺される。

漸く奴隷から解放されるという考えの方が強い。
喜びの感情というモノが普通は湧くのだろうが、その感情は元より
無い。

目を閉じて死を待つ。

「名乗れ。」

重々しい声が耳に届く。
目を開くと虚無を纏う王が立っていた。
兵士達は、その後ろで待機している。

「聞こえなかったか？ 俺は名乗れと言っているのだが。」
「に…………… 2 1 5 8。」

奴隷番号を口にする。

言い慣れた数列。自由など一切無い苦しみを思い出させる。

「ふむ、優秀な人材を奴隷扱いとは愚かな。」

何を言っているのか分からない。

誰が優秀な人材？

誰の事を言っている？

「……………進攻を先に済ませてしまおうか。この者を連れて帰っておけ。」

兵の一人に私を託し、亡骸で埋もれた荒野を彼は進んでいく。その後が続いて兵士達が進む。

私のいた国は滅びた。

あの力に勝てる筈もなく滅びた、それは必然なんだと思った。

私は名前を貰った。

マリー。

それが名前となった。

「マリー、マリー。」

自分の名前を何度も口ずさみ、笑みを浮かべる。

白い城の中を走り回って遊んでいた。

初めての自由。

何もかもが新鮮で楽しかった。

「マリーちゃん。」

黒髪の女性――レジェが私の頭を撫でる。

「レジェさん――！」

手をパンパンパンと叩き合わせ、光の鳥を作る。

それを見てレジェは息を呑んだ。

魔力の操作を少しでも誤れば、鳥を作るなんて事は出来ないらしい。
簡単にやってのけた私には魔法を扱う才能があったとの事だった。

「綺麗……。」

光の鳥は羽ばたいて、飛び回った後に光の粒子となって消えていく。

「あ、鳥さん……壊れちゃった。」

そう言いながらレジエを見る。

彼女は、まだ空をジッと見詰めていた。

「……………レジエ、さん？　どうかしましたか？」

鳥は既に消えている。だと言っのに何故、空を未だに見ているのだから？

「レジエさん！？」

「……………え？」

何度も瞬きをして、漸く私の方を向く。

「花びら……………とても綺麗だったなあ……………」

「は、な……………びら？」

私は花びらなんて作った覚えは無い。

「うん、色んな花びらが舞い散って……………」

色んな花びら。

光では、まだ個しか作れる事が出来ない。

“色んな”花びらなんて私は作れない。

……………どうして、そんな物を見たんだろう？

ずっと疑問だった。

魔法を学び始めてから、この国の王……ベレート様が教えてくれた。

「……………光による幻覚。または夢、と言ったところか。」

どんな物でも見せる事ができて、見た者の精神を揺さぶる光。

美しい物を見せる事も、悲しい物を見せる事も出来る光。

その力が分かった時、私には役目が与えられた。

目の前にいるのは敵国の捕虜。幼い男の子で、私と同じような奴隷だったのか、体中に鞭などで叩かれた類の古傷が至る所にあった。

「その力で最後の夢を見せてやると良い。……………いや、彼にとって
は最初で最後となるだろう。」

最初で最後の夢。

少年を見る。

その腕には薬を投与された痕があった。恐らく彼は薬による強化人間。

敵国は戦力差を、幼い子供の奴隷を強化人間として、兵器として育て上げてきたのだろう。

私には分かる。夢さえ満足に見る事が出来ない地獄の底のような場所。

ただの奴隷兵だった私は少しぐらいは夢を見た。引き離された家族

という夢を数回ほど。

けれど、奴隷からなった強化人間は違う。

少しも夢を見る事が出来ない。薬の副作用で全く寝る事が無くなる、眠たくならないのだ。

だが、代わりに溜まった疲労を回復する事が出来ないらしい。

奴隷の中で仕事をする事が出来ないような者が、強化人間とされていた。

目の前にいる少年は、その中の一人。

夢を、幸せな夢を見る事が出来なかった少年。

今、少年への薬の投与は誰もしていない。

きつと、少年は死ぬ。

だから、最初で最後。

私は光の球を浮かべる。

「貴方に幸福な夢を。」

音を立てて光の球が弾け散らせる。少年は幸せそうな笑みを浮かべる。

私が想像した夢とは、別れたであろう家族の幻。

「最後の夢ぐらい……幸福じゃないと、ね。」

少年は暖かい幻に包まれながら、少しずつ呼吸を荒くしていく。
夢の中の彼はそんな事も知らずに幸福を受け取っている。

息を引き取るまで、最後の幸福を。

そんな人達を見続けた。

私は夢を見せる。

死ぬ瞬間ぐらいは、幸福であって欲しいから。

国が燃える前日、私はベレート様に魂を取り込んで貰った。
元々、私は奴隷出身だった為に免疫力が低下していて病気になる事が多かった。

ベッドで寝たきりになった私の近くに、ベレート様が近寄ってくる。

「ベレート様、私は……十分に生きました。」
「本当か？」

私は柔らかな笑みを浮かべて、ゆっくり頷く。

「救ってくれたお礼に私を差し上げます。」

私の人生は幸せだったのかもしれない。

天の城（後）

白い城の一室に流々影司の姿があった。

夢の中でチェーンソーで叩き斬られはしたが、現実の自分の体は何一つ怪我はない。

体に怪我は無かったのだが、流々影司という魂が動かす事を止めた為に体は動かない。

“俺”は溜め息をつく。

目の前にいるマリーは、顔を伏せている。

「もう、この体の……写し身の役割は無かったんだがな……。」
「すいません……………」

ベレート、“俺”は流々影司という転生による写し身を作った。

その理由は、表向きには前回の戦いにより本体が写し身を出す事が出来ない為となっている。

しかし、本当の理由は全く違うモノである。

……流々加奈絵。

彼女の近くに転生し、本来の目的を達成するつもりだったのだ。

「まあ、今となっては済んだ話でしかない。」

“俺”は自らの胸……心臓付近に手を当てる。

「魔力の無駄だな。

……殺すか。」

心臓に当てた手に力を籠める。

貫くように、だ。

だが、“俺”の手はマリーに止められる。

「じ、自分自身を殺す………のですか？」

「この肉体を制御しきっている訳ではない。所有権が“俺”にある内に、始末しておいた方が後で殺すのに手間取る事が無いしな。」

流々影司という魂は、体の所有権を取り返そうと“俺”という魂を排除しようとする。

この体の本来の所有者は流々影司。

作り上げた“俺”でも、所有者とは成り得ない。

「殺す、と言うなら私は貴方を止めます。」

「………“俺”の邪魔をするか、マリー。」

闇が沸き起こり、マリーの周囲を取り巻く。

闇は無数の剣に変化し、その切っ先をマリーに突き付ける。

「私達は転生体を護る為の写し身。他の者達は、流々影司を殺害し、

本体に還る事を望むようですが私は違います。」

マリーは、もう片方の手で剣の一つを掴む。指と指の隙間から滴り落ちる血は、地に着く前に魔力へと変わり霧散する。

「どんな者であろうと、私の主なのです。殺すのも、殺させるのも有り得ない。例え、貴方自身であっても……私の主を殺させはしない。

……残念です。

貴方なら、写し身として活用してくれるモノだと思い、影司様に所有権を手放すようにしたというのに……！！」

マリーが叫んだ瞬間、霧散した魔力が無数の羽を象り、落下してくる。

一つ一つに籠められた魔力は、強力な攻撃魔法に匹敵する程。しかし、その魔法の役割は攻撃ではない。

「すみません、精神を破壊させて頂きます。」

「簡単に出来ると思っているのか？」

闇の剣が光の羽を軽く切り払ってゆく。

それと同時に空いている手でマリーの頭を掴む。

少し力を入れるとギシギシと音が鳴り、マリーの端正な顔が苦痛に歪む。

「や、闇で……！？ う……そお……ベレート様はこ、れを……
…防げな、かった……はず？」

「さて……………」

急がなければ、城の月匣が消え失せてしまっし、体の所有権を無くしてしまう。

再度、自らの胸に手を当てた瞬間、目の前の景色がブレる。

「間に合……………」

手が体を突き抜ける前に“俺”は所有権を失う。

“俺”ではなく、俺が所有権を握る。

その時、硝子が割れた音……………月匣が壊れた音が響き渡った。
辺りを見回し発見するのは仲間の死体だけ。

巫女などいない、死に満ちた何も無い街並みだけが目に入った。

闇の中で囓う者

闇に染まった街の中で燕部隊を回収するロンギヌス。

彼等は困惑していた。

「居たか？」

「速水燕の遺体、四肢の一片もありません。」

「生存者の確認は終えました。ですが、明らかに人数が足りません。」

燕の姿が無く、その部隊のウィザードの死体、生存者の人数が足りていないのだ。

「隊長。侵魔か、冥魔に……喰われた可能性も有るのでは？」

「可能性としては否定は出来ん。」

0 - p h o n eを取り出し、ロンギヌス本部に転移を指示する。

その時。

見る事さえ適わぬ程に細い糸が、人を闇へと引きずり込んでいた。それに誰一人として、気付く事はなかった。

場所はアンゼロット城に変わる。落ち着かない様子のアンゼロットは、渴いた喉を潤す為に紅茶を一気に飲みきる。

巫女の大多数を侵魔側に回収されてしまった事。

柊蓮司がベレートに操られている事。

回収した燕部隊の人数が明らかに足りない事。

それらの事を考えるアンゼロットを離れた場所から見ている者がいた。

ベール・ゼファアの配下であるネビア・ロスア。

今は計画を阻止する協力関係にいる存在。

彼女は誰も気付かないぐらいの小さな笑みを浮かべていた。

「アンゼロットも役に立たないね。」

とある部屋の前に立ち、ネビアは指先を細かく動かす。細い糸が蠢き、部屋の中に侵入していく。

部屋の中に居るのは、数人の巫女。

その一人一人の首の後ろに糸が突き刺さる。

脊髄に侵入し、神経にまで入り込んでいく。

ある程度、侵入したところで指先から糸を切り落とす。

「しつかり、人形として働いてもらうから。」

その場から立ち去りながら、手の中で小さな水晶玉を弄ぶ。

中に映るのは、人影。
数十、数百に至る人影。

さっきの言葉は数人の巫女に言ったのか、それとも水晶の中に存在する者に言ったのかは彼女以外の誰にも分からない。

ただ一つだけ分かる。

彼女は人を操る人形師。

彼女にとって人は、人形である。
いや、人形でしかない。

「他の魔王は、お人形遊びとしか見ないけど……その認識を改めさせる。

アンゼロット

ベール・ゼファー

ルー・サイファー

私を舐めて見てる貴方達に後悔って奴をあげる。

稀代の人形師の技術を、馬鹿にした罪を償ってもらうから。」

最後の言葉を少しばかり憎悪を籠めて発し、彼女はアンゼロット城から姿を消した。

ルー・サイファーは魔法陣の中心に立つ。

場所は、彼の地底湖。

世界結界を上書きした地底湖。

「魔王の魔力で維持した世界結界だ。介入は通常よりも容易いはず。」

計画通り、と笑う。

「……アンゼロットよ、貴様は肝心な所で甘い。ベレートの甘言に惑わされず、“生贄”を捧げておれば良かったと後悔するが良い。人間の思いなど介さぬ方が世界の守護者としては優秀だと理解せよ。まあ、もう遅いがな。」

魔法陣が鈍く輝き出す。

その光は“災厄の魔王”を象徴する七色。

「さあ、後一人だ。その一人で世界が変わる。」

「……今の内に弟と話さなくて良いのか？」

部屋の隅に佇む加奈絵。

彼女は首を横に振る。

「お心遣い感謝します。ですが、会えば決意が揺らいでしまいますので遠慮しておきます。」

「貴様をウィザードでいさせるのが惜しいな。」

その言葉に加奈絵は、優雅に一礼する。

「有り難きお言葉、ありがとうございます。」

言葉はウィザードのモノとは思えない程、自然に紡がれる。

……ベレートよ。

この様子ならば、貴様の目的は直ぐにでも果たされるだろう。

そう考え、ルーは笑みを零したのであった。

穿つ一筋の光

街の中で最も高い場所に彼女はいる。

緋室灯はスコープから狙いを定める。

一回、二回、三回。

息を吸い、吐く。

狙い撃つのは柊蓮司とベレートを繋ぐ、黒い魔力の糸。

それを断つ事が出来れば……柊蓮司を助けられるかもしれない。

「外せない、必ず当ててみせる。」

この一撃、少しのズレも許されない。

誤差を計算し、計算し、計算する。

引き金に指を掛ける。

「ナイトメア、上手くいったら柊蓮司を。」

『上手くいったら？　上手くいかなければ死ぬだけだろう？　第一、当たらないなんて事……有り得んな。』

その言葉には、幾度も任務を共に熟した仲間への信頼を感じ取れる。

「任せて。」

引き金を、引いた。

放たれたのは弾丸ではなく、圧縮された高濃度の魔力による光線。周りを壊して進む。

柊も身の危険を感じたのか、相殺しようと魔剣を振るう。
ぶつかり合う強力な魔力は、辺りを吹き飛ばす余波を作り出す。

歯を食いしばり、魔剣に膨大な魔力を叩き込む事で光線を消し飛ばそうとする。

優勢なのは魔剣。

籠められた魔力の違い。

魔剣に籠められた魔力はベレートから供給されているモノで、強大で膨大である。

対して、灯の撃つ光線に籠められた魔力は集められ濃縮されたモノで、強力なだけで限りがある。

その差は決定的。

光線は十数秒は保つが、消し飛ばされてしまう。

消し飛ばした瞬間、直ぐ横を光線が過ぎった。

慌てて魔剣を振るうのだが、遅い。

既に通ら過ぎた後。

黒き糸は穿たれる。

柊の手から魔剣が滑り落ちていく。

「ナイトメア。」

『分かっている！』

ナイトメアが飛び出る。

ベレートは動かない。

何が目的かは分からないが、今しかない。

崩れ落ちそうになる柊を掴み、離れる。

「転移を早くしろ！」

ナイトメアは叫ぶ。

目の前の存在から一刻も早く離れたい。

ベレートはゆつくりと近付いてくる。

威圧感からか、近付いてくる毎に空間が歪む。

呼吸が整わない。

汗が頬を伝う。

視界が揺れ動く。

勝てない、これは絶対。

死ぬ、これも絶対。

逃げろ、と体が叫ぶ。

触れてはならない、と脳が叫ぶ。

「……………何が目的だ？」

転移までの時間稼ぎになれば、と話し掛ける。

答えるかは分からないが意味なく死ぬよりかはマシだろう。

「貴様は確か……………ナイトメアだったな。」

歩みを止め、相手を見据えるベレート。

口元には笑みを浮かべている彼に対し、ナイトメアは顔を強ばらせる。

「目的か。今回、俺は頼まれただけなのでな。」

宝石のような物を取り出し、見せる。

それはウィザードならば誰であるかと知っている物。

――プラーナ。

人や物、全ての心の中にある生命エネルギー。

「それは……一体。」

誰のプラーナなのか？

聞くまでもない。

プラーナは接触したモノから得るのだから。

「柊蓮司、か。」

それ以外の答えは無い。

その言葉と同時にナイトメアの足元に転移の魔法陣が展開される。

最後に見えたのは、肯定の笑みだった。

灯は場所を移動し、スコープでずっと見ていた。

ナイトメアが危険に陥れば、援護を出来るように引き金に指を掛けて見ていた。

転移した後も見続ける。

「！？」

目が合った。思わずスコープから目を離す。
もう一度、確認する。

「い……………ない。」

慌てて探す。

転移して消えたのか、それとも……………。

「視線から場所を割り出すなど容易い事だぞ？ 狙撃兵ならば、身を隠す道具を使用するべきだとも思うがな。」

後ろから声がする。

咄嗟に筈のオプションを外し、振り返りつつ銃口を背後の存在に向ける。

「柊蓮司のプラナ、返して。下手したら……………目が覚めない。」

プラナを抜き取られれば、目を覚まさない事がある。
そんな事になれば、くれはが目覚めた時に申し訳が立たない。

「取ったプラナは少量だ。意識不明、とはならない筈だ。」
「信じられない。」

銃口がベレートの心臓に当てられる。
彼は苦笑する。

「その程度の弾丸で倒せると思っているなら、嘗められたものだ。」
ベレートの足元に転移の魔法陣が展開される。

「待つて。柊蓮司が目覚めなかつたら、次に会った時に消滅させる。」

灯は箒を下ろし、言う。

「出来るものならやつてみよ、と言いたい所だが目覚めるだろうか。ふむ、残念なものだ。」

そんな事を言い、転移してゆく。

その時、灯の0 - phoneが鳴り響く。

それは、くれはの目覚めを報告するものだった。

笑みを深めて

アンゼロット城。

保護された巫女達は目を大きく見開き、言葉を発する。

「理解、番、不在。」

「転移、式、解析。」

「魔法、陣、作成。」

「開始、秒、十一。」

本来、居なければならぬロングヌスの者達は戦闘などの援護の為、居なかった。

「遅延、式、待機。」

淡々と行動を口にする巫女達。

その声は誰にも届かず、誰も知る事は無かった。

ベレートは、最後の一人だと思われる巫女を捕まえようとしていた。その巫女を庇うように立つ者は鈴の音を鳴らす。

「私の名前はパール・クール！！ルー・サイファーの手駒に好き勝手やらせると思ってたの！？バツカみたいっ！」

ツインテールの魔王は構えを取る。

油断は……………無い。

逆に警戒している。

その後ろで巫女が走って逃げ出していた。

「パール・クール……………“超公”や“東方王国の王女”などと名乗っていた魔王か。大人しく退くが良い。」

因みに“超公”と言う爵位は存在しない。

彼女のでっち上げ。

超公（自称）と言われても可笑しくはない。

むしろ、正しい。

「“超公”の私に勝てると思ってんの？ 今なら見逃しても良いけど？」

笑みを浮かべているが、目は一切笑っていない。

「見逃しても良い、か。馬鹿げた話を……………」

ベレートは左手を前に出し、円を描く。

その瞬間、パール・クールが吹き飛ばされ……………いや、踏みとどまった。

「そんな軽い風で吹き飛ばされないんだから！」

実際、ベレートが使ったのは風の魔装の中で、下から数えた方が早いとされる物。

だが、それで魔王を吹き飛ばしかけたのは事実。

パール・クールの顔から笑みが消えたのは、嘘の笑みであっても浮かべること自体が危険だと感じたのだ。

「元人間とは思えない魔力。ルー・サイファアの下に就かないで私の所に来ない？」

「下に就いてるのではなく、交換条件で協力しているだけだ。契約は何よりも尊い。望まぬモノであっても……だ。

と言う事で、勧誘は契約が切れてからで頼む。」

「了解、了解つと。」

一、二回、踏み込んで回し蹴りを仕掛けてくる。

その足を左手――魔装による風で叩き落とし、揺らいだ体に間髪入れずに追撃を掛ける。

腹に一撃を加え、左手刀で首を薙ぐ。

「あつ………！」

頭を切り落とす事は流石に出来ないが、首の切れた部分から血が吹き出ている。

だが、まだ追撃する。

薙いだ左手の先に蝶の群れを出現させる。

「去ね。」

蝶の群れはパール・クールに纏わりつき、弾けていく。

黒い闇が身を抉る。

抉って、抉って、抉り尽くす。

蝶が消え失せた時に見えるのは、所々が欠損したパール・クールがいた。

意識が無く、呼吸さえもままならない状態で必死に回復している。

「さて、巫女はどこに逃げた事やら。」

巫女が逃げた方へ足を向け――いや、足を止めて振り返る。

「ああ、忘れていた。生き残ったのだったな。」

そこには血で汚れた――流々影司がいた。

「ただ一人、生き残った気分はどうだ？」

「最悪だよ、糞が。」

闇で作り上げた刃をベレートに向ける。

「く、残念だが俺は忙しい。貴様と遊んでやるような時間は一秒たりとも無いのでな。」

影司は背を向けるベレートを睨み、歯を食いしばる。

「遊び、だと……。」

「遊びにさえならん。早々に立ち去れ。」

闇の刃が飛んでくる。

ウィザードの攻撃としては通常より強力で凶悪に構成された物だが、

魔王の障壁を破る事は出来ない。

質も、量も、格も違う。

魔王を倒すには相応の準備が必要不可欠。

道具、情報、実力。

敵の手札を知り、敵の弱点を知り、敵の術を知らなければならぬ。

それが出来ないのなら、実力で勝るしかない。

魔王に実力で勝る。

下級の魔王なら可能性はある。

だが、同一の存在。

影司とベレート。

出来損ないと本体。

戦うまでもない。

戦いの結果は分かりきっている。

影司が放った闇の刃は、障壁を破る事さえ出来なかった。

遠ざかるベレートの背中を見ながら、足から崩れ落ちる。

「もう疲れ、た。」

0 - p h o n e を取り出し、アンゼロットに連絡する。
それから意識を失った。

その様子を影なら見る者がニヤリと笑った。

それに誰も気付く事は無かった。

劇の開始を告げる歌

魔王。

彼等、彼女等は様々な者達が存在している。

その中で強力な力を持つ魔王は元が古代神だった者達が多い。
超至高神に造反し、裏界に閉じ込められたのだ。

裁定者、人々の認識を書き換える力を持つ者。

彼等の「魔法などない」という観念が浸透した事もあり、裏界の存在は闇へと葬られていった。

人間が魔王になる時もある。

憎悪、狂気などと言った何かが切っ掛けとなり、魔王に堕ちる。

強力な力、特殊な才を持った人間は古代神と同じように裏界に閉じ込められてしまう。

彼女も同じだった。

ネビア・ロスア。

人形を操る才に恵まれた少女。

それ以外は何も出来ないような小娘。

城に幽閉され、人を殺す為の道具として扱われた哀れな小娘。

意思ある人を操り、死者を操り、物を操る。

彼女の父は、娘を商売道具として扱った。

忌み嫌われ、檻の中。

外を、戦場以外の外を知らない彼女は……………いつしか狂った。

殺して、殺して、殺す。

壊して、壊して、壊す。

彼女は気が付いたら、裏界にいた。

心の中で、もう人を殺す事は無いと思っていた。
だが、違った。

その力は魅力的。

誰もが欲しがった。

彼女を皆、奪い合った。

いや、彼女ではない。

力だけを目当てに奪い合ったのだ。

その力以外に価値が無いネビアを魔王達は見下していた。

何も変わらなかった。

誰もが力を見て、ネビアを見ようとしなない。

彼女は悔しかったし、憎かった。

自分は道具ではない、そう叫びたかった。

「認めさせる。」

私は道具じゃない、と。

全ての者に思い知らせるんだ、と。

ベレートが巫女を捕らえて、転移させる。

「最後の巫女も確保。」

その様子を影司の側に居つつ、人形の眼を通して見ている。

もう直ぐ、ルー・サイファーによる世界変革が起こる。

巫女の魔力によって、世界結界に干渉する。

ルー・サイファーが行うのは、世界の逆転。

表に立つのは我等だと。

つまり、巫女の魔力は世界を変える程のモノ。

その力を得る事が出来れば……………。

自分の操っている巫女をルー・サイファーの捕獲した巫女の中に紛

れ込ませ、巫女自身に結界に干渉してもらう。

ルー・サイファアの儀式を壊して、自らの儀式と為す。

――計画を完膚無きまでにぶっ壊す。

それがネビアの目的。

「死んだ後も利用してあげるね？ 影司。」

歪んだ笑みを浮かべ、影司の首を締める。

死地に影司を行かせていたのは殺す為。

死人を操る事が出来るネビアにとって、操る駒が生きている意味はない。

否、死んでいる方が操るのが容易い。

「早く、死んでよ。」

強く、強く、強く。

下手に殺して後々、動かしづらくなるのは困る。

少しずつ確実に死に近付いている影司。

もっと強く締めようとした瞬間。

「触れて良いモノ……悪いモノって分かる？」

腕が舞う。

ネビアが自分の物だと理解するには数秒ほど必要だった。

理解した直後に跳び下がる。さっきまでいた所が陥没する。

影司には当たらないように調節された攻撃を放った者が少し離れた場所でネビアを睨んでいた。

「貴方が何をしてたのか……教えてくれる？」

ウェーブのかかった銀色の髪が揺らぐ。

“ 蠅の女王 ” ベール・ゼファアが其処にいた。

「流々影司がベレートの写真になる可能性があるから関わるな、
と言ったのを破った貴方が信頼されてると思っただろう？ 黙って言う事を聞いてたら良かった下級魔王風情が調子に乗るから。」

ベール・ゼファアは手を向ける。

「ベール・ゼファア。貴方は……私が何をしたか、知ってる？」

「貴方の事をずっと見てる程、暇じゃないの。理由とかは本体に聞いてあげるから大人しく消えなさい。」

魔法が発動する寸前。

世界を守る結界が消え去り、世界を蝕む結界が発動した。

細く絶える事の無い糸が張り巡らされ、人形は意思無き瞳で動き出す。

世界は彼の者の手に。

狂った人形劇は、狂った主演によって開かれる。

ベール・ゼファアの目の前から、狂った主演は消えていく。

小さな声で歌いながら。

- - - 私は紅い空しか知らない。

- - - 青い蒼い空は血で見えない。

- - - お星様は輝きを発しない。

- - - お日様は雲で隠れて照らさない。

- - - 私は紅い月に照らされて。

- - - 血を浴びたかのように真っ赤に染まる。

- - - 綺麗な者は人形にして。

- - - 私という存在は私が操る人形。

- - - 孤独を紛らわせる人形劇を演じていた。

- - - でも、それじゃ愉しくない。

- - - だから、みんなで狂った踊りを踊ろ？

- - - 始まるのは劇。

- - - 生者も踊らなきゃ面白くない。

- - - 主演は私で、助演は貴方。

- - - 脇役は人形とお馬鹿さん達。

- - - さあ。

- - - みんなで楽しみましょう？

変革の瞬間（前書き）

side表記する事にしました。

読みやすくなっていると良いですが……

と言う事で、本編へ！

変革の瞬間

「side 加奈絵」

儀式が滞りなく進んでいた事は分かる。

だが、ルー・サイファーが巫女の魔力を使用し、世界結界に干渉し始めた時に異変は起こった。

儀式に集中しているルー・サイファーは気付いていない。空間に歪みが発生している事に。

――転移！？ 此処は通常の転移系統は発動しない筈！！

一分の迷いも無く、私は飛竜を向かわせる。

「間に合え！！」

私が右手を突き出す。

それに合わせるかのように飛竜は速度を上げる。

届け、そう私は願う。

守れないのは、嫌だ。

また、誰かを失うのは嫌なのに！！

そう思った瞬間、違和感がした。

――また、失う？ 私はいつ、誰を失った？

私は少し考え込んでしまっていた。

戦場で考え込むなどあつてはならない。
そのミスは付けとして回ってくる。

結果から言つとルー・サイファーを闖入者達から守れた。

現れた者達は転移して来たと同時に魔法を放ってきた。
飛竜は身を挺して、ルーを守り続けた。

その様子を見ながら私は膝をつき、腹部を見る。

「……………っ!!」

刃が突き出ていた。魔力で出来た刃だ。

「上書き、開始。」

後ろから私を刺した奴の音がする。

目の前で魔法陣の七つの光が、一瞬にして血の赤に変わっていく。

「う、くうああ!!!!」

ルーを赤い魔力が突き刺してゆく。

刺さった部分から漏れ出た魔力と血、その両方が蠢く。

私は後ろを見る。

「巫女の、ひと……………り? いや……………何か違う。」

相手の眼に意思が宿っていないのが分かる。

「精神、汚染……………」

血が溢れ出る傷口を押さえ、治癒魔法を何度も発動させる。
しかし、一向に回復する様子が無い。

「門、確保。」

手が伸ばされる。

――来て、飛竜^{ワイバーン}！！

心の中で叫ぶ。

飛竜は咆哮をあげ、赤い魔力を払いのけて向かってこようとする。
だが、魔法陣の外に出ようとするのに赤い魔力の壁に遮られ進めない。

手が近づいてくる。

魔物使いというのは、自らの使役する存在が離れた瞬間から弱き者
となってしまう。

誰だって知っている当たり前の事。

攻撃手段は魔物。

防御手段も魔物。

魔物がいない魔物使いは……………敵と戦う力を持っていない。

この手から逃れる術を、私は持っていない。

「触れ、るな……………！」

睨みつけるのだが、相手は何の反応も見せない。
ただ真っ直ぐ伸ばされた手が、私の肩を掴み

「転移、式、展開。」

そう呟いたのを聞いた瞬間、目の前の景色が歪んで何も見えなくな
った。

「side out」

「side ベレート」

最後の巫女を送った後、地底湖の前で儀式の邪魔者が入らないよう
に佇んでいた。

柊蓮司のプラナが手の中で妖しく輝きを放つ。
その色は、青。

澄んだ青であり、濁った蒼。

矛盾した輝きを放つソレを物質化させる。

柊蓮司の持つ魔剣。

それによく似た剣が俺の手に納まる。

違う点は、剣の刃。

薄い青色の刃。

美しい刃ではあるが、冷たく感じる。

「これが“神殺し”の魔剣の複製、か。」

“神殺し”の魔剣。

元が神であつた魔王を殺す事が出来る魔剣。

俺は神への復讐などは考えていない。

だが、奴（神）が苦しむと言つのであれば――

小さな笑みを浮かべ、剣をしまふ。

その時だつた。世界が赤く変わったのは。

「side out」

歪な世界

「side 影司」

アンゼロット城。

丸いテーブルを囲むように座る四人がいた。

「儀式を乗っ取られるとはな。ふん、以前より甘くなったのではないか？ ルー。」

ベレートは苛ついた様子を隠しもしない。

理由は聞きたくもない。と言うか、アイツと喋りたくない。

「返す言葉もない……………すまん。」

それに対して、ルーは唇を噛み締め俯く。

「そんな話よりネビアを“処理”する話が先よ。アンゼロット、世界結界の魔力を消滅させる手段は無いの？」

ベルがアンゼロットに手段を問う。

「ベール・ゼファー、私が魔王に言うとしても？ 第一、そのような方法があったら、貴方達の手など借りませんよ。」

ベルが舌打ちをし、アンゼロットは鼻で笑う。

……空気が0度にまで下がってる気が……………。

横を見る。

ベレートを睨みつけているくればと、支えられている柊がいた。
俺達は怪我の治療でここにいる。

「……………流々、教えてくれ。何をどうしたら、あの混沌^{カオス}な状況になるんだ？」

柊の青い顔が、より青ざめている。

「あゝ、世界結界の魔力を使う敵を如何にして打破するかっていう
トップ会談らしい……………」

「……………そう聞いているが、この様子じゃ何時になっても終わらないな
くそ、世界はどうなってるんだ……………」

「side out」

「side ネビア」

「……………ああ、圧倒的な量の魔力が体の中で渦巻いているのが分かる。

聖堂のような場所で、私は玉座に座っていた。目の前に糸で四肢を
拘束され、動く事の出来ない流々加奈絵がいる。

その髪を掴み、グイッと持ち上げる。

「冥魔の門として、貴方には働いてもらうから。喜んで死んでね？」

私は睨みつけてくる彼女を放り投げる。

「あ、ぐっ……………！」

倒れようとする加奈絵を無数の糸が無理やり立たせる。

「全部壊す前に少しぐらい楽しもうかな。」

強力なウィザードを自分が操っているのを見て、笑みを浮かべる。

「影司でも良いから、あんな凄い魔術師が欲しかったなあ……………」
人形にして、側に置きたい。」

ベレートという魔王を思い浮かべながら、舌なめずりをする。

「どうにかして手に入らないかな……………」

私の笑い声が静かな聖堂に響き渡った。

「side out」

「side ロンギヌスA」

人々を常識で守る世界結界が消え去った。

「一般人を守る事が最優先だ！」

隊長の声が戦場となった街に響く。

世界結界が消え去った事により、様々な者達が表の世界に溢れ出してきたのだ。

自我の無い侵魔。

力に吞まれ堕ちた魔王とその配下である侵魔。

地球に元から存在する妖怪、妖精の類。

常識に縛られ出て来る事が出来なかった者達の群れが、常識の中で生きていた者達に襲いかかる。

そして、今、我々の目の前に立つ者は、最も厄介だと言っている。

アモルフアスという一般人に寄生する侵魔。

そして、この状況を引き起こした魔王ネビア・ロスアの人形と化した……何の力も持たない筈の一般人。

彼等が攻撃してくる……侵魔の力で、だ。

アモルフアスは寄生している侵魔を引きずり出せば良い。だが、操られている一般人が問題なのだ。

「気絶させて捕縛するんだ！ 直ぐに立ち上がってくるぞ！」

一般人を殺す訳にはいかない。

加減した魔法で気絶させるのだが、彼等は立ち上がってくる。

人形に意識など不要なのだから。

気絶しても立ち上がる厄介な敵。

「捕縛できる隙が無いから、手間取っているんだろうが……………」。

侵魔の群れ、操られた者達が魔法を放ってくる。

食らったロンギヌス隊員が血を垂らす。

瞬時に魔力と化しながら地に染み渡っていく。

その光景が何故か大地が血に、魔力に餓えているように見えた。

――普通、人間の血が魔力にはならない。この世界の異常、常識の崩壊が原因なのか？

疑問だけが残る。

「撃て！」

魔法が侵魔を消し飛ばしていく。

アモルファスは侵魔だけを消滅させる。

その時だ。

燃やし尽くす炎が、刺し貫く水が、切り裂く風が彼等に直撃した。
血飛沫が舞い散る。

彼等の全てが魔力になっていく。

一人の人間が完全に消滅した。

その者の全てを呑み込んだ大地が脈動する。
ヒトの体に血液が通ったかのように。

「な、なんなんだ!？」

「地上部隊、飛べ!!」

皆より早く空に飛び立っている隊長が叫ぶ。

自分も飛行魔法を発動させ、飛ばうとした瞬間。

ガシッ

足を掴まれた。

「止め、――!？」

足を掴んでいるのは、夥しい数の人々の手。

多くのロングノース隊員が逃げ切れなかった。

「離せ!!」

彼等の何も映さない瞳が怖くなった。

風の魔法で腕を切り裂こうと発動を急ぐ。

彼等の一人が口を開く。

「殺ス、ノ？」

「情けをかけてまで死にたくは無いな！！」

「……命令違反なんて悠長な事は言ってられん！ 周りのロンギヌスは殺さない程度に“加減”した魔法で腕を離させようとしているが、あれじゃ間に合う筈が無い。」

魔法を発動させようとした時、上から丸いモノが落ちてきた。

それは……先に飛び逃げた隊長の頭だった。

咄嗟に魔法を発動させ、手から離れる。

空を見た。

白い繭のような塊が糸を此方に向かって伸ばしてくる………と言うより、既に糸は伸びていた。

自分の首……脊椎に速やかに侵入してくる。

「つつ、あ……………」

全てが赤で鮮やかに染まっていく。

目が痛くなるような赤が何も考えるな、と言っているようだった。記憶を弄くり回す何かの音が、する。

「まともな判断できるウィザードが彼一人？ まあ、自律行動する人形は一体でもいっか……………」

今回の霊脈は潤ったんだし、もう呼び出そうかなあ……………」

……結局、人形か……………笑えない冗談だ。

そう思いながら、赤い思考の海に身を沈める。

……あ、そう言えば部隊の奴等^{なかま}はどうなったんだろう。

最後にそれだけが疑問として残った。

まあ、その疑問も赤色に埋め尽くされて消えてしまったのだが。

「side out」

下がる守護者

「side 影司」

二人のロンギヌスが部屋に駆け込んでくる。

「ア、アンゼロット様！ 霊脈に異変が！！」

「アンゼロット様！ 第四ロンギヌス小隊の反応が消失しました！！」

その場にいる全員が“霊脈”と“消失”に反応する。

「霊脈の異変、ねえ。詳しく聞かせて？」

そつベルは聞くのだが、ロンギヌスは戸惑う。

「え、ア………… アンゼロット様？」

魔王に言ってしまったても良いのでしょうか？ そつロンギヌスは言外に尋ねていた。

「いつもの報告と同じで構いませんよ。」

空になったカップに紅茶を注がせ、報告を促す。

「報告いたします！ 全ての霊脈が開通し、膨大な量の魔力に満ちています。ですが、世界結界と繋がっている為、我々が利用できるモノではありません。」

「世界結界と繋がってるなら霊脈を開通したのはネビアで決まりかしら。でも、膨大な魔力を使うなら世界結界だけでも十分な筈……」

その時、アンゼロットがまさか……と呟く。

「何か心当たりでもあるみたいね？」

「え……ええ。」

狼狽するアンゼロットを見た柊の顔が引きつる。

「嫌な予感がする。」

「は、はわ……柊が言ったら駄目だよ。」

くれはの言葉にロンギヌスの二人も頷く。

「柊さんの嫌な予感は的中かもしれません。」

アンゼロットがどこからかりモコンを取り出し、ポチッと押す。

画面に現れたモニターに映し出されるのは、霊脈の図。
見ても俺には何なのか分からない。

「面倒な……。」

何かを理解したベレートが舌打ちをし、アンゼロットを睨み付ける。

「霊脈に封印している者がいるのだろうか？ それも飛び切り厄介な……神の類か。」

「正解です。この世界が創られた時に封印した者だと聞きました。」

『御身は知られぬ』

名さえも知られぬ

地の深遠にて眠る

破壊を囁く神なり』

彼の神が復活したならば……………それは必然だと。しかし、故意に復活など出来る筈は……………」

その手からリモコンが滑り落ちる。

汗で滑り落ちたソレは柊の足下に転がっていく。

その場の全員が柊を……柊の魔剣を見る。

「……………柊さん。」

アンゼロットが真剣な眼差しで……いつもの言葉を言った。

「“はい”か“イエス”で答えて下さいね？」

「待て！ 落ち着け！ 俺は絶対に嫌だぞ！？」

俺は何の話か分かっていないので、くれはに聞いてみる。

「はわ！？ 流々君は知らないんだ……………」
「柊の魔剣に何か特性があるのか？」

柊の魔剣に目を向ける。

魔剣使いが持つ魔剣には様々な力があると聞いた事はある。

「柊の魔剣は“神殺し” って言う代物なんだよ。でも、本物の神なんて倒せるのかな……………」

心配そうに俯く彼女にベレートが言う。

「本物？ あれは神に創られた破壊者に過ぎん。神の性質を持った強大な侵魔だと思え。」

此方が話していると、アンゼロットと柊の大声が聞こえてくる。

「神を倒さないで足止めするだけでも構わないんです！」

「俺一人で足止めが出来るわけ無いだろ！ ただでさえ怪我が完治してねえんだから！」

柊の言う事は分かる。

数日前に腹を負傷して出血多量。

数時間前に手を刺されてプラーナを抜かれた。

普通のウィザードなら多分……………三回は死んでいることだろう。

「一人でなければ良いのだな？ 柊蓮司。」

ルーが笑みを浮かべ、柊に問う。

「一人じゃなければって“神殺し”の魔剣を今の状況で…「いや、

いつか使うだろうといった物が役に立つとはな。」「…どういことだ？」

ルーがテーブルに青い宝石……プラーナを取り出す。

……この感じは………柊のプラーナか。抜かれた事は聞いていたけど、何に使ったんだ？

プラーナを凝視する。

魔力の流れが纏まっており、一つの物として存在しているのが分かる。

「《蒼き剣と化せ》」

そう、ルーが呟いただけでプラーナは剣となる。

「俺の………魔剣!？」

「劣化“神殺し”………いえ、本物に劣らないソレは一本の魔剣です。よく、そんな凶悪な物を作りましたね。」

アンゼロットが剣を持ち上げた瞬間。

「《柊力》」

どこからか声がした。

すると、徐々にアンゼロットから放たれる魔力が弱くなっていく。

「何ですって………! と、止まりなさい!」

叫ぶが止まらない。

暫く経って止まった時、アンゼロットは地に両手と膝をつき、頂垂れる。

「ま、また……下げられた……。」

肩を震わせる。

恐らく怒りで震えているのだろう。

……またって前にもあったのか!?

柊やくれはと同じぐらいの魔力量となったアンゼロット。力量も下がっ……同じぐらいになった彼女は笑顔で立ち上がる。

「柊さぁーん、二度目ですよ？ 私の力を下げたのは……。」
「待て！ 一度目は俺の所為じゃないだろ!? 今回は、アンゼロットが勝手に下がっ……。」

「その柊力ごと封印してやりましょうか!-!」

逃げる柊と剣を振るいながら追うアンゼロット。

それを見ながらルーは笑い、ベレートは頭を押さえ言う。

「く、くく……アンゼロットで試してみて良かったな？ ベレート。」

「アレでは俺や貴様は使えんな。下がるというのは恐ろしいものだ。」

ベルが手を叩く。

「ストップ！ あんた達状況を考えたら？」

――ベール・ゼファーがまともだ。まともな人がいて良かった。

「はあ、はあ………柊さん。止めです、止め。」

「……………つ、疲れた。」

走り疲れた二人がフラフラと戻ってくる。

「その空気になってるロンギヌス！ 報告その2、部隊の消失！」

「は、はい！」

ロンギヌスの一人がリモコンを操作する。

「それでは状況と部隊の消失メンバーについての報告を行います。」

映されるのは街の様子。

白い繭が糸を張り巡らせていて、意思の無い瞳をした人々がいた。

地は割れ、侵魔が溢れる世界がそこにはあった。

「醜い。私の眼を腐らせる汚物のようだ。」

「醜いわね。何を考えているのか分からないし、分かりたくもないわ。」

「醜いな。操られた者と逝った者の行き場の無い想いで充滿している。」

その光景を魔王が醜いと評する。

――醜いとかじゃない有り得ない。こんな光景は……この世界にあつて良いモノじゃない。

吐き気がする。

「はわっ!？」

くればが柊の背に隠れ、目を強く瞑っていた。

「ど、どうしたんだ？」

柊の質問に対して、モニターに映る繭を指して言う。

「ひ、柊………人が………繭の中にいる。」

俺はその言葉を聞いて、繭を凝視する。

目が合った。

――あの眼を知っている。巫女を保護する時に一緒に行動していた聖職者。確か……アルテアという名前だった筈。

「人間、ウィザードを素に繭を作っているのか。外道の類………だとすると拙いな。」

「何が、ですか？」

ベレートは少し悩み、口を開く。

しかし、その言葉は轟音によって掻き消された。

「side out」

戦えない者

「side ベレート」

俺が発した言葉は、轟音によって掻き消された。

「相手はこの空間自体に攻撃を仕掛けてきたようですね……。ロ
ンギヌス総出で空間座標を変えなさい！！」

マイクに向かって叫ぶアンゼロット。

『りよ、了解しました！ 座標位置を変更、第一ポイントから第二
ポイントに空間転移！！』

この城は特別な空間に存在しており、その空間の数はかなり少ない。

……早めに手を打たんと空間を探し出されてしまうな……。

多くのウィザードが治療などを行っている此処を知られてしまった
ら、一気に攻められるだろう。

此処を墜とされたら勝ち目は無い。

「ネビア・ロスアの居場所が分かれば……！！」

アンゼロットが悔しそうにテーブルを叩く。

「手掛かり、か……。関わり合いの無い魔王だから俺は……「柊さ
ん」には期待していません。」……さいですか。」

「はわゝ、私は柊と同じと同じで無いよ。」

そこでアンゼロットが視線を此方に向けてくる。

「言い損ねた事を先に言わせてもらおう。向こうに捕らえられた流々加奈絵は今代の“冥魔の門”。ネビア・ロシアの行動や戦術からして……恐らく利用するだろう。」

……予想でしかないが当たる可能性の高い予想だ。

全員を見渡す。

出来損ないは顔を青ざめていて、アンゼロットは目を見開いている。ルーは知っていたので反応は無いが、ベルは頭を抱えて溜め息をつく。

他の奴等は知らないが故に、周りの反応に驚いていた。

「……地球、諦めよっかな。」

ベルの言葉を聞いたルーは鼻で笑う。

「おや？ ネビアの事を下級魔王と言ったのは貴様だろう？」

「数が違いすぎるじゃない。怪我して役に立たないウィザード達を動員させるつもり？ 居場所が分からないネビアを倒すのも無理だし。」

……正論だな。

正論ではあるが、俺の目的を達成するには流々加奈絵を救い出さなければならぬ。

「居場所を知る方法ならまだある。」

俺の言葉を聞き、全員が目を向けてくる。

「恐らく流々加奈絵と共にいるだろう。なら、流々加奈絵が持っていた物から辿る事が出来る。」

――契約が切れなければ、直ぐに居場所が分かったがな。

恐らくネビアによって断ち切られたのだろう。

「……………分かりました。ロンギヌスの少数精鋭部隊を出します。」

アンゼロットが指を鳴らすと、ロンギヌスがモニターに映し出される。

「流々加奈絵の所持していた物をどうやってでもかき集めなさい！」

『『『了解!!』『』『』』』

プツンと映像が消える。

「これで見つければ良いのですが……………ベール・ゼファー、別に帰っても良いですよ?」

「……………ふんっ、手伝うわよ!!」

途中で帰れば、失った分の損害を穴埋めする事が出来ない。居場所が見つかるかもしれないというのに、最初に言った“諦める”発言を突き通すのは、ただの間抜けだ。

待っている間、横目で流々影司を見る。

その体内に発散されない魔力が溜まっている。あのままだと魔力が溜まり続け、破裂するか壊れるだろう。

出来損ないが壊れようが構わない。だが、あの中には水と風の属性を操る二人が存在している。奴が壊れた時、その二人が苦しむ事になる。

流々影司は自分の状態を理解していない。それに溜まっている魔力が暴走する可能性もある。

あの状態で戦わせるわけにはいかない。

「流々影司。」

「……………何だよ？」

呼び掛けると即座に身構える出来損ない。

「戦いに出るな。」

「それは……………俺が弱いからか？」

出来損ないが睨み付けてくる。

視界の端では柊蓮司が魔剣に手を掛けている。

「弱い事を自覚するのも良いが……………違うな。貴様はまともな人間ではない、俺の魔力で大部分を構成された転生体だ。」

だが、出来損ないである貴様は体内に溜まっている魔力を制御する事ができない。」

相手が喋ろうとする前に言い切る。

「魔力が暴走してしまい味方を討ってしまった……………なんて嫌だろ
う？」

「っ……………!!」

奴が背を向け、去っていく。

――ウィザードにならなければ、普通の人間と同じように生きれたのだが……………。

「まともな生を受けれないのは、俺の転生体だからか……………。」

椅子に深く腰かけ、神に堕とされる人間なんだから仕方がないかと苦笑した。

「side out」

「side 影司」

城のテラスまで走った。

戦わないなんて選択肢を選びたくなかった。

「此処から飛び降りたら……………」

――外に行ける。

味方を討つてしまうかもしれない。

今は戦わないと何も出来ない。

二つの考えがあった。

「阿呆が……………」

後ろから声がする。

振り向くと其処にはルー・サイファーがいた。

姉の親友の体に乗っ取った魔王がいた。

「……………」

睨むのだが気にした様子もなく、近付いてくる。

「そう睨むな。」

「体に乗っ取った奴が何を言ってる……………！」

苛々する。

自分の魔力を制御できない出来損ないと言われたからだろうか。

密かに魔装を即座に使えるようにしておく。

「ああ、この体か。」

――下手な事を言ったら……………。

殺そう、と思った。

「この体は契約で借りたのだが……。いつまでも力が戻っていないと思われると行動し難いのもあってな。」

「……………契約？」

初耳だった。

乗っ取ったのではなく借りたのだ、と。

「嘘は吐かん。この娘の復讐の対象を殺すまでが契約だ。」

「……………殺さなかったら体を返さないでいいって事か？」

「……………わざと殺さないって場合もありそうだな。」

そう聞くとルーは笑う。

「対象と遭遇したら殺すと我自身に誓ったのだ。そのような誓いを破る行為はせん。それでも心配だと言うならば殺す時に着いて来るが良い。」

ルーはうむうむ、と一人で納得して頷いている。

「本当なら良いけど……………復讐の相手は誰さ？」

「……………ネビア・ロスアじゃ。」

ルーの体から魔力が漏れ出て、辺りの壁などが溶け始めている。

「あの小童め、どう料理してやるつか……………。」

「……あれ？ 遭遇したら殺す……………」？

「ルー・サイファー。」

「む、何じゃ？」

俺は凄く気になった事を聞いてみる。

「一回、地底湖でネビアと会ってたよな。その時に殺さなかったよな？」

言ってから思った。

聞いたら駄目な事だった気がする、と。

「あ、あの……………」

「……………」

返事がない。

俺、死んだ気がする。どうせだったら言ってしまえ！！

「会った時に体を返したら計画が、とか考えたりして……………」
「……………」やはり根はベレートと同じなのだな。」

ルーはいじけながら、呟く。

「ど、何処が同じ………なんだ？」

「聞かない方がいい事を聞くところだ。」

………結果的に言うと、聞かなかったら良かったと心の底から後悔した。

「side out」

終焉の存在

「side ネビア」

地の底にある魔力で造られた神殿で私は一人、言葉を紡ぐ。

「私は世界の意味、私は地を統べる意思。」

世界結界の魔力が空を埋め尽くし、霊脈から溢れ出る魔力が地を駆ける。

神殿の中は、その魔力が集まって目が痛くなる程に光り輝いていた。

「全ての摂理が崩れ落ちた時、全て破壊せし古の名も無き神が、永久の国より這い出でる。」

言葉を紡ぐ度に、魔力が何かの姿を象っていく。

「さあ、破壊の神よ！ この病んだ世界に終焉を齎せ！！」

その姿は少女。

拘束衣で手を封じられており、眼にも拘束具がつけられている。

「地上に存在するウィザードが貴方の救済を求めてるよ。」

私は、この神を調べた。

人々からは世界を破壊する神と呼ばれているが、正しくは破壊により世界を人の手から救済する神だった。

大きな戦争の影で密やかに動き、世界を壊しかける者を排除してきた。

「……私の全てを破壊したい、という願いを叶えるには最高の存在。今は私が世界と繋がってるんだから、私の事を第一に動く筈……………」。

少女はゆつくりと私の方へ歩き寄ってきて、口を開いた。

「……………人が、私の救済を求めているのか。」

「そう、貴方の救済が……………皆には必要。」

「……………そう、貴方の破壊の力が私には必要。」

その少女は頷き、神殿から消える。

「ちゃんと全部、破壊してよね。私は誰も居ない……………まっさらな世界が欲しいんだから。」

繭を作ったのも、全ての一般人を操ったのも……………そのため。

ウィザードを全員殺し、魔王を排除し、今ある全てを消滅させる。

「まっさらに綺麗な世界を……………私が作り出す。こんな病んだ世界、無くなってしまえばいい。」

「……………痛みしかない世界の終焉を、私が……………」。

唇を噛み締め、魔力の海に体を浸す……………今の世界を呪う為に。

「side out」

「side アンゼロット」

影司とルーが部屋を出て行ってから少し経った。

「……………魔力の暴走でしたか。ベレート、貴方は防ぐ方法を知っているのでしょうか？」

そう聞くと、ベレートは口元を歪めて笑う。

「魔力が溜まる原因は奴の中にいる二人の存在。その二人が居なくなれば暴走は起こらん。だが、一度で魔力を全て消費しなければならぬ。」

一度で全て消費するのは不可能に近い。ベレートは出来ないと思い、言わなかったのだろう。

「そう……………ですか。」

溜め息をついた時、空間が揺らぎ始める。
景色が別の景色によって塗り潰されてゆく。

……………この景色は輝明学園！？ もう探し出されたという事！？

「くっ……………！ 空間から追い出される！？ 全員、戦闘の用意を！」

声が、聞こえる。

「《命ずる》、城、地に落ちよ。」

咄嗟に複製の剣を掴み、目の前を斬った。
声が目の前から聞こえたように感じたからだ。

――斬った感触はあった、…………誰かいる。

もう一撃、加えようと振るおうとした瞬間。

「ちつ…………、《ヤタノカガミ》！」

ベレートが私の前に割り込み、剣を持つ手を掴みながら防御魔装の《ヤタノカガミ》を使う。

同時に無数の光が襲い掛かってくる。だが、《ヤタノカガミ》は対魔法の防御魔装である。

全ての光は反射し、光同士で衝突させる事で消滅させる。

「敵が侵入していたか。アンゼロット、柊蓮司は神を相手にし……」

周りの景色が完全に変わる。至る所に存在する繭が狙いを定めてくる。

「アンゼロット、神である我に従え。」

背後から声が聞こえる。振り向きながら、剣を振るうのだが足で防がれてしまう。

眼に拘束具をつけ、拘束衣を纏う少女が…………そこにはいた。

「もう一度、言う。我に従え、アンゼロット。」

「丁寧に断らせて貰います。私は神に従う者ではなく、世界と人々

を護る者ですのぞ！」

私は神と名乗る少女を思い切り、蹴り飛ばした。

・・・これで良い筈。

そう自分に言い聞かせ、剣を強く握り締めた。

「side out」

地獄の黙示録

「side ベレート」

「柊蓮司、呆けるな！ 本当に相手が神なら、アンゼロット一人で対処できん！！」

複数の魔法を展開し、援護と攻撃を同時に行う。

攻撃魔法は敵が発した言葉に打ち消されてしまいが問題ない。気を引く為だけのモノだからだ。

「わ、分かった！！」

柊は飛び出し、斬りかかるのだがギリギリで躲される。

その時の敵の表情は怒りにより、歪んだモノとなっていた。

「神殺しなどと生意気な物を！！」

そう叫び、魔法を放つ。

その魔法は人間が扱えるモノより強大で、魔王が扱うモノより矮小。

――魔力を抑えた？ 油断は禁物、か。

「《命ずる》、魔、全てを焼き払う光と化せ。」

その言葉を受けた魔法は通常では有り得ない光を放ち、向かってくる。

全てを焼き払う、そう言ったのだから恐らく範囲攻撃。

赤羽くれはが防御魔法を準備するが、一人で防ぎきるのは無理だろう。

その時だ。

「世界魔術協会が作り上げた広域防御です!!」

少女の声が聞こえた。

「「第一防御壁、多重展開!」」

「「第二魔法防御壁、多重展開!」」

「「第三物理防御壁、多重展開!」」

「広域防御魔法、《ステイグマ》!!」

その言葉で展開されていた魔法で作られていた防御壁が纏め上げられる。

その姿、形は聖痕と呼ぶに相応しいもの。宙に刻み込まれた文字が巨大な一つの形を成しているからだ。

「これを……作ったのか。」

魔法としては傑作の域。しかし、強力過ぎる防御魔法だから魔力の消費も激しいだろう。

「人間には連続して展開できないな。」

そう呟きながら、その術式を読み取っていく。

光は向かってくる途中で弾け飛ぶ。いや、拡散と言うべきか。

飛び散った光が防御魔法の壁にぶつかる。

神が作った全てを焼き払う光は……人間が作った魔法に負けた。

光が消え失せ、防御魔法は徐々に消えていく。

アンゼロットと柊は、そのタイミングを見計らい攻撃を仕掛けた。

後方ではベルが繭から放たれる糸を払っていた。

「しっこい！」

そう言いながら、魔装を連発している。

……早くネビアを倒さなければ……。

俺はそう考えながら、再び援護の為に魔法を展開した。

「side out」

「side 影司」

「鬱陶しい!!」

繭から放たれる糸を魔装で弾き飛ばす。

ルーは魔装と刀を使い分けて先行する。

城の下の方から複数の声が聞こえた為、向かっていた。
偶に壁をぶち抜いているが気にしない。

着いた場所には数人のロンギヌス。

――手掛かりを探しに行つたのと、あと一人は誰だ？

「……………はあ、命令とか面倒なんだが仕方がないか。」

その一人もロンギヌスではあるが、他と比べると違和感が生じる。

「消失した部隊に所属していた者が何故、此処にいる？」「何故つて聞かれても返事する必要、ある？」

俺は咄嗟に威力を無くした魔槍を放ち、話し掛けたロンギヌスを弾き飛ばす。

直後、そいつが立っていた場所には大きな穴が空いた。

「何だ、まだいたのか。やけに数が多いな？」

「丁度良い！　これをアンゼロット様に！」

袋を投げ渡されたので、受け取る。

「手掛かりとなる筈の物品です！　早く！」

その言葉を聞いたと同時にルーが俺の前に立つ。

「……………っ！！」

魔法を放ったロンギヌスの背後に浮かぶ影。

「同調者か……。後ろに浮かんでいるのはメディウムだな。アレも攻撃を仕掛けてくる筈、気を付けろ。」

ルーの言葉に反応し、その影は蠢く。

「《アボカリプス・ナウ地獄の黙示録》、痛みと恨みを糧に。

さて、コツチも命令なんだ。大人しく死んでくれたら嬉しいんだが？」

影を手に纏わせ、魔法を展開していく同調者。

「アンゼロット様に楯突くという事か？」

ロンギヌス達が構えるのだが、同調者は彼等を見ずに俺を見る。正確に言えば、俺の手にある袋を見ている。

「その袋の中身を渡すわけにはいかないな。」

首を左右に傾け、身体の調子を確かめている様子のソイツは笑う。

「流々影司、先に行け。我はこの小僧を何とかしてから行く。」

「駄目だ。」

「……………は！？」

……嫌な予感がする。此処で行ってはいけない気がする。

「俺も……………戦う。こんな時に戦わない役立たずには成りたくない。」

援護をする、攻撃魔法とかは撃たないから……………」

ルーは溜め息をつき、小さく頷いてから構える。
ロンギヌスの構成は前に出て武器を構える者が二人、後ろで魔装を放つ準備をしている三人。

「考え直せ、まだ間に合うはずだ!!」

そう言ったロンギヌス達に無数の糸が走る。
糸が足を穿ち、手を床に縫い付けていく。

「黙ってる。もうお前等に用は無いんだ。」

魔法を展開する彼は、俺に向かって手を向ける。

「……………やらせない。」

誰かの声が聞こえた。それと同時に向けられた手が撃たれる。
そして、上から飛び降りてくる者がいた。

「緋室灯か。向こうの手助けをせんのか？ 柊蓮司と赤羽くれはも
いる向こうの方が……………」

「向こうはマユリ……友達、に任せた。」

ガンナースブルーム
武器である箒を構え、彼女は微かに笑む。
それから直ぐに無表情になり、二発連続で撃つ。
二発とも相手の胸に命中し、怪我を負わせる。

……だが、相手は笑みを浮かべていた。
怪我を負いながらも笑みを浮かべる。それは人間としては異常だった。

「あ、ああ……………！！」

影がより巨大に強大に広がり、彼自身を呑み込んでいく。

「《地獄の黙示録》！アボカリプス・ナウ 痛みでより強く、恨みでより強く……………！！」

叫ぶ姿は異常。

狂気……………狂っているのか、狂喜……………狂ったように喜んでいるだけなのか分からない。

俺にとっては狂気にしか見えなかった。

「side out」

同調者

「side 影司」

《ソードオブスルト》

黒い影を纏った敵が扱う魔装の名前。
高位魔装で巨大な炎の剣を生み出し、斬撃と超高熱によって対象を
分解消滅する凶悪な代物。

「《世界記憶？・満月の魔力》」

そう敵が呟き、降り注ぐ月光を身に受ける。
すると、その体内の魔力が活性化していく。

それは信じられない事だった。
何故なら、その力は“吸血鬼”のモノだからだ。

俺は下がりつつ、前に出ようとするルーと緋室灯の二人を見る。

「同調者と戦うのは初めて。この敵は魔法型だと思うけど……………」

そんな事を言い、灯は相手の出方を窺っている。

「様々な力を使うと聞いた事はあるが……………最近現れ始めたウィザ
ードだから情報が足りんな。」

ルーは刀に魔力を流し、黄金の光を纏わせる。
妖刀であるソレは天属性の魔力を吸収する事で、本来の切れ味より
も鋭くなる。

――ルー・サイファーが使うには最高の武器だよな……。

「終わらせる!!」

炎の剣を切り払い、続けて突きを入れるのだが……敵は簡単に避けてしまう。

信じられない事だ。

一介のウィザード、ロンギヌスでしかない相手が……“金色の魔王”と恐れられる強者の攻撃を簡単に躲けるのは可笑しい事だ。

咄嗟に俺が防御魔法をかける。それと同時に風の魔法……《カラミティサイクロン》が放たれる。

成層圏まで届く大竜巻を発生させる高位魔法。
全てをズスタに粉碎させる、凶悪な魔法。

「くっ……!!」

防御魔法を粉碎させて、ルーの身体に怪我を負わせる。

灯は魔法を見切り、通常の間人では不可能な動きで躲していく。

俺は離れていた為、直撃は受けなかったのだが余波だけで怪我を負う。

――強すぎる。

範囲治療魔法を使い、怪我を癒やしていくが……ダメージが大きい。

「殺してやる。」

そんな声が相手の口から漏れ出る。

「ウィザードなんて……………死んでしまえ！！！」

《古代魔法》を混ぜた呪文が唱えられる。

その呪文は転生者だけが知る、太古に失われたはずの術式。

俺がそうだと分かるのはベレートの記憶で理解できただけである。

「厄介だな、同調者って奴は！！！」

《魔導書》を開き、何重にも防御魔法を重ねる。

魔法が発動する直前に灯の魔力爆裂弾が命中し、ダメージを与えるのだが……………それに伴い、黒い影は膨れ上がっていく。

傷を負いながら、歪んだ笑みを浮かべる相手を見ると背筋がぞつと
する。

「予想以上に強いな。いや、柊蓮司と同等か……………それ以上だな。」
「……………魔法なら見切れるから、私が前に出る。ルー・サイファー
と流々影司は援護を。」

灯が《ガンフー》の構えを取る。

それは接近戦で格闘を交えながら、銃撃を行う強化人間が得意な構え。

「撃ち抜く。」

一気に駆け寄り、足払いを仕掛けながら撃つ。

足は黒い影に絡め取られて、弾丸は銃口を逸らされ外してしまう。相手の攻撃は《トリックレイド》と言う異能者の力を使ったモノ。短距離レポートを駆使し、一撃だけ加えて離脱する戦法をとる。

絶え間なく続く銃撃の音と相手が術式を構成する声が聞こえる。

ルーが手を突き出す。

「少し足止めを頼む。」

目を瞑り、複雑な術式を構成させていく。
太古の記憶と知識の全てを使った術式である。

「邪魔するな、魔王！」

さっきまで構成していた術式を放棄し、新たな術式を………いや、ルーと全く同じ術式を展開していく。

「させない。」

そう言つて、灯が至近距離で弾丸を放つ。

掠り傷を負わせる事が出来るのだが、術式の構成する速度は変わらない。

「食らうがいい！ 《ワールドゲイト砲》！！」

「失せる！ 《ワールドゲイト砲》！！」

異世界への門が一瞬だけ開き、全てを飲み込む力が相手に作用する。同時に発動したソレは拮抗し、周りのモノを飲み込もうとする。

「解き放て!!」

ルーが妖刀を掲げる。

次の瞬間、激しい光を放ち、相手に向かって極太の光線が放つ。灯が飛び、空中で射撃しながら相手から離れる。

弾丸は相手をその場に縫い付けるように、的確に撃たれていた。

――あれ？

光線が当たった直後、同調者が何か呟いた。

「《時戻し》」

ビデオの巻き戻しのように当たる直前にまで時間が戻る。

そして、奴は……………。

「マスターオブワールド
《世界支配者》」

そう言った次の瞬間。

俺の腹を、奴の手が貫いていた。

「side out」

彼の世界は絶望と憎悪で満ちていた

「side 影司」

最初は走馬灯を見ているのだと思ったが………違った。

流々加奈絵という姉がいない、それ以前に親の顔が違っていた。誰かの視線で、誰かの記憶を俺は見ていた。

記憶は大事なモノだけが再生されていく。

妹が生まれた時。

「お兄ちゃんになったわね。」

母にそう言われて、記憶の主が嬉しそうに頷く。

「お母さんとお父さんは魔法使いなの。」

そう言っていた両親はウィザードに殺された。

妹と孤児院に連れられ、今までとは全く違う生活を送る事になった。

普通では考えられない孤児の数。

周りから聞こえてくる大人達の会話を盗み聞きして、両親や自分達の身に何が起こったのか理解した。

両親は侵魔に与するウィザードだったらしく、戦いの中で殺された。

此処にいる孤児は、同じような子だった。

その後、アンゼロットが孤児を引き取りに来たのだが……。

「今、連れて行けるのは半数の子だけです。後の子は……。」

そう院長と話しているのを聞いてしまった。

自分達は連れて行ける半数の子の中に入る事は出来なかった。

その子は憎いと思った。

アンゼロットが……全てが憎い、と。

そして、孤児院から妹を連れて逃げ出した。

少しずつ少しずつ……痩せ細りながら、両親の知り合いを訪ねた。

最後に会った人が自分達を引き取ってくれた。

知らない間に脳内に存在する知識が、自分を押し潰そうとする。

その人は言った。

「同調者と呼ばれるウィザードは……世界結界というモノと繋が
り、其処から様々な事柄を知る事が出来る。」

嫌な事も知りたくない事も含めて、と。

全て……序章に過ぎない。

その子が望むのは妹と日常の中で生きる事だけ。
その程度の望みも叶わない程に……人の悪意、世界の歪みを知ってしまった。

ウィザードと共同で戦う事になった時。

彼等が放った魔法は多くの侵魔を薙ぎ倒す……筈だった。
放たれた魔法の一つだけが此方に向かってきた。

妹の上半身が……目の前で吹き飛んだ。

訳が分からなかった。夢だと思ったかった。

その時に同調者の証とも言えるメデイウムが姿を変えた。

黒い影、憎悪で出来た……自分の分身。

その憎悪の矛先は魔法を放ったウィザードに向いた。

……死んでしまえ、殺してやる、その肉片……一つも残らないよう。

「抹消してやる。」

……全てを殺して、全てを壊して……全てに復讐してやる。

そうして、ロンギヌスに入り……………情報を魔王に流すようになった。
自分の復讐の為に、その為だけに。
仲間のフリをして、密かに殺して。
いつか報われる、と信じて……………。

そして、とある魔王が世界結界を乗っ取ったと聞いた時は狂喜した。

自分達が出撃して、精神が乗っ取られそうになった時の疑問。

部隊の奴等^{なかま}はどうなったのか。

それは心配だったから。

ちゃんと……………全員、死んだのか、が。

人形になるなら……… 全てを壊す人形にして欲しい、と赤色に埋め
尽くされる前に呟いた。

それを承諾する声が微かに聞こえたような気がした。

それが……… この誰かの記憶の全てだった。

全てを見終えた時、俺は暗い闇の中にいた。
クスクスという笑い声が聞こえてくる。

「この世界に幸福なんて……… 存在しないんだから、抗っても意味
なんてないのに。」

その聞き覚えのある声は………。

「ネビア・ロスア！」

彼女だと確信し、叫ぶ。

「虚無で出来た世界なら……… 絶望や憎悪、それで苦しむ事も無い。

」

狂った笑い声を上げ、姿を現し……… 両腕を大きく広げて言う。

「その方が……………幸福と言えるでしょう?」

俺の意識を呑み込もうと目に見える闇が迫ってくる。

その闇を切り捨てる光が俺の後方より放たれる。

「待たせたな。」

ルー・サイファーが……………西宮 計の姿ではなく、元の魔王の姿で存在していた。

「駆け付けたナイトメアの《夢語り》が間に合ったか……………。」
「うむ、少年。無事だったか?」

ナイトメアがゆっくりと現れる。

……………《夢語り》?

確か、夢の中に入る夢使いの力だとは知っているが……………。

「気を失ったと同時に他者の夢の中に引き込む、か。夢使いとして
は一流の技だな。」

ナイトメアは手をグルグルと回しながら言う。

「脱出するぞ。」

闇がその言葉に反応し、襲い掛かってくるがルーが切り払う。

ネビアは笑いながら、俺に向かって叫ぶ。

「元の世界が………充実していたと思うなら何も知らないだけ！
皆が幸福だと思うなら！ それは目を背けてるだけ！」

その叫びが苦しそうに聞こえたのは、気のせいではないと思う。

「side out」

赤く、紅く、朱く

「side 影司」

目を開け、周りを見る。

雨宮 計の姿でルー・サイファーが立っているので、夢から帰ってきたのだと確信する。

その横にはナイトメアがあり、離れた場所で倒れたロンギヌスに手当てする灯が見える。

「これでは……………」

「夢使いである俺でも気配を辿るのは無理だと言えるな。」

ルーとナイトメアは袋の中身を見て、落胆していた。

微かに見えたのは、ぬいぐるみ。

クマのぬいぐるみ。

……姉貴にあげた……………ぬいぐるみ。

それは血で真っ赤に染まっていた。

ルーは俺に視線を向け、スツとしゃがみ込む。

「起きたか……………。魔術師のお前に問う。このぬいぐるみは流々加奈絵の所持品だが、同調者の血で濡れてしまった。そんな物で……………居場所を辿る事は出来るか？」

答えの分かりきった質問だった。

物体に籠められた念で辿る事が可能なのだが、このぬいぐるみは少し前に姉貴の手に渡った物。

籠められた念は薄く、無いにも等しいモノだっただろう。

だが、そんなモノでも調べれば辿る事は出来た筈だった。

血で濡れさえしなければ……辿れた。

血などという不必要な情報の塊、その人間の全ての念が籠もったモノで濡れてしまつては……薄い念は塗り潰されて無くなったのは確実だ。

……でも、これは。

「血で濡れなかったとしても……無理だよ。こんなに所持していた期間が短い物じゃ……。」

そう言いながら、俺は顔を横へ向けた。

そこには血塗れの同調者の姿があった。

「奪い取るのが不可能だと考えたんだろうな。まさか、時間を巻き戻した後に……時間を止めるとは思わなかった。流々影司には重傷を負わせてしまうし、情報の抹消まで行わせてしまった。」

自分のミスだ、とルーは唇を噛み締める。

俺は貫かれた腹を確認するように撫でる。

包帯が巻かれており、少し血が滲んでいた。

「side out」

「side ネビア」

瞑っていた目を開け、クスクス笑う。

「堕ちてくれないかな……………影司。」

足元に浮かぶ人々の手を蹴り払い、浮かび上がってくる頭を踏み潰す。

「あ、ああ……………気持ち良いなあ。」

飛び散った血が顔につくが気にしない。

「世界に……………幸せなんて無いんだから。」

――影司だって利用されて朽ち果てる存在。私みたいに……………私みたいに壊れる存在。

造られた存在が幸せを得る事は出来ない。

造った者はその幸せなど必要としないからだ。

私も……………ネビア・ロスアも造られた存在と言っても過言ではない。

「私だけが……………不幸せだなんて許せないよ。影司にだって現実つてのを見せてあげる。」

不可思議な形をした黒い鍵を取り出す。

瘴気を纏っており、辺りを汚染していく鍵。

「真っ白な虚無の世界と真っ黒な混沌とした世界のどっちが好みかな？」

ペロリと顔についた血を舐めとる。

甘く……鉄臭い味が口の中に溶けていく。

「目の前で絶望を見せてあげるから早く来て。」

指の先に繋がったままの糸を眺め、待ち遠しく感じる。

「此処に来る為の情報はあるんだから。」

血で赤く、紅く、朱く染まっていく糸を眺めながら愉しそうに笑う。

「たの、しみ……。」

私の呟きは踏み潰された者達の苦悶の叫びで掻き消されていった。

「side out」

唯一の勝機

「side ベレート」

柊蓮司とアンゼロットが前で戦っている間、俺は援護をしながら地脈を探していた。

「……………何処だ。」

あの名も無き神は魔力の通っていない地脈に封じられていた。

……あの神が使う魔力は、恐らく人間を溶かして作った魔力の筈。

人間を溶かして作った魔力というのは澱みやすく腐りやすい。だが、直ぐに使うなら質は上等。

その為、あの神が放つ弱い魔法や魔装が凶悪極まりないモノとなってしまう。

「……………っ!？」

襲い掛かってくる糸を焼き払い巨大な繭を見る。

「面倒な……………」

その繭は他のモノよりも巨大で強大な……………腐った魔力で出来ていた。

地脈の中で腐った魔力を利用して作られた繭。

その下から感じる上質の魔力の流れが地脈なのだろう。

「当たり前ではあるが……消滅させるのは時間がかかるな。」

一歩前に出る。

それと同時に辺りから侵魔や人の群れが現れ、繭が蠢く。

「……やはり重要な地脈には守護を置くか。」

繭から這い出てくるのは地球で生まれ落ちる存在であるモノ達。
フェニックスや風神、九尾の狐などの有名な存在も見え、俺の口から苦笑が漏れ出てしまう。

通常的能力しか持たないのであれば、一撃で消し飛ばす事も出来る。
しかし、目の前にいる存在は通常のモノよりも遥かに強大な魔力を放つ。

「……ま、勝つ以外の選択肢を選ぶ気は無いんでな。久方振りに皆に戦ってもらうか。」

笑みを浮かべ……瞬時に無表情となる。

「解き放たれよ。」

その言葉と同時に……俺の中にいた者達が出て行く。

魔王になって得た魔力が体の中を駆け巡る。

溢れ出そうになる魔力を制御し、周りに現れるマリー達に言う。

「殲滅だ、跡形もなく殺し尽くすぞ。」

俺が手を上げると、全員が魔法を展開していく。

「浄化の光よ。」

その言葉と同時に光が辺りを包み込む。
人々を操る糸を消滅させていく天を司る者。

「浄火の炎だよ！」

火柱が立たせ、侵魔を燃やし灰にしていく火を司る者。

「派手に臍物でもぶちまけなさい、穢らわしいモノ達。」

岩で作られた剣で殺し尽くしていく。
剣の切先が回転し、辺りに血が飛び散るが全く気にしない地を司る者。

「主様に触れないで。」

水の長刀で俺に近づく糸を切り払う水を司る者。

「しっかりと……切り裂かれて下さいね。」

風を起こし、繭を切り裂いていく風を司る者。

そうやって的確に敵を攻撃し、数を減らしていく中で俺は繭に……
…地脈に近づく。

そして、柊蓮司のプラナを取り出す。

「余分に用意しておいて良かったよ。」

地脈にそのプラーナを……ぶち込む。

「頼りにしてるぞ、“柊力”。」

溢れ出る膨大な魔力を地脈に流し込み、一部を正常にして乗っ取る。

――これが神に流れる魔力の大部分。

周りの腐った魔力を感じ取って、眉を顰めながらも地脈の全体図を調べていく。

そして、全てを調べ上げてから“柊力”を発動させようとするのだが。

「…………無理、か。」

“柊力”を発動するにはプラーナが小さすぎた。

俺の言葉を聞いて、風を司る者がこの場から離れていく。

――失敗したな。

そう自重しながら溜め息をついた。

「side out」

「side アンゼロット」

斬り合っていると相手の動きが鈍くなっていくのに気が付いた。

……？ 何か狙っている訳ではない様ですね。

相手が困惑している様子を見て、そう考えながら後ろに下がる。緑髪の………霊のような者が近寄ってくるのに気付いたからだ。

「ベレート様の所へ来てください！」

そう言つて、私の手を引く。

「………現状を打破する為ですか？」

私の言葉に頷くので、柊さんに一言だけ言つて行く事にした。

「柊さん、死なない程度に頑張つて下さい。」

「な、待つ………」

柊さんが何か言っているが無視して、急いでベレートの所へと向かう。

そして、ベレートのいる場所の光景を見て………絶句する。

死屍累々。

倒れた人々は白い光に包まれて、怪我一つ無い状態。

侵魔を消滅させていく数人の姿。

そして………巨大な繭があり、その下でベレートが何かしている。

一気にベレートに近付いて、声をかける。

「来ましたよ。」

私の方を向かずに青いプラナを持った状態で、ベレートは地を指さす。

「此処にその剣を刺してくれ。」

その場所をよく見ると、地脈が直ぐ下に通っているのが分かる。

「くっ……………」

私はこの剣が無ければ戦えない。

世界の守護者は余りにも強大な力を持っているので手を出せない。これで実力が“下がる”事で枷が外れて、私は戦える。

「何をするのか聞かせて下さい。」

「……………地脈に流れる魔力の質を“下げる”つもりだ。その後、この地脈の魔力を集めている部分を潰していく。魔力源が小さくなれば……………神だろうと弱くなる筈だ。」

それを聞いて、私は複製の剣を見る。

――私が戦うよりも、相手が弱体化する方が勝ち目がありますね。

そして、思い切り……………地脈に突き刺した。

「side out」

今、出来る事を

「side 柊」

俺の振るう魔剣は全て避けられ、弾かれていた。

「はぁはぁ……………」

疲れから息が荒くなり始め、足がふらつく。

敵の攻撃を躲し損ねた為に出来た掠り傷も、ふらつく原因の一つ。

「《ヒール》！」

後方から治癒魔法が飛ぶのだが、疲れが取れるわけではない。

「死ぬがいい！！」

そう言つて、振るわれる今までの中で最も重い一撃を魔剣で防ぐ。
いや、速すぎて避ける事が出来なかった。

歯を食いしばり、持ちうるだけの魔力を魔剣に注ぎ込む。

援護魔法が自分にかかるのが分かるが、雀の涙と言つてもいい程度にしか強化されない。

「喰らえ！ 《ヴォーティカルカノン》！！」

ベルの声がし、闇の矢が敵に向かって放たれる。

「《命ずる》、光、闇を全て遮れ！！」

その言葉で防がれると思い、舌打ちを……………しかけたその瞬間。

闇の矢が、直撃した。

敵は驚愕した表情をし、理解できないと頭を横に振る。

その隙に出来るだけ魔力を魔剣に込め、押し切ろうとすると……………。

「……………な、何をした？ 我に何をした！？」

簡単に押し切られた敵は狼狽し、俺に魔法を放つ為に何度も魔法の名前を口にするのだが、発動する気配はない。

敵の体から魔力が少しずつ抜けていく。

「消え、る……………」

俺の手を必死に掴む、神と名乗る者。

いや、掴もうと触れようとしているのに……………掴めないでいる様で。

「我はただ、必要とされたかった……………」

膝から崩れ落ちる姿は……………何処にでもいる少女の様で。

「何故、誰も必要としてくれない……………」

瞳から零れ落ちる雫は……………地に着く前に魔力となり消えていく。

「お、おい……………」

俺が手を掴もうとするがすり抜けてしまう。

何度も何度も掴もうとするが……………触れる事は出来ない。

「神の道具に過ぎない我が……………皆を救済してやりたかったというのは傲慢だったか……………」

涙を零し続ける瞳を隠す様に、頭に手を当てながら遠い空を見上げる。

紅い月の昇る空に、救済が齎す平穏など無い。

何故なら、紅い月は侵略者達が現れた時に昇るモノだからだ。

侵略が齎すモノのは、平穏からは程遠い。

空に手を掲げ……………指先から薄れて消える。

そして、最後には何も残らなかった。

「side out」

「side アンゼロット」

ベレートに地脈は任せ、私はロンギヌスやウィザードを集めていた。

「あの神と名乗る者を倒す為に、魔力の質が堕ちた地脈の流れを止めていきます！ 単独行動をせずに、速やかにお願います！」

私の言葉を聞き、皆が動き出す。

「……あちらは柊さんに任せたままですが…… ベール・ゼファーもいますし、大丈夫でしょう。今の私が行っても戦力になりませんし……」。

唇を噛み、俯く。

「今、私は……役に立たない。」

手を出す事が出来ない状態の自分が情けない。
魔法を使えない、攻撃が出来ない、力を振るえない自分が……悲しい。

そう思いながら、辺りを見回す。

ロンギヌスもウィザードも、自らが持ちうる全てを出して……自分達に出来る事をしている。

地脈の流れを止めに飛び回る者。

次々に現れる侵魔を撃退していく者。

そして、怪我人の手当てをにかけている者。

大怪我などには治癒魔法を使っているが、掠り傷程度のモノは道具を使った手当てをしている。

「……何も、出来ないわけではありませんね。」

この手がある。

魔法が無くても、手当てをするには十分だ。

「私も、今の自分に出来る事をしましょう。」

私は医療部隊の方へ急ぎ足で向かった。

「side out」

病んだ精神（こころ）

「side ナイトメア」

血に塗れ、倒れ伏した同調者の体を調べる。

「……………」

その体はボロボロ。

筋肉は何ヶ所も断裂しており、闇を纏っていた四肢は酷く爛れている。

「身に余る力を振るった結果、か……………」

強すぎる力は、振るう為に代償が必要となる。
時間を止めた代償は……………大きかった。

「体が、力について行けなかったという事か。」

「……………何か、手掛かりは見つかったか？」

ルー・サイファーが同調者を見下ろしながら、話し掛けてくる。

「身体面に手掛かりは無いな。まだ調べていないのは精神面ぐらいだ。」

そう言いながら、俺は同調者の頭に触れようと……………違和感に気付く。

「これは……………!？」

同調者の周りを蛇のように動く赤い糸。

俺は糸の魔力の流れを読み取り、目を見開く。

世界結界の魔力を含まない、純粋なネビア・ロシアの魔力。

「……この糸は魔王ネビア・ロシアと繋がっているらしい。……これなら辿れるはず。」

掴む為に手を伸ばし……ルー・サイファーによって止められる。

「……まあ、待て。この糸ならば辿るのは容易だ。まだ繋がっているのだから。だが、誘われているのも明らかだ。」

手を下げ、頷く。

ネビア・ロシアと繋がったままの糸がある事が可笑しい。辿られたくないなら、さっさと糸を切るべきなのだから。

「早く来い、とでも言いたいのであろう。」

しかし、とルー・サイファーは離れた場所で治癒魔法を自分に使っている流々影司を見る。

「今、行っても犬死にするだけだ。圧倒的に戦力が足りんからな。」

自分は少しばかり焦っていた。理由は分かっている。

「……落ち着け、妻と子の安否は確認した。今は魔王を如何に倒すかだけを考えていればいい。」

此処に来る前に会った妻と子の姿を思い出し、立ち上がる。

「ふっ……………、焦るなど俺らしくないな。」

いつまでも昇り続ける紅い月を睨み付け、俺は身を翻した。

「side out」

「side 巫女」

私は巫女の生まれ変わりの一人。

そうなってしまったのが……………運の尽き。

何人も、私と同じような人達がいた。

ネビア・ロシアという魔王に閉じ込められた部屋の中で、天井を見つめ続けていた。

「……………死にたい。」

誰かがポツリと呟く。

そして、直ぐに殴りつける音と言い争う声が聞こえ始める。

「仕方ないだろ！？ こんな部屋に監禁されて！ 魔王だかウィザードだか巫女だか知らないけどさ！ いい迷惑だ！！」

ウィザードでも何でも無い一般人だった者が急に拉致され、巫女として覚醒させられて監禁。

監禁した者は魔王を名乗る異常者。

共に監禁されている者は魔法使い（ウィザード）を名乗る異常者達。

その状況で精神が竄れない筈がない。

「帰らせてくれ！ 俺が何をしたって言うんだ！ もう嫌だ………
！ いっそ殺してくれよ！」

「落ち着け！ 私達の仲間が助けに来る！」

落ち着けと言われて、落ち着ける訳がない。

「うつさいんだよ！ 黙ってる！」

完全に密閉された部屋の中、私達のようなウィザードは月衣の力で呼吸はなんとかなる。

しかし、叫び続けている者は呼吸が荒い。

酸素が足りなくなってきたのも、理由の一つだろう。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ。」

酸素を吸おうと何度も何度も吸い続けている。
周りが騒ぎ出すが、私は天井を見つめ続ける。

「……………来る。」

私は近付いてくる気配を感じ、何故かは分からないが懐かしさを覚える。

- - - “彼女” 来る。

記憶の片隅で誰かが私に言ってくる。

「誰よ…… “彼女” っていうのは。」

- - - 私の守護。

そんな言葉が脳内に響き渡ると同時に、部屋の一部が崩れ落ちた。

「此処が最後。」

現れたのは血塗れ女。

手に持った何かから鮮血が滴り落ちる。

その“何か”は…… 医療ドラマなどでしか見た事の無い物。

「これは…… 最後に残しておきたかったけど、食べよう。」

そう言つて、彼女は手に持った心臓に……………林檎を食べるかのよう
に……………食らいついた。

「あは、あははっ……………巫女様を感じますよ。」

歡喜に震えながら、彼女は狂ったように笑う。

彼女の体内に、私と全く同じ魔力が満ちていく。

巫女の持つ特殊な魔力。

肉を食らう度に、血を舐めとる度に満ちていく。

彼女の体内に満ちている巫女の魔力は、巫女数十人分の魔力量だ。

指先の血まで舐め取り、彼女はクスリと笑む。

「こうやって一緒になったら……………私が護れる。本物の勇者も偽物
の勇者も関係ない。」

「みんな、私が護つてあげますから！」

ケラケラ笑う彼女は、壊れた人形のようにだった。

「side out」

同じ決意

「side 影司」

腹部に負った傷の治療を終え、一息つく。

- - 弱いなあ、俺。

そんな事を思い、唇を噛み締めた。

魔力が暴走するかもしれない、味方を討ってしまうかもしれない。

攻撃が出来ないなら、援護すれば………と思っていた。

しかし、それは甘い考えだと分かった。

敵の攻撃は強い、自分の弱い援護魔法では全く防げない。

「この有り余った魔力が使えれば………！」

涙が零れる。

弱い自分が憎い。

ウィザードになって、一年も経たない者が今の世界で生きている。

そんな彼が弱い筈がないと思うが、それは違う。

彼は弱い、弱すぎる。

今まで戦って来れたのは魔王の転生体が持つ有り余る程の魔力を使っていたからだ。

その魔力が使えない今、彼は戦闘経験が不足している魔術師に過ぎ

ない。
いや、攻撃が出来ない分……ウィザードになっただけの者にも劣る。

「こんな状態で姉貴を助け出すなんて不可能だ。俺は……俺は！」

なんて無力なんだ。

そう呟いて、仰向けに寝転がる。

「ああ……無力さ。」

……無力なら、無力なりに出来る事をやってやる。

俺は月を見ながら、開き直って笑う。

「どうせ、俺は……消えるんだろうな。出来損ない、なんだから。」

でも、と手に魔力を集めて握り潰す。

「ベレート、お前の出来損ないの俺は……お前の望みを知ってる。」

目を瞑り、黒髪の女性レジェを思い出す。
その姿は自分のよく知っている者だ。

「出来損ないでも、助けたいという望みは同じだって事か。」

レジェの姿は、姉貴と全く同じモノだった。

「姉貴^{レジェ}を救うのは………出来損ないの俺にだって出来る。」

……何も為せないまま消えたくないからな。

そう心の中で呟く。

遠くの方から来るベレート達を見て、俺はゆっくりと立ち上がる。

「無力で出来損ないで消える存在でも………。」

……大切な人間ぐらい救える。

俺の言葉が聞こえたのかベレートは目を見開き、なんか呟いている
が気にしない。

「早く行こう。」

そう言つて、腹に巻いてある包帯を取る。

傷の痕は一切存在していなかった。

「side out」

「side ベレート」

ルーと呼ばれ、柊蓮司と共に向かう。

アンゼロットは怪我人の手当ての為に、あの場に残った。

襲い掛かってくる侵魔を打ち払いながら、息が荒くなっていく柊蓮司に声をかける。

「……………柊蓮司、まだ戦えるか？」

「当たり前……………と言いたいが、正直なところ残り魔力が少ないな。」

俺は柊蓮司の前に出る。

「ネビア・ロスアと戦う時に魔力切れを起こされては適わん。お前は後ろで休んでおけ。」

前で戦うルーに当たらないように、魔法を幾つか放つ。

侵魔達は避けきれずに落ちていく。

その様子を見ながら、俺は首を傾げる。

……………何故、冥魔が現れない？ 冥魔の門を開く気がないのか？
それも有り得るが……………。

右の手刀で侵魔の頭を切り飛ばし、左手は他の侵魔の頭を掴み……………
…炎魔法で焼き尽くす。

集まってきた侵魔を倒し終え、急いで向かう。

そこには……………流々影司がいた。

その眼は昔の自分を思い出させるモノだ。

「大切な者を救う為に、自分を犠牲にする。」

あの出来損ないは、自分と同じ思考を持つ者だ。
そのくらいの事は簡単に分かる。

――だが、貴様にはやって貰わねばならん事がある。

「早く行こう。」

流々影司の言葉を聞き、ルーと柊蓮司が奴の所に向かって歩き出す。

――その分けた魔力を無駄にはしない。マリーにまた怒られるしな。

ククツと笑い、自分の手の平を見つめ…………グツと握り締める。

「レジェ、後少しだ。君の為なら…………。」

小さな声で呟き、俺は歩き出した。

「side out」

燃え盛る業火の下で 1

「side ネビア」

私のいる世界の深淵に何か違和感が入り込んだ。
いや、何かは分かりきっている。

「……………ようこそ、私の世界に。」

口元を歪め、手を振る。

それと同時に月匣の中が作り替えられていく。

「何も知らなかった私の世界が、貴方達を歓迎してあげる。」

火の粉が舞い散る街や凍り付いた城、緑に覆われた地下都市が出来
上がっていく。

どれも死に満ちていて、空気が澱んでいる。

「希望なんて……………一つ残らず消しちゃうから、絶望に浸ってよね
？」

血で出来た鏡に入ってきた四人を映し出し、ケラケラ笑った。

「side out」

「side 影司」

糸を辿っていくと、ネビアがいるであろう場所に着く。

「っ！ これは！？」

紅蓮の炎に焼かれる街。

肉が焼ける臭いが充満しており、顔を顰めてしまう。

「敵の月匣の中で動揺しない方がいいぜ。奇襲を仕掛けてくるような侵魔もいるからな。」

柊が眉を顰めつつ、魔剣を構える。

ベレートとルーは何でもない様に振る舞っているが……………。

炎に燃えて消えていく文明、炭化していく死体。

それらを見ているベレートの拳が怒りで震えているのが分かる。

「……………人間同士の争いか。」

ルーが歩き出そうとして直ぐに足を止める。

「辺り一面に糸が張り巡らせてある。下手に突っ切ろうとすれば……………首が飛ぶように、な。」

その言葉を聞いて、柊が魔剣を振る。

糸を切り払おうとした剣先は、止まった。

「くっ……………！！」

反動で手から魔剣が落ち掛けるが、何とか落とさずに済む。

「その糸からはネビアの魔力が感じられる。我でさえ切り払えん。」

魔剣の攻撃を止める程の強度を誇る細い糸。

それを避けつつ、奥へ進まなければならない。

「だれ？ まだ、だれがいるの？」

そんな拙い声が響く。

その声を聞いた瞬間、全員が身構える。

――ネビア！？

しかし、その声はネビアにしては幼すぎる。

言葉を覚えてたての少女という表現が正しいと感じる程に、拙い。

「ねー、こたえてよ。だれがいるのお？」

その声の主が近寄ってくるのが分かる。

――俺達だと分かって言っているのか？

燃える建物の陰に隠れ、その姿を確認する。

指先から無数の糸を伸ばす、血に濡れた少女。

ネビア・ロスア。

その姿は、俺が知っているモノよりも幼い。

……どういふ事かは分からないが、気付いていない内に。

俺が魔法を使おうと手を上げると、その手を掴まれて移動させられる。

「待て、此処は月匣だ。何があつても可笑しくない場所で、安易な行動をするな。」

ベレートは手を放し、舌打ちをする。

「此処にいるネビア・ロスアが何なのか分からん以上、攻撃は出来ん。」

ルーが小さく頷き、俺の肩に手を乗せる。

「我と流々影司で月匣内を調べる。其方は二人でネビア・ロスアの動きに警戒して欲しい。」

そう言つて、ルーは俺の手を引っ張る。

「月匣の核を探し出して壊すのだが………時間が圧倒的に足りん。《魔力感知》を多用する事になるだろうが、頼むぞ。」

俺とルーは、燃え盛る街に向かって飛んだ。

「side out」

燃え盛る業火の下で 2

「side 影司」

他の二人と別れ、街の中をルーと飛び回る。

街で最も大きな建物に着き、そのまま移動しようとした瞬間。
俺達が月匣の核を探すのを邪魔するように、何十体もの侵魔が現れる。

「戦闘は我に任せよ。流々影司、貴様には《魔力感知》で辺りを探ってもらおう。」

「月匣の核とネビアの糸が持つ魔力は同じの筈だろ？ それだと流石に出来ないんだが。」

街の中にはネビアの魔力で作られた糸。

月匣の核も、恐らくネビアの魔力による物である可能性が高い。

「出来る、出来ないの問題ではない。やれ、と言っているのだ。」

「………了解した。時間が掛かるから、そのつもりで頼む。」

防御魔装を展開し、《魔力感知》を行う。

張り巡らされた糸の魔力を細部まで解析する。

「……かなり細かく作られてるが………妙だな。魔力に違和感がするが、何か理由があるのか？」

調べていくと、その違和感は強くなっていく。
それを解析する為に、より集中しようとした時。

防御魔装を通して、体に衝撃が走る。
咄嗟に集中するのを止めて、飛び退く。

「くっ……………！」

展開していた防御魔装は砕かれており、目の前に女性型の侵魔が剣を向けていた。

ルーの方を見ると侵魔……………ではなく、人間の形をした白い物に襲われていた。

「流々影司！ その侵魔……………ワルキューレは、通常より遥かに強力だ！ 攻撃を喰らうな！」

そう言いながら、ルーは刀を白い物に向かって振るう。
体を切り裂き、敵の上半身が滑り落ちていく。

しかし、その上半身と下半身は一本の糸で繋がったままだ。

「流々影司……！」

ルーの声を聞き、目の前のワルキューレに視線を戻す。
そして、振るわれる剣に向けて魔法を放つ。

虚無系統の魔法、《ディメンジョンホール》

強力な歪みを作り出す事で、攻撃を無理やり外させるつもりで放った。

「はぁっ……！」

ワルキューレの剣が歪みを断ち切ろうと迫る。

「ちっ、《スピリットバタフライ》！！」

冥界の燐光を纏った蝶の群れを突撃させる。

効かないと思うが、剣に力を込める邪魔になればと何度も放つ。

「その程度で……………私を何とか出来ると思っな！ この小僧があ！！！」

ワルキューレは大きく飛び退き、蝶の群れを切り払う。
その体は傷だらけでボロボロになっている。

「……………効いたのか？」

もう一度、魔法を放とうとして気付く。

……………無意識でベレートの魔力を使ってたのか。……………助かったから良いんだが、あまり使いたくはないな。

その魔力を使わなければ戦えない自分の弱さに舌打ちをする。

「独りなら暴走しても巻き込まない……………」

ルーの方が苦戦しているのを確認し、蝶達を辺りに舞わせる。
俺は息を整え、ワルキューレに手を向けた。

「side out」

「side ベレート」

幼い姿のネビア・ロシアの動向を確認しつつ、辺りを《魔力感知》する。

「何であんたが見て回る役じゃないだ？ 流々の奴よりも……………」
さっきまで疑問に思っていたらしい柊が、俺に問う。

「ふむ、柊蓮司…………… 貴様は流々影司を守りきれるか？」
「守るってのは、流石にきついかもな。」

……………いや、恐らく無理だろうな。

離れた場所から感じるルーの魔力を感じ、そう判断する。

「何故だ？ かなり激しい戦いだと言うのに気付かない訳がない。」
目の前にいる幼い姿のネビア・ロシアは全く気付いていない。
何かを、誰かを探して辺りを歩き回っているような動きをしている。

「向こうの加勢はしなくていいのか！？」
「…………… 向こうが陽動の可能性があるだろうが、行くなら一人で行け。」

柊蓮司が微かに飛んでおり、直ぐに行けるようにしているのが分かる。

「陽動つて、あんだけ力を入れるものか？」

「陽動は気が引ける程度に力を入れるものだ。柊蓮司、貴様は現に気を引かれている。」

「――第一、ルーが倒される程の戦力なら……俺が負ける事は確実。手を出すべきではないな。」

柊蓮司からネビア・ロスアへ視線を移そうとして止まる。

「――柊蓮司には煤が積もっている？」

自分の体に煤が積もっていないのを見て、ある事に漸く気付く。

「……………！」

柊蓮司が何か言ってくるが聞こえない。

「――ただの時間稼ぎだったという事か。」

自分は転移させられた。

その事実、直ぐに気が付いた。

暗闇の中、後ろに向かって話し掛ける。

「対象に気付かれないように、対象を誘導しつつ転移の魔法陣を描く。」

この方法は先に用意していると、魔法陣に気付かれるので考え出された罠だったな……………。

上で侵魔と戦闘させたのは、柊蓮司だけが動くと考えたからか？」

自分の考えを言い、最後に問い掛ける。

「ええ、それで大正解。途中で気付くかなって心配だったんだけどね。」

ネビア・ロスアの声が後ろからする。

俺は小さく舌打ちをし、魔力を手に籠める。

「一人ずつ片付けるつもりで、最初に俺を呼んだなら……後悔させてやる。」

……切り抜ける方法を考えねば拙いな。人形にはならんとしても……写し身を無くすと目的の達成は不可能。

魔法を構成しようと、手を動かした時……ネビア・ロスアの笑い声が聞こえる。

「少しぐらい待ってよ。そんな事の為に、呼んだ訳じゃないんだから。」

そこで魔法を構成するのを止めてしまう。

振り返ると、ネビア・ロスアが……ある物を見せつけてくる。

「味方になったら、コレは使わない。貴方に預けておく。」

「……ルーを裏切れ、と言いたいのか？」

ネビア・ロスアは口の端を歪め、ニタリと笑う。

「ルーと組む必要なんて……もう無いでしょ？ 貴方の目的は流

々加奈絵の精神をレジエへと変える、もしくは“冥魔の門”レジエの分離。」

俺は口を閉ざす。

その全てが事実なので、口を出せない。

「その目的を果たす為にルー・サイファーが出来る事は、流々加奈絵の確保。後は全て、貴方自身がするしかない。なら、組んでいる理由はもう無いでしょ。」

「俺が条件を果たしていない。……………勧誘は契約が切れてからと、あの魔王にも言ってしまったからな。」

「条件は……………あれ？　コレだと終わってるんじゃないの？」

……………どこまで調べたかは知らんが、契約を理由にして断れんな。裏切りは嫌いなのだが、流々加奈絵を奪われたのはルーだからな……………。

そんな事を考えながら、ネビア・ロスアが話し出すのを待つ。

「両方、一度は契約を終えてある。流々加奈絵の確保、巫女の確保。最終的に私が邪魔したけど……………契約、本当は切れてるよね。」

「其処までして味方に引き込みたいか？　俺はただの人間……………。」

そこで思い出す。

ネビア・ロスアも元は人間だと言う事を。

「そう、私達は異質な人間だもの。

私も、貴方も、“冥魔の門”もね。

私は世界を真っ白にして……………そんな人間を受け入れるような世界を作りたいの！！　そしたら、私だって認めて貰える！　だって、

みんな同じような人達だもの！！」

その眼は純粹を体現化したように輝いていた。純粹すぎて、逆に正気ではいられなかった者。

至る道が全く違う。

俺は王という全てを統べる存在となり、レジエを受け入れる世界を作りたかった。

ネビア・ロスアは自分を受け入れる世界を作り、皆に認めてもらえる存在になりたかった。

「最初は“冥魔の門”には、役目を果たしてもらおうと思った。そうしなきゃ……真っ白に出来ない。でも、貴方の魔力があれば簡単に真っ白に出来る。」

神に届く領域の魔力。

それがあれば、容易い事だろう。

俺は口を開き……。

「side out」

探求者達の争い

「side ベル」

ルー・サイファー達がネビアの糸を辿っている時に、私も入り込んだ。

裏切り者の処分の為でもあるが、彼女は恐らくルー・サイファーが消滅させるだろう。

その前にやっておきたい事は、巫女の処理。

ネビアと世界結界を繋ぐ鍵となってしまう者。

今のネビアが持つ膨大な魔力の源である巫女。

その者達を殺すのには勝つ為と、もう一つの理由が存在する。

この戦いが終わった後に他の魔王の手に渡っては困るというものだ。世界結界を乗っ取りたい者は大勢いるだろう。

……そんな事、させないに決まってるでしょ？

巫女の魔力を探して、白い回廊を飛ぶ。

そして、自分の前を飛び交う影達に向けて、《ディヴァインコロナ》を放った。

「失せたら？ ネビアに相手にもされないような低級魔王は。」

影達は、此处に侵入してきた魔王。

……私と同じ方法で入ってきたみたいね。……… 実力のある魔王

もいるし、手早く済ませないともしかして拙い？

冷や汗が流れる。

「そう言うべール・ゼファー、貴方も相手にされてないじゃない。」

「あの小娘など、巫女の力が無くなれば……………ただの雑魚だ。」

そう言った二人の魔王の頭が、一瞬で胴体から切り離された。

「な……………！？」

目を覆いたくなる程の瘴気を纏う、血に濡れた者が立っていた。

「速水……………燕？ ネビアの落とし子だった所為で影響が出たのね。」

冷静になる為に、自分が理解できている事を口にする。

「……………強いわね、さっきの二人の魔王は強い部類に入るっていうのに。」

「巫女様は私のモノ、他の誰にも殺させない。私が守って、私が殺して、私が、私が、私が、アハッアハッ……！」

狂った笑い声を上げ、体を震わせる。

「瘴気に吞まれて壊れたみたいね。」

淡々と言ってみせるが、冷や汗は止まらない。

燕から感じ取れる魔力の大部分に、有り得ないモノを感じるからだ。

- - - 巫女の魔力が循環してる。一個人の大量な魔力を得る方法は少ないから……………まさか。

血塗れの燕。

その血は、誰のモノか言うまでもない。

魔力を得る方法で、同意も何もいらぬモノ。

それは血肉から奪うといった方法だ。

吸血鬼の行う吸血行為は相手をあまり傷付けずに魔力を得ている。

「……………巫女は、美味しかった？」

「アハハッ！ 巫女様はねえ甘かったかなあ！」

顔に付いた血を舐めて嬉しそうにするのを見て、つい眉を顰めてしまふ。

「何人、食べたのかは知らないけど殺られる気はな……………」

周りにいた魔王の一人が魔法を放とうと腕を振り上げるのだが、その腕は宙を舞う。

「止めてよ、巫女様は誰一人としてあげない。巫女様は、私とずっとずっと一緒だから……………！」

- - - 見えなかった！？ ちつ、正面から戦うのは無しね。武器が見えないのか、速すぎるのか分からないんだから。

速すぎる、が正解だった場合……………瞬殺される事は確定だろう。防御魔装は最も強力なモノを展開する。

周りの魔王達は腰が引けている者や、殺気立っている者がいる。

「協力しない？ 彼女を倒せば……………ネビアの手に世界は渡らない可能性が高くなるんだけど？」

「倒す算段は？ あの攻撃を避けれる自信は無いが……………」

攻撃動作の無い攻撃。

物理的なモノなのか、魔法の類なのか。

それとも……………。

「side out」

「side 柊」

目の前でベレートが消えた。

転移だと気付いたのは、ついさっきだ。

「……………て、転移！？」

それと同時に街の雰囲気ガラリと変わる。

炎で目が痛くなる程に明るい街が、炎が収まった為に暗く沈んだ。

――クソッ、いきなり何なんだよ！？

空に飛び上がろうとして……………止まる。

後ろからの突き刺すような視線を感じたからだ。

「ねえ……………遊んでよ、お兄ちゃん。」

小さなネビア・ロスアは笑って、俺に近付いてくる。

「お人形遊びがいい？　でも、鬼ごっこって言うのもしてみたいなあ。」

「そんな事して……………楽しいか？」

地上で見た操られた人々を思い出して、そう目の前のネビア・ロスアの姿をした存在に聞く。

「ん〜、楽しいって何なの？　分かんないや……………あ、そうだ！　お兄ちゃんの記憶を読めば分かるんだよね！！」

周りの死体を白い糸で纏め上げていく。

「でも、お兄ちゃんは強そうだから……………私の特製お人形で捕まえてあげるね！！」

奇怪な姿をしたモノが立ち上がる。
体の様々な部位を無理やり繋ぎ合わせた生物とは言えないモノ。

「……………っ！」

後ろへ飛び、つい口を押さえる。

内臓が飛び出ていたり、足と手が混ざっていたりと混沌とした姿。そんなモノを見て、吐き気がしない訳がない。

「……………そんなモノ、叩き斬ってやる。んな所で殺されたら、くれ

はに怒られるだろうしな。」

息を整え、ゆっくりとした動作で魔剣を構える。

「行かせてもらっぜ！」

魔剣を大きく振るい……………切り裂いた。

「side out」

瘴気と光

「sideベル」

辺りに満ちている瘴気で白い回廊が黒に変わっている。
空気だけでなく、その場の全てのモノを侵していく瘴気。

その瘴気を放っている燕の手には、ハルバード。
巫女を守る為に振られた彼女の愛用武器。

それは巫女を殺す為に振るわれたのか、月衣から取り出す時から血に濡れたままだった。

自分が安全な場所にいたのなら、燕に対して皮肉の一つでも言うだろう。

――ハルバードと見えない攻撃………本当に厄介な敵。

そう思いつつ、防御魔装を展開する為に魔力を体全体から放出する。

景色がガラリと変わる。

その時、自分の体が吹き飛んだ事に気付いた。

「……………は？」

空中で身を捻り、魔法陣を足場にして着地する。

「何に反応して……幾ら何でも速すぎる!」

燕の方を見る。

目の前に迫る凶器を咄嗟に払いのけ、攻撃魔装を放とうと右手を向け……魔力を込めた。

「っづ!!」

右手に何かが突き刺さるような感覚、感触。

一瞬だ、ほんの一瞬。

最初に吹き飛ばされなかったら、恐らく気付かなかっただろう。

瘴気の波が押し寄せ、右手に向かっていくのに。

「魔力に反応する瘴気? はっ、正面から殺り合えてこと? ほんと……ふざけてる。」 ぽ

ハルバードを持つネビアの落とし子。

世界結界と繋がる特殊な魔力を持つ巫女を喰らった者。

「あはっ! お休みなさい、蠅さん!!」

動きが止まった私に、ハルバードのスピアが迫っている。

……こんなのに勝てる筈がない。

巫女の魔力で世界結界と繋がり、ネビアを通して世界結界と繋がっている彼女は……ネビアよりも凶悪な存在だと言えるだろう。

殺せ、と言わんばかりにゆつくりと目を瞑る。

しかし、いつまで経っても……………スピアは突き刺さらない。

目を開けると、魔王の一人がハルバードを蹴り上げていた。しかし、そのままハルバードは振り下ろされてしまい……………アックスで叩き斬られる。

「人間に、負ける気か？……………“蠅の女王”が負けを認めるのか？」

膝から崩れ落ちる一人の魔王は、瘴気に吞まれて消えていく。そして、もう一度ハルバードが向かってくるのだが……………腕を掴まれて後ろへと引かれる。

「全く……………協力を頼んだ方が先に諦めるな。こちらが困るだろう。」

そう一人が言うと、数人の魔王が私の前に出る。

「で、何故……………絶望した。何が分かったのか教えてくれ。」

「魔力に反応して瘴気が襲ってくる事ね。あれ、でも……………着地に使った魔法陣には反応しなかった？」

自分が魔力を使った行為を思い出す。

最初は防御魔装を展開して、瘴気に吹き飛ばされてしまった。その次は魔法陣を着地に使った……………瘴気に襲われなかった。

そして、攻撃魔装を使う為に右手に魔力を込めた…………。

「魔装を使う為に、魔力を回路に通すと……………瘴気が襲ってくる。」

それに気付いた瞬間、希望が見えたような気がした。

しかし、魔装が使えないというのは……………かなり拙い。

魔装というのは、魔法陣の構成などをしなくて済むように体の中に回路を作っておくのだ。

発動魔法での魔法陣の構成は、時間が掛かる。

スピードは魔装。

パワーは発動魔法。

そう言ってもいいかもしれない。

防御魔装が使えないのもかなり拙い。

全て躲さなければ、死んでしまうかもしれない。

……不利なのは、分かってるけど。

治癒魔法で傷を癒やす。

瘴気は襲ってこないの自分で自分の考えは合っているのだろう。

「この大魔王が人間に怯える？ “蠅の女王” がウジ虫に疎む？ そんな事があっていい訳ないじゃない。」

数多の魔法陣を構成、展開をする。

「負けるなんて選択肢、私には存在しない!!」

発動する魔法は……天属性。

瘴気を焼き払おうとする光と、光を押し潰そうとする瘴気がぶつかり合った。

「side out」

燃え盛る業火の下で 3

【side 影司】

ワルキューレと戦っている最中に、白い糸が無数に群がってくる。
何度も何度も払うのだが………キリがない。

「死ね、人間！」

ワルキューレの剣が、俺の肩を抉る。

糸による妨害は確実に体力を削り、動きを鈍くさせている。

「死に絶えよ！」

心臓を狙った一撃が放たれる。

勝てると慢心したのか、それは大振りで狙いが甘い。

左手で剣を防ぐ。

深く突き刺さったのが分かるが、気にしてはいけない。

即座に、右手に純粋な魔力を纏わせる。

ただ破壊する為だけの凶悪な魔力。

「消え失せてしまえ！」

ワルキューレの頭を強く掴み、その魔力を叩き付ける。
肉が焼ける臭いが、一瞬だが辺りに漂う。

「あ、あああああああ……！」

武器を手放し、ワルキューレは離れていく。
いや、体が魔力となり溶けていくのが見て分かる。
ある意味、幻想的の光景ではある。
だが、それを見ている時間は全く無い。

自分の周りにある白い糸が襲ってくる。
それを薙ぎ払うのだが、視界が白で包まれていく。
糸で周囲が見えなくなっていくのは拙い。
外から見れば、繭のようになっていていることだろう。

腕を伸ばし、糸の間から外へ向かって手を出そうとする。
だが、その手は糸によって阻まれる。

「く……………そ……………!!」

足に糸が絡め取られ、何処かへと引きずられていく。
遠くからルーの声が聞こえ、魔法を放つ音がする。
しかし、その声も徐々に聞こえなくなっていく。

そして、ドスンツと音を立てて地面に俺は落ちた。

【side out】

【side 終】

切り裂いた。
目の前にいる生物とはいえない存在を真つ二つにした。

だというのに、手応えが全く無い。
簡単で、あまりにも弱すぎる。

「どういう事だ………?」

その事が信じられなくて、その場を離れる。

すると、半分になった肉塊が糸で無理やり繋ぎ合わさっていく。
強制的に元の形に戻らされた肉塊は俺に襲い掛かってくる。

魔剣で防ぐのだが、肉は魔剣ごと弾き飛ばしにかかってきた。

「ぐっ!?!」

後ろの壁にぶつかり、そのまま突き破って中に入ってしまう。
瓦礫が崩れ落ちてくる前に入ったのとは反対側に出る。

——どうする? 斬っても倒せない敵をどうやって………倒せば
いい?

上空での戦闘音が聞こえなくなっていく。

負ける事はないと思っているので、今いる場所から移動する。

暗い街中を走り、空が見えそうな場所を探すのだ。

さっきの所は崩れ落ちた物で空が見えない状態だった。

「魔法でなら………やれるか?」

その時、右腕に激痛が走る。

張り巡らされた糸と触れてしまったらしい。

——さっき通った時は無かったのに!?

進むのを止めて、魔剣を一度だけ振るう。

やはり糸が張っていたらしく、魔剣が途中で止まってしまふ。これ以上、進んでいれば命は無かっただろう。

後ろを向くと、歩いてくる肉塊とネビア・ロスアがいた。

「どしたの？ 追いついちゃうよ？」

急に立ち止まった俺を見て、困惑した声で問いかけてくる。

この糸を張ったのは、目の前にいる幼いネビア・ロスアでは無いらしい。

そして、彼女には……………この糸が見えていないらしい。

———これを利用すれば肉塊を操ってるネビアを倒せる……………か？

そう思い、横の建物を突き破りながら走って離れる。

上空からルー・サイファールの声が聞こえてくる。

「流々影司！ 返事をしろ！！」

強力な魔法を放ったらしく途轍の無い衝撃音が響く。

上空で何が起こったのか分からないが……………拙い事になっているのは確実だ。

魔剣を握る力を強め、辺りの糸の配置を確認する為に俺は跳んだ。

【side out】

燃え盛る業火の下で 4

【s i e d 柊】

瓦礫と化した街を跳び回る。

その途中で肉塊が全てを薙ぎ払うように腕を振るう。

いや、本当に薙ぎ払っていた。

跳んで来る瓦礫が体を掠めていく。

それが直撃していれば死ぬのは確実。

—— つつ！？ やばすぎるだろ！！

魔剣で防げばいいのだが、そんな事をしているのは追いつかれてしまう。

それでは意味が無い。

追いつかれた時点で勝ち目が無い。

少しだけ振り向いて、ネビアの位置を確認する。

彼女はのんびりと一人で歩いていた。

俺を追いかけているのは肉塊だけ。

「……………クソ、自分は戦わないって事かよ。」

彼女が自分から戦っていれば、こんなにも跳び回らなくても良かっただろう。

いや、それは早計だろう。

2対1で、俺が勝てる筈が無い。

あの肉塊は異常だ、斬っても殺せないのだから。

「あはははは！　いつまで逃げるつもりなの？　私みたいな子供にも勝てないの？」

そんな挑発に乗る気は無い。

目の前に張つてある糸を無視して、上へと駆け上がっていく。壁を蹴つて上がる度に瓦礫が下に落ちる。

「糸の前に瓦礫を落とす訳にはいかないってのに……………」

俺は魔法をほとんど使わない。

ベール・ゼファアのように魔法陣を足場に出来ない。これ程までに使えないのが困ると思わなかった。

ネビアはまだ糸の存在に気付いていない。

辺りを見回し、使えそうな糸を探し続ける。

飛び越えるという手段は使えない。

その場所に何かがあると言っているようなものだし、怪しまれては困る。

迂回する？　いや、肉塊に阻まれてしまうだろう。

そこで、ある事に気付き……………俺は壁を蹴るのを止めた。

この糸が最後だという事に。

急に止まって落ちてくる俺を貫こうとする肉塊の腕。

その攻撃を魔剣で防ぎ、腕を切り落とす。

直ぐに再生……………繋ぎ合わさろうとする糸を放置して、肉塊を蹴り落とす。

「これで……！！」

さつき無視した系の中に肉塊を蹴り入れた。
肉塊を構成する為の系は容易く裂かれ、動かなくなる。
だが、系は蠢いており……繋がるうとし続ける。

「何よ、その糸……？ 私に喧嘩でも売ってるの？」

自分の武器である糸が強度負けした事に驚いているらしい。そして、プルプルと拳を震わせているのが分かる。

「私の存在価値が無くなっちゃうじゃない。貴方を殺さないと……
…私が殺される。あははははははははははははははははは！　でもね、
貴方を殺したら……もつともつと私を認めてくれるんだよ！　役
立たずじゃないって言うてくれるんだよ！！　きつと人として認め
てくれる！！」

「……………」

狂ったように笑い出すネビア。

俺は魔剣を握り締め、彼女に向ける。

早く倒さなければ肉塊が動き出してしまう。

「行くぞ!!」

魔剣を勢い良く振るった。

その剣先はネビアの腹部に突き刺さる。

なんの抵抗も無く、簡単に……。――

「これって……嘘だろ……？」

これだけの力を持っているのだからウィザードだと思った。

しかし、この感触は違つと断言できる。

ネビア・ロシアは、ただの人間だった。

特殊な能力を持つ人間。

魔装も魔法も使っていないのだろう。

いや、使えないのかもしれない。

周りの景色が少しずつ薄れていく。

この人間であるネビアを殺したからかもしれない。

「こんなを見せて、殺させて……………何がしたいんだ？」

それが分からなかった。

何が望みなのか俺には理解できなかった。

【side out】

【side 影司】

白い糸に呑み込まれ、何処かに落とされる。

顔を上げて……………驚愕する。

辺り一面、氷で覆われていたからだ。

落とされた場所は城の厨房らしい。

凍らされた召使い、兵士の姿がある。

「また妙な所へ飛ばされたな……………」

そう呟いた瞬間、近くにあった扉の向こうから声が聞こえる。歌のようにも聞こえるが、リズムが取れていない。

「……………壊しちゃう前にちゃんと聞いてれば良かったなあ」

その声は、前にいた場所で見かけたネビアの声と似ていた。だが、少し違っていると俺は思った。前よりも大人びた声だと思ったのだ。

俺はドアノブに手を掛け、開けようとして……………。

【side out】

氷城に眠る 1

【side 影司】

ドアノブに触れようとした瞬間、誰かに手を掴まれていた。
俺は振り向きながら魔力を纏わせた手を突き付ける。

「待て！」

ガクガクと足を震わせている兵士の鎧を纏った少年がいた。
少年は俺の手を離し、剣に手を掛ける。

「なんでお前は動けるんだよ？」

抜かれた剣の先が、俺の首元に突き付けられる。
その一連の動作は予想よりも速かった為、驚いた。

「俺は……………」

何も言えない。

この場所がどんなところなのか分かっていないからだ。
目を一瞬、逸らした俺を怪しんだのか剣を軽く押し付けてくる。

「答えられないなら答えないでいい！！ お嬢様は……………お嬢様は
何処に行った！？」

「分からないし、俺はそのお嬢様を知らない。」

彼は俺の言葉に落胆し、この部屋から出て行った。

——お嬢様、か。見た目だけでも聞いておけば良かったな。

そんな事を思い、さっきの少年が行った扉の方へと向かう。
いや、向かおうとして足を止めた。
全く違う方向から声が聞こえてきたからだ。

「流々影司、無事だったのか……………」

そちらを向くと所々に怪我を負ったルーがいた。
自分で何回も治癒魔法を使っている。

「柊蓮司とベレートと会ったか？　ずっと捜しているのだが……………」
「
会ってないけど、ネビアの声を聞いたぞ。」

ルーは苦々しい顔をして、俺が向かおうとしていた扉を見る。
そして、辺りを見回して舌打ちをする。

「ネビアの系は無いようだが、氷から他の侵魔の気配を感じるな。」

此処はネビアの月匣だ。

前に出て来たワルキューレは、ネビアの作り出したモノなのでネビアの気配しか感じなかった。

だが、ルーが言う様に他の侵魔の気配が氷から漏れ出ている。

「有り得ないだろ！！　この月匣の中にネビアが他の侵魔を入れる訳が……………」

「わざと入れた、としか思えんな。だが、我等に考えている時間があまり無いのだ。外がどうなっているのか分からのだからな。」

此処に入ってから、どれだけの時間が経ったのか分からない。

急がなければ……世界結界で修正できる範囲を超えてしまつかもしれない。

そうなつてはどうしようもない。

「あの二人を捜すよりも、此处から出る方法を見つけて方が早い。前の場所から此处に移動させられた理由が分かんのが痛いが……」

…。」

ルーは溜め息を吐き、扉から出て行つた。
その後が続いて、俺も扉へと向かった。

【side out】

【side 柵】

影司が此处に落とされる数十分前。

目を開けると、城の豪華な部屋にいた。

この部屋にはベッドがあり、隣の部屋は客室なのだろう。

戦っている時に負った怪我の手当てをしていると、客室から話し声が聞こえてくる。

「君の人形は鎖でしっかりと繋いでいるのだろうね？ 人形と言うよりは狂犬と言いたところだが……見た目だけはただの少女だからねえ。」

「そのように作り上げた兵器ですから。」

その直後、部屋の扉を開ける音が聞こえる。

「侵魔が牢を……………城を！！」

ひんやりとした空気を感じ、俺は窓から外を見た。
この城自体が凍りづけになっていた。

もう一度、客室の方から聞こえる話に耳を傾ける。

「直ぐに片付けたまえ。君の人形ならば……………出来るだろう？」

「ええ、分かっております。」

そう言った次の瞬間、大きな爆発音がする。

耳を澄ませていた俺はふらつきながらも部屋から出る。

さっきの爆発音の大きさからして隣だという事は確かだった。
衝撃は無かったので、音だけのモノなのかもしれない。

「……………！！！！」

喉を切り裂かれた男がいた。

その直ぐ横には血に濡れた剣を持つ、鎧を纏う少年。
彼が斬った事は明らかだ。

扉の近くには、鎧を纏った青年が剣を持った腕を切り落とされて殺
されている。

離れた所には腰を抜かした豪華な衣服を身に纏う男がいる。

「お嬢様を傷付けらなら……………さっさと死ね。」

冷めた眼をした少年は容赦なく止めを刺そうとする。

俺は反射的に動いてしまった。

魔剣で、少年の剣を弾いてしまったのだ。

「…………雇われた方でしょうか？」

「え、いや、違うんだが」

俺が何かを言おうと口を開いた時、腰を抜かした男が叫ぶ。

「き、君！ 金なら払う！！ わ、私を助けたまえ！！！」

そう叫び、男は立ち上がるうとした。

だが、手や足が凍っていた為、立ち上がれないでいた。

「な、これって！？」

死体も何もかも凍っていく。

俺の足を凍らせようと、氷が広がってくる。

「知る者を全員、葬れば…………お嬢様が外を見れる。」

嬉しそうに、悲しそうに少年は呟いた。

俺の体が半分以上、凍ったところで部屋から立ち去っていく。

「これなら溶かせる、か？」

俺の口から溜め息が零れた。

【side out】

氷城に眠る 2

【side ネビア】

私が作り上げた、炎に焼かれていく街は消滅する。
月匣の核である幼い頃の私自身。

世界結界の中にある、この世全ての記憶から作ったのだ。

——この記憶の中に絶対……。

知りたい事があった。

自分の記憶の片隅に残っている誰かの影。

鳥籠のような檻の中に閉じ込められた私を見ている。
そして、その影はいつも私に向かって言うのだ。

「お嬢様、お久しぶりです。」

「……………」

私は返事を出来なかった。

自分の事をお嬢様と呼ぶ者は限られている。

ずっと昔、私がまだ力に気付いていなかった頃の者達。
ただの名家でしかなかったロスア家の使用人達ぐらいだ。

目の前にいる人物は恐らく使用人だった者の一人。
私は怖くて顔を上げるのを躊躇い続けていた。

今の私の姿を見て、何を言われるのか分からなかったから怖かった。

「お嬢様、お久しぶりです。」

その言葉を何度も言ってくる誰か。

私が返事をするのを待っているのか黙ったまま立っている。しばらく経ったら、その誰かは話を始める。

「お嬢様は覚えていらっしやいますか？ 以前、一緒にお遊びになっていた隣の家に住んでいる子がいたのを……………」

そう言っただけの話をしていく。

昔にあった話したり、その人達が今は何をしているのかを教えてくれた。

皆が皆、幸せに暮らしている訳では無いというのが分かった。

そんな日が何日も何日も経った時だ。

この城の城主が何故か、この部屋を訪れていた。

彼は私という特殊な能力を持つ者に興味を示したのかもしれない。

「おや、また来ていたのかい。」

「城主様こそ……………当主様に言いつけましょうか？ “これ”は商売道具であつても商品ではありません。接触は控えてください、と言われているでしょう？」

“これ”というのは私の事だ。

そう言われても、いつもの事なので別に気にならなかった。

男爵は意味有り気な笑みを浮かべながら、この場を立ち去っていく。

「お嬢様は外の世界を見たいですか？」

「……………外って、貴方がいつも話す外の事？」

私は俯いたまま聞く。

見れる筈が無いと確信していたからだ。

私を商売道具としか見ていない父が、外に連れ出すのは戦場だけ。

「そうです、長らく見ていないでしょう？ 青い空を。」

「どうやって？ あははははは！！ 無理に決まってるじゃない！

もうね、なんにも望んじやいけないって分かったんだから！！」

ポタポタと涙が零れているのが分かる。

父に言われたのだ、望むなど。

力以外に価値の無いお前は何かを望む権利は無い、と。

「絶対に見せます、俺が……………この手で。」

震えた声だけが聞こえてくる。

私が咄嗟に顔を上げた時に見えたのは、その誰かの背中。

「どんな手を使っても……………必ず。」

去っていく背中を見つめる事しか出来なかった。

それは外に出る事が出来るといふ期待があったからだと思う。

スツと眼を開き、溜め息を吐く。

自分の過去の記憶を覗いて、その誰かを知リたかった。

そして、世界の記憶から形成した世界に誰かはいた。
柊蓮司と流々影司の二人が会った鎧の少年だろう。

二人に会う前から全てを見ていたのだが……私は目を背けてしまった。

【side out】

【side ルー】

凍った城の中を流々影司と共に歩き回る。

此処に来るまでに見かけた人々は全てが凍り付いていた。
正直な話、人の気配はしない。

——ネビア・ロシアの声が聞こえてきた、それだけが手掛かりか。

感じる侵魔の気配は辺りに撒き散らされているようで、当てには出
来ない。

ネビア・ロシアの気配も辺りに感じる……当たり前だ。

此処は彼女の月匣なのだから感じない訳が無い。

「なあ、少し前に凍り付いてない奴に会ったんだが……。」

「………本当か！？ というよりも、先に言っただけ欲しかったのだが。」

「忘れてたんだよ、その後に直ぐルーに声を掛けられたから。」

影司が頭を掻きながら、苦々しそうな顔で言う。
その顔からして本当に忘れていたのだろう。

「どのような者だったのだ？　今で言うウィザードのような……特殊な力を持つ者か？」

「見た感じでは普通だったけど、剣の腕は良いと思うぞ。」

その少年の攻撃に反応できなかったと影司は言う。

しかし、ベレートの転生体である彼は接近も出来る筈。

というよりも、ただの人間の攻撃を避けない事に我は驚いた。

「その小僧、可笑しいな。いや、侵魔の気配を小僧から感じたのか？」

「分からない……その時は侵魔の気配自体に気付いて無かったから。」

——その小僧が侵魔だという可能性も考えねばならんな。

下に繋がる階段を見つけて、静かに下りていく。

どうやら下の階は地下牢らしい。

「これは……」

今まで見てきた人間は、凍り付いている以外に異常は無かった。だが、ここにいる者は違う。

元から死体となっている状態から凍った者。

凍ってから碎けた……いや、碎かれた者。

前者は血が辺りに飛び散っているのでよく分かる。

奥から笑い声が聞こえてくる。

冷や汗が頬を伝い、地に落ちていく。

「流々影司、上に戻るぞ。」

氷城に眠る 3

【side 柊】

足に纏わり付いていた氷を砕き、部屋から出る。

辺り一面が氷で覆い尽くされており、数人の武器を構えた兵士が氷像となっていた。

今、気付いたのだが氷からは侵魔の気配が感じられる。

「さっきまでの俺と同じ状態か……………」

助けたいとは思っただが、砕くには時間が掛かってしまう。

歯を食いしばり、砕く事を諦めて先に進む。

近くにあった下に続く階段は氷で塞がれていた。

「とりあえず、ルー・サイファーと流々の二人にベレートが何処かへ転移された事を言わねーと。」

こんな広い城の中を捜し回らなければならない。

というよりも、この城の構造を分かっているのだから迷う可能性がある。

その事の方が心配ではあるが仕方が無い事だろう。

そう考えていた時だ、氷の刃が俺の頬を掠る。

「……………くっ!!」

振り返りながら、魔剣を振るう。

その剣先はローブらしき物を切り裂いただけで、他には何の感触もなかった。

「侵魔!？」

そのローブは人間のような形となり、冷気を放っている。
中身の無いローブがはためく度に背筋がゾクツとする。

侵魔から感じる気配は、氷から感じるものと全く同じものと分かる。

——格が違うというよりプラーナを得て、力が強くなっているのか？ 凍り付いた人達から奪った？ いや、それよりも前に凍り付けにする為に必要な魔力を何処から得たんだ？ これだけの事をしたんだ、尋常じゃない量の魔力かプラーナがいると思うんだが……。

氷の剣をローブの裾から伸ばし、俺に向けてくる。
侵魔が動く度に首元が冷やりとする。

「おや、まだ生きていましたか。」

会話に付き合う気などさらさら無い。

この侵魔を倒せば、凍り付けになった人を元に戻せる筈だからだ。
それに階段を塞ぐ氷を排除できるのもある。

「何者かは知りませんが、私の邪魔はさせませんよ」

振るわれた氷の刃を魔剣で防ぐ。

接触した部分から魔剣が凍り付いていくのが分かる。

「嘘だろ……………」

こんな事は初めてだ。

凍り付いてしまうとは思ってもみなかった。

首元を感じる冷やりとした感覚はより強く感じられるようになる。
いや、その感覚は首を掴まれているようにも……………。

「もう遅いですよ……………永遠に眠りなさい!」

その声は前と後ろから同時に聞こえた。

【side out】

【side 影司】

ルーが侵魔の気配を上階から感じたと言うので駆け上がった。
その階の階段が氷で防がれていたのだが、ルーと俺で焼き払った。
轟音が鳴り響いたので、此方の存在に向こうも気付いただろう。

——それ以前の問題か、此処は敵のテリトリーなんだから気付いていない筈が無い。

そんな事を考えながら、ルーに付いて行く。

俺にはその辺りに広がっている侵魔の気配と区別がつかない。
ルーに案内されないと場所が分からないのだ。

「同じ侵魔の気配が二つ、か。これは写し身が二つなのではなく……………
片方が氷で作った偽者の可能性が高いな。」

俺達が向かう方から呻き声が聞こえてくる。
その声が誰のものは直ぐに分かった。

「柊蓮司の身が危険かもしれん！ 急ぐぞ！」

ルーが今までより強く床を蹴って、スピードを上げる。
俺との距離が徐々に広がっていく。

そして、先に角を曲がり……いきなり魔法を放った。

「《デイヴァインコロナ》！！」

前もって準備していたのだろう。

その魔法は廊下の先にいる侵魔に向けて放たれたモノだ。

俺が追いついた時、ルーは舌打ちをして治癒魔法を展開していた。

逃げられたのか、倒したのかは分からない。

曲がり角を曲がった所に柊が倒れていた。

その周辺は途轍もない冷気が漂っており、凍え死んでしまいそうな程だ。

「流々影司、貴様は柊蓮司を運べ。治癒魔法を行いながらの方がいい。此処にいては何時まで経っても回復せん。」

俺が頷いて、柊を背中に背負う。

その体は冷え切っていて、生きているとは思えない。
それ程までに酷い状態だった。

——治癒魔法は効いているみたいだから死んでないな。ギリギリ間に合ったっていう事か。

俺は小さく安堵の溜め息を吐いた。

【side out】

氷城に眠る 4

【side 影司】

零度をかなり下回っている城の中。

俺達は月衣の能力で、常識では考えられない寒さの中でも行動できる。

しかし、侵魔の力による極寒を月衣で防ぐ事は無理だったらしい。

「くそ、急に温度が下がりだした……………」

客室で柊の治療を行っているのだが、俺自身も体が凍えていく。

自分の体に、火属性を宿した魔力を纏わせているのだが……………これでは拙い。

俺の様子を見かねたルーが、肩をトンツと押してきた。

「治療魔法と同時に使えんようなら止めておけ。我が治療している間に侵魔を……………いや、先ほど会ったという少年を捜してくれ。」

俺は少し躊躇ったが、この調子では自分が凍え死ぬという予想は出来たので頷いた。

「柊は任せた。」

「はっ、この程度の傷……………数分と掛けずに治してみせる。」

そんな事を言っているがルーの額には汗が流れていた。

これ以上、この場に居るべきではないと俺は客室を出た。

……火属性の魔力が上手く使えない。火属性の巫女がないから

か？

小さく舌打ちをする。

火、地、天属性は魔法が使えないだけではない。

その属性をもつ魔力と他の魔法を同時に使えないという事が分かった。

……つまり城の中で、この極寒の中で魔法を使う事は難しい……
…というよりも凍え死んでしまうのか。

展開に時間の掛かる発動魔法は論外。

展開中に氷像になるのがオチ。

「魔装なら使えると思うが……。」

下の階に下りながら、考えていた。

その時、上上がる階段が氷で閉ざされた。

同時に唸るような気味の悪い音が鳴り響いて、背筋がゾクツとする。

咄嗟に最も近い部屋へ駆け込み、息を潜めていると音が大きくなっているのが分かる。

不協和音。

様々な者達の声帯が震えているようだ。

男性、女性、子供、年寄り……。

そして、不快な気分させる魔力を感じた。

それに気付いた時、ズリズリという引き摺る音が聞こえてくる。

――地下室から出て来た？ 最悪だ、こんな時に限って……！！

今の俺は魔装しか攻撃手段が存在しない。
ただ自分が使用できる魔装が効くのが問題だ。

あの肉塊の魔力は異常な程に高い。
魔法、魔装に対する防御力も高い筈だ。

――気付かれたら終わり、か。

そんな事を考えながら部屋の中を見渡す。
部屋の中は様々な物が置いてあり、全体は見えない。
しかし、今まで見てきた部屋から考えて寝室が直ぐ隣にある事は知っている。

寝室に行きたいが氷が辺りに広がっており、不用意に動けば音を立ててしまう。

だが、廊下の引き摺るような音は大きくなっていくばかりだ。
これでは何時まで経っても出る事が出来ない。

――違う出口を探すべきだな。

ゆっくりと歩き出す。

氷を踏んでも音が出ないように、地面を踏みしめるように。
見えなかった場所には寝室があった。

扉を開ける為に近くの氷を火属性を纏った手で触れて溶かしていく。
直ぐに氷は溶けて、入れるようになる。

音を立てないように部屋に入ると、そこは寝室ではなく書庫といった場所だった。

さっきの部屋は客室ではなく、誰かの部屋だったのかもしれない。入ってきた扉を閉めて、近くにあった本を手取る。

その題名は“生物の合成について”だ。

そして、その横には研究を記した何枚もの紙切れがある。

——さっきの奴に関してか？ 何か情報が得られれば………対処法とか。

紙切れに書かれた内容を、吐き気を我慢しながら読んでいく。

“出来たものは不純物を多く含む失敗作。私が調べ切れていない秘術があるのだろうか？”

“悔しい。この作品に………あの人形使いに劣らない兵器をあと少しで出来上がりそうなのだというのに、何が足りない？”

“腕を候補に入れるべきか？ これ以上は要らない気がするのだが………”

“様々なモノを付け足していくのだが、駄目だ。一般人の素材では駄目なのか？ しかし、良い素材など手に入る筈が無い。新しいモノを作るべきだと城主様に言われてしまった。”

“失敗作を全て地下室に溜め込んでいたのだが、久しぶりに中を覗き込んだところ妙な事が起こっていた。それら全てが混ざり合って一つとなっていたのだ。”

魔力的には申し分ない程の素晴らしいモノと成っていたのだが、自我が無い事をロスアに嘲笑われた。アイツを見返す為に、成功させなくては………”

”アイツに言われたように自我が無くては役に立たない。味方を巻き込んで戦う兵器は使えない。私の作品とは違い、ロシアは自分の子供を兵器として使っているのだから自我があつて当たり前だ。

……言つ事を聞く子供を素材として使つたところで言つ事を聞く訳ではない。試してみたいと研究家としての本能が疼くが、子供を使う事は出来ない”

“城の人間から奇異の眼で見られるのが辛い。私だって仕事でやっているのだ。報酬が良いから兵器開発の仕事を請けただけだというのに、こんな事だとは思わなかった。娘に会いたい。”

数枚の紙切れを読み終えて、最後の紙切れを手取る。

“後戻りは出来ない。娘の名前を忘れないように、忘れさせない為に鍵とする。”

その文章の下は怨みの言葉で埋め尽くされていた。

【side out】

氷城に眠る 4（後書き）

来週は試験の為、投稿しません。

次回投稿は再来週となると思います。

本当に申し訳ございません。

氷城に眠る 5

【side ルー】

治癒魔法を使い、柊蓮司の治療を行っていた。

その最中に気分を悪くするような濁った魔力の塊が直ぐ下の階に来ているのが分かった。

——あの地下にいた奴が動き出した、という事か。あれに写し身で勝つ事は不可能に近い……いや、不可能か。あれだけ禍々しいという言葉が似合うモノは無い。

下から感じる魔力の動きからに注意を払いながら、治療を続行する。氷と言っても過言では無い程にまで冷え切っていた彼の体は、体温を少しずつ取り戻していく。

「流々影司は恐らく動けん。あんなモノが徘徊している時に動けば死に行くのと同じだからな。」

そう呟いた時、柊蓮司の口から呻き声が漏れ出る。

何か言っているようだが、声が小さすぎて聞こえない。

「……し……の………なもと………」

「まだ喋るな。無駄な体力を消費するだけになる。」

必死に何かを伝えようとするのを止める。

体力が回復してからでないと、空気が抜けるような音しかない。

僅かに聞こえた言葉から何か分かるかとも少し聞いたが、何も分からなかった。

——意識が戻ったか、これならもう少し治す程度でいいだろう。

安堵の溜め息を吐こうとした時、背筋がゾクツとする。
廊下の方からペタペタという音がする。

小さな魔力の塊……子供が歩いているように聞こえる。

その魔力は、下から感じる禍々しいものと同質。
いや、全く同じモノだというのが分かる。

それに気付いた時、咄嗟に扉から見て死角になる位置に柊蓮司を担いで移動する。

この部屋の扉の前で魔力が止まり、直ぐに扉が開く。

「「「「「「ぱあぱ………？」「」「」「」

幾つもの声が同時に発せられる。

老若男女、全ての声が部屋に響いた。

その中でも最もはつきりと聞こえたのは少女の声。

——あの物体の核に少女を使ったという事か。父親を捜している
のを利用して浚いでもしたか？

禍々しい魔力を近くで感じて、吐き気がする。

勿論、理由はそれだけではないのだが。

「「「「「「こお………こも………ちいがつ」「」「」「」

落胆したような声が響き、ペタペタと足音を立てて去っていく。
辺り凍り付いている為、凍えるぐらいにまで寒い。

だというのに、汗がポタポタと垂れ落ちていく。

「あれの完成品は人の手に負えるモノではなかったのかもしれない。完璧な自我を持った場合は恐ろしい兵器となっていたな……………」

恐ろしいで済めば良い方かもしれない。

そんな兵器を持った者が現れれば、その者が全てを統べる王と成れただろう。

その自我を持った兵器に後ろから殺されない限りは。

そんな事を考えて、自分の手を見る。

呼吸が落ち着くのを待って、柵の治療を再開した。

【side out】

【side 影司】

部屋の中にある日記を読んでいく。

この部屋を使っていた者の娘の名前がどこかに書いていないか調べていた。

吐き気の内容しか書いていない研究日誌。

人間のする行為だと思えない方法が書かれた書物。

途中で見るのを諦めるしかないような物まで存在していた。

「……………この中に隠されてないか？」

諦めなければならぬ書物を開く。
頭の中にあるベレーットの知識を引き出しながら読もうかとも思ったが、その知識でさえ理解し切れない……いや、理解してはいけない内容だった。

これらを全て読み解き、研究をしていたであろう部屋の持ち主。その人物が本当に人間だったのか疑問に思ってしまった。
俺は手に持っていた日誌を机の上に置き、溜め息を吐く。

「絶対にある筈だ……、あれの鍵になる重要な情報^{なまえ}が。」

そう呟き、次の書物を手に取る。

しかし、開けようとして手が止まってしまふ。

ズリズリという音が廊下から聞こえてくるのだが、ペタペタという足音が途中で聞こえたのだ。

——裸足で歩いている音？ 凍り付いている城の中を裸足で？
普通じゃありえないな……。

足音に対しての警戒を強め、息を潜める。

その音が遠ざかっていくのを聞いて、手に持っていた書物を開いた。数回、同じように調べていくが何時まで経っても見つからない。

——違う部屋も調べないといけないな。あと研究に使っていた部屋で分かったのは地下室だけ、か。

あの部屋を調べるのは怖い。

今、廊下を動いているモノはもしかしたら地下にあったモノの一部かもしれない。

それに廊下を通り抜ける事が出来るかも分からない。

しかし、調べなければ対処できないのだから仕方が無いだろう。

俺は部屋の扉に手を掛けた。

【side out】

ワタシを見失う

【side 影司】

廊下の這いずる音が離れていった時に部屋を出る。

上の階に繋がる階段は凍り付いていた筈なのに、円形の穴が空いていた。

——ルーが降りて来た？ いや、ルーの魔力は感じられないから違うな。

一瞬だけ考えて、すぐさま下の階へと向かう。

下の階に行くほど寒くなっていく。

もしかしたら、侵魔は下の階にいるのかもしれない。

「鉢合わせは困るな。柊がやられたのに、俺が勝てるのか？ いや、勝てないか。」

首を横に振る。

侵魔が強かったのか、それとも相性が悪かったのか。相性が悪いと言うのは有り得ないだろう。

魔剣使いは物理と魔法の両方を防ぐ事が出来る。

その為、不意打ちでなければ防がれる。

それか……… 実力的に侵魔の方が上回っていたとしか考えられない。

前者であれば、俺でも勝てるだろう。

だが、後者だった場合は可能性が限りなく低い。

「行かないと……………」

下の階は完璧に凍り付いていた。

氷像と化していた者達は、氷で埋もれてしまっている。

火の魔力を纏う事で自分が凍り付かないようにしているのだが苦しい。

「お嬢様！」

遠くから聞いた事のある声が聞こえてくる。

その声は少しずつ此方に近付いてきているのが分かる。

そして、曲がり角である少年と会ってしまった。

「まだ生きて……………」

俺の姿を見て、絶句する少年。

既に鎧を着ておらず、身軽な格好となっている。

一般人としか思えない少年が凍り付いていない事が、不信感を高める。

「お嬢様を何処にした？」

相手が先に俺に尋ね掛けてきた。

いや、剣を向けてきているので脅すと言った方が正解だ。

「知らないって言わなかったか？」

「ネビア・ロスアという俺と同じ年頃の少女だ。見た目は……………」

舌打ちをしながら、少年は俺が知っている名前を言った。

しかし、その後が問題だった。

自分が知っているネビア・ロスアと姿が違うのだ。
全くと言ってもいい程に違う容姿を述べていく目の前の少年が信じられなかった。

「その眼は何だ？ 何か聞いたそうだが。」

「…………… 本当にネビア・ロスアって言うのか君の捜すお嬢様は？」

俺の言葉に対しての反応に嘘は無かったと思う。

少年は俺の様子を見て、知らないのかと溜め息を吐いて去っていった。

その背中が見えなくなる時まで俺は沈黙していた。

「どういう事だよ……………！？」

信じられなくて、思った事を口に出す。

そんな事しても分からない事は分からない。

俺は理解できないまま、フラフラと地下室に向かって歩き出した。

【side out】

【side ネビア】

自分の手を見て、言葉を口にする事が出来なかった。

目の前の血の鏡に映る少年と影司の会話を聞いていたのだ。

自分と全く違う誰かの容姿を言う彼。

それが信じられなくて俯いた。

「誰？ それは誰なの？ ダレ………？」

自分の記憶の中で少年は、私の事をお嬢様と言った。
だというのに、私とは違うダレかを捜している。

——ど、う………いう事なの？ 私はダレなんだろう？ ネビア・
ロスアじゃない？

血の鏡を叩き壊した。

自分の手が血で汚れるのは気にならない。

そんな事を気にするよりも、もっと大事な事が気になる。

自分自身の事が分からないなんて有り得ない。

そう思いながら、世界の記憶の中に踏み込む。

「私を捜さないと、ワタシを捜さないと………」

——まだ踏み込んでいない記憶の中から“ワタシ”を捜さないと。
私は“ワタシ”を保てないかもしれない。自分が何処かに消えてしまいかもしれない。

記憶の海の中を潜って行く。

要らない情報を除けて、深く深く沈んで行く様に潜って行く。

自分の存在する記憶を捜し続ける。

だが、ネビア・ロスアという名を持ち……容姿が同じ者など一人も存在していなかった。

この容姿を持つ者は、糸を使いこなす父親の道具となっていた者。
ネビア・ロスアという名を持つ者はウィザードであり、父親の兵器

をなっていた者。

「私がない……………」

私はポカンとしたまま、膝から崩れ落ちた。

【side out】

罪の塊 1

【side 影司】

地下室は血液や肉片が散らかっていて、一刻も早く立ち去りたいと思わせるような場所だった。
今は地下室の奥にある部屋を探し回っているのだが、血の臭いが此処まで漂っている。

「この液体……何なんだ？」

フラスコの中に溜まっている赤い液体を良く見る。
ドロリとした赤い液体は……血を連想させる。

——血液を研究していたのか？ そんな事を書いていた物は無かったぞ？

蓋をしているのだが、それを開けるのはまだ早い。
近くにある本棚に目を通していた時、アーシャという名前に眼が止まった。

筆者の名前となる場所に書いてあったのだが、よく見ると元々は違う名前を書いていた事が分かる。

その本を手に取り、最初のページを開く。
一行目に眼を通すだけで、この本が求めていた物だと分かった。

「アーシャ、それが名前みたいだけど……。」

二行目に眼を通すと、そこからは全て材料となつた者の名前となつていた。

どの部分をどの様に使用したのが詳しく書いてある。

そして、何十ページも読み飛ばしていくと気になる言葉があつた。

「材料の余つた部分の保存は彼に任せている。」……………死体の保存を行ふなんて、この時代の技術じゃ出来ないよな。」

そう口にしたのだが、辺りを見るとそんな事は言えない。

凍り付いた人達……………彼等のように冷凍保存という方法がある。

そうしないと、死体は直ぐに腐ってしまうだろう。

「今、城を凍り付かせている侵魔は元から城の研究者と関わりがある？」

本当にそうだった場合、城を襲つた事には理由があつた。

それか元より襲う為に自分を信用させていたのかもしれない。

自分の勝手な考えだと思いたいのだが、不安に駆られてしまう。

——俺の予想通りだったら、この本棚の中に侵魔についての情報があつても可笑しくない。この侵魔を倒す事が月匣を解除する条件かもしれないし……………。

しかし、この量の書物を読み解くには時間が掛かるだろう。

“アーニヤ”という名前を彼女自身に先に告げに行かなければならない。

ルーと柊が襲われてしまえば、終わりだと言えるのだから。

【side out】

【side アーニヤ】

父さんが私達、家族の為にお城での仕事を始めたはどれぐらい前の事だろう。

家に帰って来る事は無く、お金だけが届いていた。

どんな仕事をして………こんな多くのお金を稼いでいるのだろうと怖かった。

たまにお城に行かせてもらえるが、父さんとは会えないでいた。その代わりに仲良くなつた男の子と男の人がいた。

男の人は父さんの仕事仲間らしく、父さんの事を教えてくれた。

「君のお父さんは素晴らしい人だよ。」

そう言つて、顔を綻ばせる彼は人とは思えないぐらい綺麗だった。作り物のような端正な顔が少し怖かったけど、優しい人だと感じた。

その彼から聞いたのだ。

父さんの研究には私のような幼い子供の血が必要で、父さんは諦めようとしている事を。

私が研究に協力すれば、父さんは諦めなくていいと思った。

だから、彼について行つたのだ………騙されたとも知らずに。

城の中で待つている間に寝てしまった。

次に眼を開けた所は赤い液体の中だった。

あの優しかった彼と泣きそうな顔をした父さんは共にいた。

そして、私の目の前で言うのだ。

「城主様が彼女を使うように言ったそうですよ？　まあ、そのお蔭で少し完成に近付けますね。」

「……………もう、この城を去る」

「完成もされずに捨てられるコレも残念でなりません。出来れば、彼女だけでも最後に入れてしまった方がいいですよ。知らない奴に触れられるのは嫌でしょう？」

私を見て笑う彼を置いて、父さんは唇を噛み締めながら部屋から出て行った。

——入れるって何！？　此処から出して！　助けて、父さん！！

その叫びは声にならない……………誰にも届かない。

私の視界が徐々に閉ざされていき、最後には何も見えなくなっていた。

【side out】

罪の塊 2

【side ルー】

私達がいる部屋に影司が白い息を吐きながら入ってきた。そして、外に聞こえないくらい小さな声で話し出した。

「アーニヤ」という言葉が、あの………生物兵器の鍵らしい。」
「一種の賭けになるが、それしか手段は無いか。」

生物兵器の鍵。

それは起動させるものなのか、停止させるものなのか。

そのどちらでも無いのかもしれないが、これしか我等は持っていない。

「どうやって鍵を使うのか分かるのか？」

「その事に関しては書いてなかった。それとも一つ、この城を凍らせている侵魔について何だけど………生物兵器を開発していた研究者と関係あるのかもしれない。」

影司が差し出した本を手に取り、流し読みしていく。

その関係していると思った部分を読んでから、材料となった者の名前を見ていく。

適当な人間を見繕い、その人間の名前を書いているだけだと思ってしまった。

しかし、途中で我はページをめくる手を止めた。

——このページ、他のページと比べて並べ方が雑すぎる。アイウエオ順、日付順、パーツ順………違うな。もっと違う順番で書かれ

ているようだが……。

とりあえず“アーニヤ”という単語を試して見なければならぬだろう。

柊蓮司は動ける状態ではないというのを考え、我が一人で行く事となった。

影司よりも自分の方が失敗しても生還できる可能性が高い。

「“アーニヤ”というのが、どうも引つ掛かるのだがな……。」

確信は持てないのだが、間違っているような気がする。

これだけなら簡単に調べれば分かってしまうだろう。

それなら停止させる鍵ではなく、起動の可能性の方が高い。

何も効果が無いという可能性が最も高いのだが……。

あの引き摺るような音を発生させているモノの前に出た。

内臓や腸をズルズルと引き摺り、その臓物の間から飛び出ている四肢が蠢めいている。

数え切れない数の口からは様々な声が、数え切れない数の目はギョロギョロと辺りを見ていた。

そして、その塊の前に人の形をしたモノが立っていた。

塊と同じ様に臓物で作られた存在だ。

だが、それには顔があった。

無表情で顔の皮を貼り付けただけの様に見えるが、よく見ると微かに動いている。

その前に出た瞬間、何本もの腸が飛び掛かって来る。
我は魔装で払い除けようとするのだが、その禍々しい膨大な魔力には敵わない。

漏れ出ている魔力も、魔装を正常に動かす邪魔となっている。
その所為で弾き返せはするのだが、勝つ事は出来ないだろう。

「……………さっさと済ませなければ、“アーニヤ”……!!」

我の声を聞いて、悲しそうに顔を歪ませた。

そして、その顔についた口以外が全て閉じる。

我に向かって伸ばされた腸は全て地面に落ちていく。

「お父さん、助けて……………痛いよ……………」

今までとは違って、はつきりと言葉を口にしていく。

“アーニヤ”という自我が現れたのかもしれない。

「地下室に戻り、静まってくれ……………」

「痛い痛い!! 嫌だ、あんな所に帰りたくない!!」

「“アーニヤ”、静まってくれ。」

「嫌だ嫌だ!! ようやく出れたのに戻るなんて!!」

泣き叫ぶ“アーニヤ”は頭を何度も横に振る。

あの中に戻る事を拒否するのだが、今の状態なら襲って来る事は無いだろう。

自我の無い状態では大量の魔力が漏れていた。

しかし、今では魔力は全く漏れ出していない。

「なら、其処でジッとしていてくれ。」

「分かったから……………あんな所は嫌……………イヤ……………」

——これで問題は解決したと考えるべきか。起動停止させる鍵が何処かにあるとは思うのだが………氷の中という事があるかもしれないな。

我は影司達の元へと戻る事にした。

直ぐ近くで自分を見ている者の事に気付きもしないで。

【side out】

罪の塊 3

【side 影司】

あの気分が悪くなる魔力が辺りから消えていく。

そして、怪我も無く戻ってきたルーを見て……俺は安堵の溜め息を吐いた。

あの“アーニヤ”という言葉は起動を停止させるものだったのかもしれない。

「どうなったんだ？」

“アーニヤ”という自我が現れ出た。我を襲いはしなかったし、私の言う事にも従った。」

これで安全にネビア・ロスアを捜す事が出来る。

俺達が知っているネビア・ロスアと違う姿をした、少年にお嬢様と呼ばれている者。

どういう事なのか分からないが、本人から聞けばいい。

——でも、侵魔と戦う事は避けたいな。ルーなら勝てるかもしれないが、俺は火属性の魔法や魔装が使えない。柊は満足に回復してないから……戦えないだろうし。

再び意識を失った柊を見て、そんな事を考える。

だが、彼の面倒を見る事が難しいだろう。

俺と柊は氷の侵魔との戦いでは、全く戦力にならない。

「侵魔が出た場合は我が相手をする。」

「その間に俺がネビアを捜す……柊は？」

「もう置いて行って大丈夫だ、自分で無意識に火属性の魔力を出している。ウィザードになってから様々な事をやっていて、こういった事態に関しての防衛本能でもついているようだからな。」

此処に柎を置いて行くつもりようだ。

侵魔が止めを刺しに来た時が心配だが、この状態が続く方が危険だ。

「じゃあ、此処に置いて行こう。……………それに柎なら生き残りそうだし。」

俺の言葉にルーは頷き、部屋に手を掛けた。

【side out】

【side ロシア】

ズキズキと頭が痛む。

世界の記憶を見て、中から特定の人物を捜すなんて不可能に近い。その記憶から得た情報は脳の容量を軽くオーバーしてしまう。

「何で……………何処にいたの、ワタシは？」

フラフラとする。

今は目の前がほとんど見えない状態で、気分が悪い。

頭の中で疑問が湧き出ている……………その最中に魔法が炸裂した。

「はぁ、はぁ……………」

「どうやって此処に入った？」

ベレートの声が聞こえた後、誰かの笑い声がした。私はその誰かの姿を見る事も出来ない程に疲労している。そして、直ぐに目の前が真っ暗になっていった。

【side out】

【side ベレート】

俺の目の前にいる侵魔。

今、ルー達が彷徨っている氷の城に居た筈の奴だ。それが此処で……ネビア・ロスアの前で笑っている。

「ああ、本当に良かった。良い物ですね……人形というのはしっかりと主人の言う事を聞いて。お蔭で此処に入り込むのは容易でしたよ。」

「その姿は……そうか、そういう事か。世界の記憶の中に侵魔が現れる事が少し疑問だったのだな。ようやく納得が出来た……。」

写し身の侵魔は本体からの供給があつて、姿などを造っている。

記憶の中にいる侵魔は……供給が無い為、ただ単なる形骸に過ぎないという事が自然だろう。

しかし、ネビア・ロスアは魔力が膨大であるから写し身を形成できたのだと思っていた。

——形骸が出来る瞬間に魔力を供給するという事が出来れば……

…可能だ。だが、形骸の自身が形成されるのを知っていなければならない。

この侵魔は人形と言った時、ネビア・ロスアの方を見た。

もつと正確に言うならローブの顔の部分がそちらの方を向いた、と言うべきか。

「苦勞せず力を得る。素晴らしい事じゃありませんか！ 肉親に利用されていた二人の少女を、この私が利用しているだけですよ。悪い事だと思えますか？ 貴方も力を得る為に巫女を利用しているでしょう？」

「……………」

俺は魔力を手に入めて、目の前の侵魔を睨み付ける。

否定の出来ない事ではあるが、その言い方が気に喰わない。

「気分を害したのであれば謝りましょう。ですが、行っている事は一緒ですよ。拾った子供を可愛がり育て、その子が死した時に我等が行った手段が違っただけ。貴方のように体内に巫女として存在させるか……………私のように肉体を失った精神を、別の肉体に宿らせるといった方法だったかの違い。」

中身の無かった筈のローブから深い青色の髪をした青年が現れた。

そのローブを虚ろな眼をしたネビア・ロスアに被せ、彼女を俺の方に突き飛ばしてくる。

「さあ、全てを無に変えるのでしょうか？」

「貴様の狙いは何だ？ 力が欲しいのなら、今のネビア・ロスアから奪えば……………」

「彼女が成し遂げる事が出来るのかが楽しみで……………ああ、最終的

には貰っていきますから安心して下さい。」

そう言つて、笑みを浮かべる侵魔。

俺はネビア・ロスアを担ぎ、奴から離れた。

何処にいても彼女がいる限り意味が無いと知りながらも。

【side out】

虚無の光

【side ネビア】

眼を開けた瞬間、頭がズキズキと痛む。

そして、それと同時にワタシの情報が流れ込んでくる。

ネビア・ロシアという魂と、名前を失った系使いの肉体。
その二つで出来た偽りの魔王というのがワタシだ。

——ワタシを抱えているのは……ベレート。

今まで誰にも抱えられた事が無かった。

いや、兵器としてなら回収という事で運ばれた事はある。

こんな風に丁寧に扱ってくれたのは初めてだと思う。

——自分は“彼”の人形だという事を思い出したけど、ワタシがやる事は変わらない。このベレートという魔王との契約もあるんだから……今更、止めるだなんて言えない。

ネビア・ロシアという存在が兵器にされた理由である能力。

系使いの能力は死体を無理やり糸で動かしていたのだが、このネビア・ロシアの能力は生命のある人間を操る毒を体内に射ち込む。

肉体に干渉する糸を放ち、精神に喰い込む毒牙で操るとというのが今のワタシの能力。

世界結界を通して、外の世界に張り巡らせている糸をより強力な物にする。

それだけで体力がガリガリと削られてしまうが、仕方が無い事だろ

う。

ワタシは“彼”の人形だから、無駄な事に時間を掛ける事は許されない。

「もう……遊んでられない。早く成し遂げてしま……。」

ワタシの口は手で塞がれてしまい、言葉を続ける事が出来ない。

此方を見ないで静かに頷く彼を見て、ワタシはゆっくりと目を閉じた。

【side out】

【side ベレート】

ネビア・ロシアが呟いた言葉を聞いて、俺は頷いた。

安心したのか眼を閉ざした彼女の姿を見て、小さく溜め息を吐く。

——あの侵魔の思い通りというのは気に喰わないが、レジェの生きる事が出来る世界の為だと考えれば……。

俺は特別な魔法陣を描いた所に立ち、魔力を体から放出させる。

魔力を吸い込んでいく魔法陣は白い光で光り輝いていく。

その白い光の渦の中心に立っていると、辺りの景色が見えなくなる。

「“災厄の魔王”という名に従え、この世界の全てよ。世界に虚無を齎すのは我なり。」

言葉を発した瞬間、光が急激に強くなっていく。
静かに光の中心で俺は魔力を放出し続ける。
それだけで世界を白で染め上げられるのだから簡単な話だ。

——さあ、成し遂げるとしようか。

【side out】

アンゼロット達が率いる多くのウィザード。
凶悪な生まれたばかりの侵魔の群れ。
そして、侵魔を生む繭が……地上に溢れていた。

一般人が無関係でいられる状況ではなく、何もしなければ死ぬ世界。
この世界は今、そういった状況だった。

ウィザードに保護を求め、ウィザードと侵魔の戦いに巻き込まれる。

そして、今……地の底から放たれる白い光を見て、誰かが呟いた。

「こんな物、こんな状況、夢に決まっている……」

そういった言葉を言い放ち、人は膝を地についた。

虚無の光（後書き）

少しの間、投稿が出来ない状況になるかもしれません。
その為、来週の投稿が無いかもしれません。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843o/>

夜を駆ける魔法使い

2011年9月8日20時32分発行